

Fiscal Year 2016

Fiscal Year 2016 Daisen Municipal Junior High School Student Overseas Deployment Project



3 to 12 January 2017

平成28年度
大仙市立中学校生徒海外派遣事業
オーストラリア研修 報告書

平成28年度大仙市立中学校生徒海外派遣事業派遣生徒一覧

No.	学校名	学年	生徒氏名	性別	No.	学校名	学年	生徒氏名	性別
1	大曲	2	小山杏奈	女	11	大曲南	2	佐々木万穂	男
2	大曲	2	鈴木新大	男	12	西仙北	2	佐々木玲央	男
3	大曲	2	高橋明花	女	13	西仙北	2	寺山麻奈	女
4	大曲	2	高橋凜子	女	14	中仙	2	明平風花	女
5	大曲	2	竹田紫乃	女	15	中仙	2	熊谷尊登	男
6	大曲	2	新潟千夏	女	16	中仙	2	齋藤 咲	女
7	大曲西	2	小松夏奈	女	17	協和	2	秋山凜音	女
8	大曲西	2	今野伶音	男	18	仙北	2	伊藤春野	女
9	大曲南	2	吉川晴菜	女	19	仙北	2	田村香帆	女
10	大曲南	2	菊池由佳	女	20	太田	2	藤澤希築	男



事前説明会

10月5日(水) PM 6:00~7:30 ・派遣生等紹介 ・教育指導課長より ・諸連絡(教育指導課) ・前年度参加者より ・パスポート取得、旅行準備について(日本旅行) ※海外旅行お伺い書(パスポートコピー貼付け)の提出について ※FARMSTAY QUESTIONNAIRE(ファームステイ質問書)・保険申込書の提出について	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月16日(金) PM 6:00~7:15 ・ファームステイ及び日程についての最終確認等(日本旅行) ・緊急連絡先等提出(教育指導課教育研究所)	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室

事前学習会

11月4日(金) 第1回学習会 PM 4:30~6:30 ・CIRによるオーストラリアの文化等紹介 ・自主研究テーマの設定 その他	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月2日(金) 第2回学習会 PM 4:30~6:30 ・自主研究テーマの提出(面接により、自主研究テーマを広げる・深める) ・英会話レッスン(自己紹介・機内・税関・ショッピング・ホテル・道をたずねる・乗り物にのる) ・出入国カードの記入について	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月27日(火) 第3回学習会 結団式 AM 9:00~PM 4:00 ・自主研究のための事前リサーチ活動・アンケート等準備 ・結団式 ・ファームステイグループごとの打ち合わせ(日本文化紹介準備活動等) ・作成レポートについて(様式、枚数、締め切り等) ・報告会について	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室

オーストラリア海外研修

1月3日(火)~1月12日(木)	場所: オーストラリア(ケアンズ)
------------------	-------------------

報告会・解団式

2月14日(火) 報告会及び解団式 PM 3:00~4:45 ・代表者感想発表 ・グループに分かれて「グループ内個人発表」 ・グループ協議	場所: 仙北ふれあい文化センター
--	------------------

結団式

派遣生徒代表誓いの言葉

私は小学校6年生の頃、国際教養大学へ見学に行きました。そこでは、全員が英語で会話していたり、日本人と外国人と一緒に生活していたり、自分のすぐ身近なところにもグローバルな世界を見ることができ、自分の狭かった世界観が一気に広がるように感じました。

私は英語の必要性を知り、現地の生の英語に触れてみたい、異国の文化を体験してみたいと思い、今回この研修に応募しました。

私はスポーツにも興味があり、ハピネッツや野球の観戦によく行きます。秋田の人はスポーツを楽しんでいるし、盛り上がっているのを見てきました。しかし、そんな秋田の素晴らしさに気付いていない人も多いと思います。なぜなら、秋田の人口は年々減少しているからです。そこで、私は秋田の素晴らしさをもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思い、スポーツに注目しました。

オーストラリアはスポーツ大国と聞いたことがあります。休日は家族そろってスポーツを観戦しに出かけることが多いそうです。スポーツを通して地域が活性化されているのではないかと思います。オーストラリアに行って、ホストファミリーや地域の方々と交流を深め、オーストラリアのスポーツマネジメントの在り方を学び、大仙市や秋田県の活性化のヒントを見つけたいです。

今回ここに集まった20人は、全員が大仙市の未来を担う20人です。今までの学習会を通し、私はより強くそう感じるようになりました。私たち20人は今回の研修でたくさんのことを学び、自分の目標をより高いレベルで達成して、ひとまわりもふたまわりも成長した姿で帰ってくることを誓います。

最後になりますが、大仙市教育委員会の皆様、そして家族には、今回の研修に参加させてくださったことをとても感謝しております。感謝の気持ちを忘れず頑張ってきてたいと思います。



大曲西中学校 今野 伶音

私は大仙市の中学生の代表として、今回のオーストラリアでの研修に参加できることを心から喜ばしく思います。

私が、このオーストラリア研修に参加するに当たって、是非やり遂げたいことが二つあります。一つは「しっかり学ぶ」ということ、もう一つは「楽しむ」ということです。

一つ目の「しっかり学ぶ」では、自分のテーマである「どのようにしたら秋田に大勢の観光客がくるか」ということをきちんと見て考えてきたいと思います。オーストラリアの人気スポットやファームステイなどの訪問先では、人を呼ぶための工夫はどのようなものであるかをしっかり調べたいと思います。

今回参加している20人は全員がそれぞれのテーマをもっています。一人一人、そのテーマからの視点で、オーストラリアと日本の文化の違いを発見できるように、この限られた貴重な時間の中で学んできたいです。

二つ目の「楽しむ」は、経験の少ない飛行機と、初めての外国を楽しみたいということです。飛行機は幼い頃に乘ったことがあります、記憶はあまりありません。私の父が今年の春にテニスの大会で韓国へ行ったときは、飛行機が楽しかったと言っていました。テンションを上げすぎて周りのお客さんに迷惑をかけないように、空の旅を楽しみたいです。そして初めての外国では、分からないことばかりだと思うので、みんなで助け合いながら頑張りたいです。

このように想像するだけで、ワクワクとドキドキで胸がいっぱいです。しかし、私たちが最優先するのは健康を維持し、安全に笑顔で大仙市に帰ってくることです。私たち研修生は、学び、楽しみながらもマナーやルールをよく守り、有意義な研修にすることを誓います。



太田中学校 藤澤希築

H 2 8 年 度 海 外 派 遣 生 徒 自 主 研 究 テ ー マ 一 覧

No.	中学校名	学年	生 徒 氏 名	性別	自主研究テーマ
1	大 曲	2	お やま あん な 小 山 杏 奈	女	自分をよく見せるコミュニケーションとは？
2	大 曲	2	すず き あら た 鈴 木 新 大	男	大切な水資源、ムダをなくすにはどのようにすればよいか？
3	大 曲	2	たか はし はる か 高 橋 明 花	女	ゴミの量を減らすために私たちにできることは何か？
4	大 曲	2	たか はし り こ 高 橋 凜 子	女	食文化や郷土料理を引き継ぐためにどんなことができるか？
5	大 曲	2	たけ だ し の 竹 田 紫 乃	女	日本の和食、秋田の郷土料理をもっと世界に広めるために、自分たちができることは何か？
6	大 曲	2	にい がた ち なつ 新 潟 千 夏	女	町おこしや人口減少への工夫について。
7	大 曲 西	2	こ まつ か な 小 松 夏 奈	女	今ある自然と共存していくためには？
8	大 曲 西	2	こん の れ ん 今 野 伶 音	男	大仙市をスポーツで活性化するには？
9	大 曲 南	2	き かわ はる な 吉 川 晴 菜	女	伝統的な芸能や祭りを守り、つないでいくためには何をすればよいか。
10	大 曲 南	2	きく ち ゆ か 菊 池 由 佳	女	オーストラリアから学ぶ！地域の魅力を伝えるには？
11	大 曲 南	2	さ さ き かず ほ 佐 々 木 万 穂	男	現地発祥の文化を守り、残していくためにはどうするべきか？
12	西 仙 北	2	さ さ き れ お 佐 々 木 玲 央	男	どのようにすれば、水を使用する量を抑え、かつ人々が安心、安全、快適に暮らすことができるのか？
13	西 仙 北	2	てら やま ま な 寺 山 麻 奈	女	伝統行事以外にも大仙市に観光客を呼び込むには？
14	中 仙	2	あき ひら ふう か 明 平 風 花	女	大仙市で継承されている伝統芸能の素晴らしさを次世代に伝えるためには？
15	中 仙	2	くま がい たか と 熊 谷 尊 登	男	海外の人々にもっと日本の製品を買ってもらうにはどうすればよいか。
16	中 仙	2	さい どう さき 齋 藤 咲	女	理想的な朝食とはどうあるべきか。
17	協 和	2	あき やま り のん 秋 山 凜 音	女	限りある水資源のために私たちができることは何か？
18	仙 北	2	い どう はる の 伊 藤 春 野	女	海外でも活躍することができる日本人になるためには？
19	仙 北	2	た むら か ほ 田 村 香 帆	女	次世代に郷土料理を伝えていくためにはどのようなことをすべきか？
20	太 田	2	ふじ さわ き ずく 藤 澤 希 築	男	どのようにすると、秋田県に大勢の観光客が来るのか？

事前学習会の様子

[11月4日]



初めての学習会は、仲間づくりのアクティビティーでスタート。最初は緊張の表情が、段々笑顔に変わっていきます。



ジェスチャーのみで積極的にコミュニケーションを図るのがコツです。「どちらの誕生日が先？」



グループ内でお互いの自己紹介をしています。好みが似ているかどうか、相手を何と呼べばよいかを確認。



友だちを他の仲間に紹介しています。

This is Kazuho.
He likes Kendo.
He likes dance,
too.



アイビー先生が、オーストラリアの文化全般について教えてくれました。時々クイズも出されて、グループの皆と一緒に考えます。

() is the capital city of Australia.

() is the biggest city of the country.

Cairns is in ().

みなさんは答えがわかりますか？

[1 2 月 2 日]



アイビー先生



アンドリュー先生



ミサ先生



タラ先生



タミー先生

第 2 回 学 習 会 で は 英 会 話 の レ ッ ス ン を 行 い ま し た 。 講 師 は 、 大 仙 市 内 の 小 ・ 中 学 校 に 勤 務 す る 5 名 の 先 生 方 で す 。 引 率 の 牛 木 先 生 も 加 わ り 、 集 中 レ ッ ス ン で す 。



手荷物検査係や店員役になった講師の先生方から、様々な質問が出されます。クリアできると次の質問ブースへと移動。質問役が友だちだと少しリラックス。カフェのブースではメニューを見せられ、「う～ん、どれもおいしそう…」と、本気で迷ってしまいます。



こちらはおみやげ店のブース。何を何個買うのか伝えるのは意外に大変！値段の計算と支払うお金の種類もあり、難関です。



オーストラリアの税関は、食品持ち込み制限が厳しいことで有名。荷物の中から見慣れないものが出てきて、突っ込まれてしまいました。



出入国カードが配られました。入国審査や税関での会話を練習した後だけに、実感が湧いてきます。



友だちに確認しながら慎重に書きすすめています。「これがないと行けない！」と思うと、書くのも緊張します。

[12月27日]

各課へのインタビュー



研究テーマに関わる大仙市の状況をリサーチするために、市役所関係課へインタビューに出かけます。関係課スタッフの皆さんも、テーマに関連する資料を準備し、様々な質問に丁寧に答えてくれました。

水資源や自然環境の保護・保全については、上水道課と環境交通安全課の方々からお話を伺いました。



観光や街づくりについての大仙市の施策を、観光交流課・総合政策課のスタッフから伺います。



大仙市の食事情については、農業振興課の皆さんがわかりやすく説明してくださいました。



仙北支所の市民サービス課・文化財保護課で、担当の方々から伝統文化について教えてもらいました。



総務課スタッフが、接客対応の視点から、コミュニケーションマナーについてお話してくださいました。



大仙市をスポーツで元気にする方策について、スポーツ振興課のスタッフからヒントをいただきました。



日本製品が優れている点や理由について、教育委員会総務課や教育研究所の方々からお話を伺いました。

結団式の様子



一人ずつ自己紹介し、研究テーマの紹介と海外研修への期待を述べました。緊張しますが、大仙市の中学生を代表して派遣される「責任感」や「自尊心」が湧き上がります。



家族も参加してくれました。このような体験ができるのも、家族のお陰です。1週間後には出発で、不安もありますが、それ以上に楽しみな気持ちが大きくなってきました。



大曲西中学校の今野さんと太田中学校の藤澤さんが、派遣生徒を代表してあいさつをしました。



「一見に価値をつけるための百聞」として、事前学習から意欲的に取り組んできた派遣生の皆さんをねぎらうとともに、海外研修では「全地球的にものごとを考える思考や姿勢」を大事にしてほしいと、教育長が激励してくださいました。

ファームステイグループでの話合い



ファームステイグループが決まり、お世話になる家族についての情報を皆で確認します。



「おみやげはどうする？」
「どんな日本文化を紹介しようか？」
楽しい相談の時間です。



学生交流の時に全員で披露する日本文化紹介についての話し合い。司会進行役が皆の意見を確認しながら決めていきます。PPAPとドンパン音頭に決定！



現地で働く日本人の方々に質問したいことを整理しています。

自分の将来の夢の視点からも、聞いてみたいことがどんどん浮かんでいきます。



アイビー先生による効果的なプレゼンテーションのコツの伝授です。

“お客さんは、パワーポイントスライドではなく、「あなたのお話」を聞きにくることを忘れずに。”



昼食時間もみんなで自然に集まって食べています。和気あいあいの雰囲気です。



活動の合間には皆で集まりにぎやか。もう既に仲よく過ごしています。

オーストラリア研修を終えて

No.1 大曲中学校 二年 小山杏奈

I はじめに

私の家族は昨年の一月に、二人の韓国人の女子学生をホストファミリーとして迎え入れました。私は彼女たちとの生活を想像し、その日が来るのを非常に楽しみに待っていました。しかし、いざ面と向かってコミュニケーションをとろうとしても、頭が真っ白になってしまい、会話の成立する唯一の手段である英語で話そうとしても、自分が言いたいことを思うように表現できず、とてももどかしい思いをしたのでした。

その時の経験が、今回私がこの研修に参加しようと思ったきっかけの一つです。私は将来英語に関する仕事に就きたいと考えていますが、自らがホストファミリーとなったときの経験を通じて、自分の将来の希望を叶えるためには自分の英語力・コミュニケーション能力をもっとレベルアップさせなければならないことを痛感しました。

「実際に海外に行き、英語で積極的に会話をし、異文化に触れる。これらは現在の私の英語力やコミュニケーション能力を試す良い機会であり、私の人生観をきっと変えてくれる。」私は強くそう思いました。

II 研究テーマと設定理由

「自分をよく見せるコミュニケーションとは？」

外国の人々は日本人を「曖昧で、自分を見せようとしめない控えめな人」と思っているようです。日本人がそのように思われる原因は、会話などのコミュニケーションのとり方にある、と私は考えました。外国と日本のコミュニケーションのとり方を調べ、それぞれの長所と短所を比べることで、自分をよく見せるコミュニケーションのとり方を知り、私たちの生活に生かすことができると考え、この研究テーマを設定しました。また、このテーマはインターネットでは調べられません。自分自身が現地で異文化に触れ、直接コミュニケーションをとらなければ解決できないことであるのもこの研究テーマを設定した理由の一つです。

III 研究方法/分かったこと

1 研究方法

- ・現地の方との会話やインタビューなどのコミュニケーションを積極的にとり、それを日本でのコミュニケーションのとり方と比較する。

2 分かったこと

(1) オーストラリアの人々のコミュニケーションの特徴

オーストラリアで現地の方々たくさん会話をするうちに、気付いたことが多くありました。その中でも印象深かったものを二つ紹介します。

現地では、誰もが必ず私の目を見て会話をしました。私は目を合わせて会話をするのが苦手なので、少し視線を逸らしたり、目を泳がせたりしていました。すると、「大丈夫？具合が悪いの？」と心配されたことがありました。このとき、私は自分の失敗に気が付きました。

→目を合わせることは、会話をするうえで重要なことの一つ。

オーストラリアの人々は皆フレンドリーで、全く知らない他人でも、少し話すだけであっという間に友達になることができます。写真の男性は初めて会った方でしたが、彼の経営する店で話すうちに仲良くなり、彼は初対面の私と気軽に写真を撮ってくれました(写真①)。一瞬でしたが、とてもよい思い出です。また、どの店でも会計をするときは「How are you?」から始まります。そこから会話が弾む人を、私は何人も見ました。ホストファザーのHansさんは、どの店に行っても店員と友人関係にありました。



↑写真①

→この「How are you?」は、人々を繋ぐ大切な言葉。

また、オーストラリアでは、はっきりした表現を求められることが多くありました。例えば、「のどは渴いていますか？」と聞かれ、「うーん、少しだけ」と、遠慮気味に答えると、「YES or NO?」と言葉を変えて再び質問されました。日本人は曖昧な表現をしても、互いに言いたいことを察しあうことができます。しかしそれは、そのような環境で育ったからこそできることです。外国では、それは通用しないということが分かりました。

→自分の言いたいことをはっきりとさせることも大事なことです。

IV 様々な方へのインタビュー

1 オーストラリア人と日本人の視線の違い

まずはオーストラリア人(AUS:ホストファミリー、現地の友人など)と、オーストラリアで活躍する日本人の方々(JP:写真②)への同じ質問に対する答えを紹介します。

Q. 貴方は誰かと会話をするとき、意識していることはありますか？

A. AUS-目を合わせることを意識しています。

JP-笑ってごまかさないように意識しています。

Q. 謙遜することに対してどう思いますか？

A. AUS-自慢げになるよりはよいと思います。日本では謙遜を大切にしているけれど、外国ではそこまで大切にされていません。そのバランスが大事ではないでしょうか。

JP-褒められたら素直に「ありがとう」と言うべきです。謙遜は素敵な日本文化ですが、外国では対応を変えた方がよいでしょう。



↑写真②

2 日本人の方へのインタビュー

次は、オーストラリアで活躍する日本人の方々へのインタビューです。

Q. 外国人と会話をするとき、大切にしていることは何ですか？

A. 国によって色々な考え方や文化があります。それらを全て受け入れることを大切にしています。

- Q. 外国(オーストラリア)に来て、困ったことは何でしたか？
- A. 会話をするとき、話のつながりができませんでした。また、多様な文化、考え方があり、日本とのギャップがあったのも困りました。
- Q. もし、自分の伝えたいことをうまく言い表せない場合はどうしますか？
- A. ジェスチャーをつけて相手が分かるまで説明をします。「もういいや」と自分から引き下がり、諦めずに粘り強く話します。優しい人ばかりなので、最後まで話を聞いてくれますよ。



- Q. オーストラリアでよく見るボディーランゲージを教えてください。
- A. 会話の中で、「そうであることを願うよ」という意味で使われるこのボディーランゲージをよく見ます。(写真③)

←写真③

V まとめ

オーストラリアの人々は日本人とは大きく違うコミュニケーションのとり方をするので、驚くことや戸惑うことが多々ありました。と同時に、その一つ一つが大きな学びとなりました。日本人のコミュニケーションは一般的に「曖昧で、はっきりしない言い方をし、自分をよく見せようとしない」のに対し、オーストラリア人のコミュニケーションは、「はっきりととしていて、自分をよく見せようとする」と同時に、「相手のこともよく見ようとする」という印象を受けました。日本人同士では、今までのような人との関わりでも大きな問題はないと私は思います。私たちは、お互いの言いたいことを察し合うことができます。しかし、外国人とのコミュニケーションにおいてははどうでしょう。今のままでは、言いたいことを思ったように相手に伝えることができないのではないのでしょうか。

自分をよく見せるには、「我、かく考える」、つまり、自分の意見をはっきり言うことが大切だと感じました。さらに言えば、相手の目を見て、相手のこともよく見ようとすることも必要です。私は、まずは自分自身の人との関わり方を見直し、今回学んだことを少しずつ身に付け、様々な人にそれを広めていきたいです。そしていつか、大仙市の国際的なコミュニケーションの活性化へと繋げ、大仙市を世界に誇れる街へと成長させることに貢献したいと思います。

VI エピソード

1 家族紹介

ホストマザー Marita Vossさん

ホストファザー Hans Vossさん

犬や鳥などのペットに加え、鶏、アヒル、時期によっては豚や牛も飼育し、趣味で農場を営んでいる方々です。



↑ホストファミリーの二人

2 ファームステイでの出来事



↑ドイツのボードゲーム

ホストファミリーの二人は、「私たちのことをPapa、Mamaと呼んで、本当の家族といるようにくつろいで過ごしてね。」とってくださいました。とても優しい方々で、緊張していた気持ちもほぐれました。二人はドイツ出身なので、毎晩ドイツのボードゲームをして楽しみました。

付近の街にある、アメジストで有名なThe Crystal Caves、チョコやチーズを作る工場のGallo、様々なものが低価格で売られているBIG Wなど、色々な所に連れて行ってくださいました。中でも私が一番気に入ったのが、Granite George Nature Parkという自然公園です。ワラビーやクジャク、馬やアヒル、蛇やトカゲなどが自然の中でのびのびと過ごしている公園で、餌をあげたり、それらの動物にたくさん触れたりすることで、オーストラリアの自然を身近に感じることができました。



自然公園の動物たち



また、三日目には私たちが作った味噌汁とご飯で、皆で夕食を食べました。二人はお米を日本式で食べるのは初めてだったようで、食べ方が分からず、味噌汁に入れて、「猫まんま」のようにして食べていました。それでも、「美味しい」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。



↑日本食を食べる二人

3 オージーキッズとの交流

↓オージーキッズ



滞在四日目に、オージーキッズと交流をしました。日本人とのハーフの子どもが多くて、思ったよりも英語を使う機会が少なかったです。外ではチームラフトビルドや障害物レースをし、夜に皆でさよならパーティをしました。私たちは出し物としてピコ太郎のPPAPを披露しました。子どもたちは歓声をあげ、中には一緒に踊ってくれた子もいました。どこの国でも、子どもは皆同じ心をもっているのだなと思いました。

その後、有名な土ボタルを鑑賞しに行きました。途中、ロッジで働く泰斗さん、亮太さんに、土ボタルの光が青く見える人は通

常の人間の目を持っていて、緑色に見える人はより動物的な目を持っているという豆知識も教えてもらいました。初めて見た土ボタルは、本当にきれいで、出来ることならまた観に行きたいと思いました。

4 キュランダとケアンズの散策



↑↓キュランダ鉄道の絶景



五日目はキュランダに向かい、その文化体験施設でアボリジニショーを見たり、水陸両用車に乗ってオーストラリアの動植物の紹介をしてもらったりしました。また、キュランダ村では友達と買い物をしたりして、初めての自由行動を楽しみました。キュランダからケアンズへ向かう鉄道では、巨大な滝や日本の番組のオープニングで使われていたという絶景も望むことができました。

↓アボリジニの演奏



ケアンズでは引き続き自由行動をしました。ナイトマーケットという所が一番楽しかったです。様々な店があって、それぞれの良さを楽しんで買い物をしました。驚いたのは、キュランダでも、ケアンズでも、日本語を話す現地人が多くいたことです。私たちの言いたいことをしっかり理解してくれている気がして、とても話しやすかったです。

5 フランクランド島の観光

六日目はフランクランド島の観光をしました。川から海へ出るところで水の色が変わり、はっきりとした「境界線」のように見えることが不思議でした。

島では初めてシュノーケリングを体験しました。浅瀬でも足元には珊瑚があって、普段はテレビなどでしか見ることができない光景がすぐそこにあることに感動を覚えました。海はきれいなエメラルドグリーンの色で、天気もよく、そこにいるだけで本当に気持ちがよかったです。

昼食後に島を散策し、ナマコやヒトデなどの動物に直接接触したことも心に残りました。島のどこを切り取っても絶景で、どれも忘れがたい思い出です。



↑フランクランド島の様子

VII 終わりに

私はファームステイ中に、ホストマザーであるMaritaさんから、大切なことを教えてもらいました。

① **Family is always the first thing in your life.**

家族は誰にとっても人生において一番大切なものです。

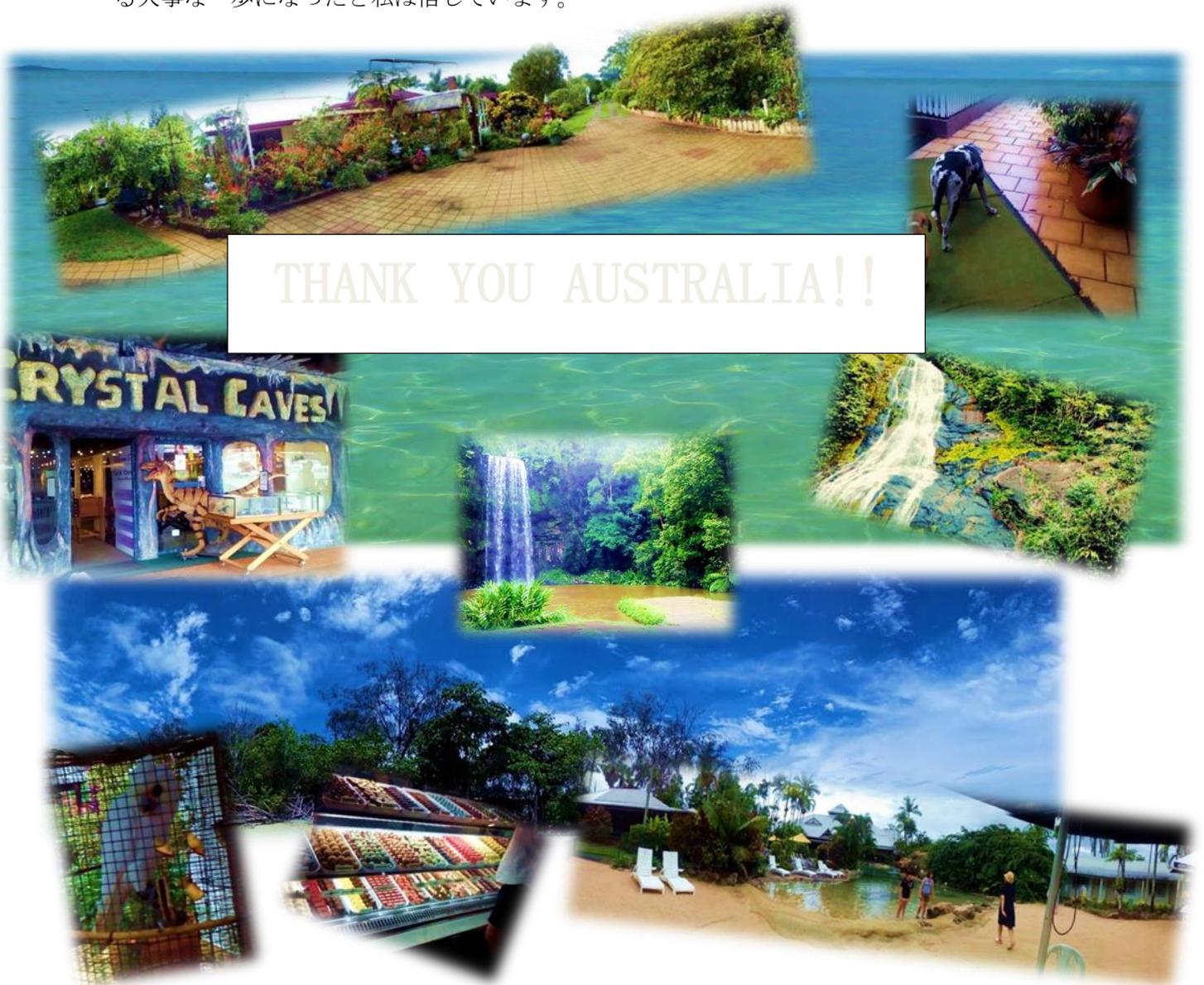
② **If you don't try, you never learn.**

挑戦しなければ、そこに学びはありません。

③ **People can take money or something you have, but nobody can take your memories. It's in your mind, and your heart.**

人はお金や貴方の持っているものを奪えますが、誰も貴方の記憶は奪えません。それは貴方の心の中にあるのですから。

私はこの言葉を受け、この研修に参加させてくれた両親に感謝するとともに、誰にも奪えないこの記憶をずっと大切にしていきたいと思いました。そして、これからもたくさんのことを学ぶために、様々なことに挑戦していきたいと思います。この研修は、間違いなく私の将来へつながる大事な一歩になったと私は信じています。



オーストラリアレポート

No. 2 大曲中学校 鈴木 新大

I はじめに

僕は、英語がとても好きです。小学生の頃は「楽しい」英語の学習だったのが、中学生になって「本格的」な英語の学習になりました。学習内容が深くなるにつれて、だんだんと海外への興味がわいてきました。そして生の英語に触れてみたい、自分の英語は伝わるのかと思うようになり、今回の海外派遣研修に応募しました。

僕には初めての海外で、不安な気持ちもありましたが、それよりも期待のほうが大きかったです。日本を外から見てみたいと思いました。

II 研修テーマ

「大切な水資源、ムダをなくすにはどのようにすればよいか？」

1 テーマ設定の理由

ニュースなどで、オーストラリアでは水不足に悩まされているとキャスターが言っているのを見ました。日本ではあまり聞かないことなので、びっくりしました。少し調べてみると、オーストラリアでは雨量が少なく、砂漠地帯が多いことが理由のようでした。水不足について現地の人はどう思っているのか、どのような対策をとり生活しているのかを知りたくなりました。また、自分はシャワーを出しっぱなしにしてよく注意されることがあるので、自分の生活を変えるよいチャンスかもしれないと思いました。

2 検証方法

- (1) 大仙市の水事情を調べるために、大仙市役所の担当の人に質問をする。
- (2) 事前にアイビー先生にオーストラリアの水事情について質問をする。
- (3) 現地に行ってステイ先のホストファミリーに質問をする。

3 検証結果

- (1) 大仙市では、地下水が豊富なため、地下水を利用しているところもある。しかし、夏に水が不足してくると、学校や病院などの大きな施設に節水を呼びかけているそう。
- (2) オーストラリアでは、蛇口からの水を少しの間でも出しっぱなしにしないという習慣があるそう。また、貯水池の水位が下がっているときには、政府から車を洗うことや芝生に水をやることを禁止されることがあるそう。
- (3) オーストラリアで水を使うときのルールは次の三つ。
 - ① シャワーは一人3分まで使用することができる。
 - ② 歯磨きや洗顔の時、できるだけ水をこまめに止めること。
 - ③ トイレは、できるだけレバーの下のほうで流すこと。※はじめは「しっかりできるだろう」と思っていたのですが、意識しないと水を出しっぱなしにしてしまい、少し苦労しました。

日本では、ペットボトルの水1本が100円ぐらいだが、オーストラリアでは1本200～300円ぐらい。日本の2倍～2.5倍の値段がする。また、水のタンクをたくさん見かけた。僕のファームステイ先であるBORGARTさんのお宅にも六つのタンクがあり、これに雨水をためてトイレなどに利用するそうだ。雨が全く降らなくても3か月は保つそうで、川の水を利用する家もあると聞いた。



タンクの写真

※水の値段は少し高いと思いました。

4 まとめ

オーストラリアの人たちは、日本人よりも節水意識が高く、水を大切に使用していることが分かります。それぞれの家庭でルールを決め、水を無駄なく使用する工夫がなされていました。

水は私たちの生活に欠かせないものです。だからこそオーストラリアの人たちのように、少しの水でも大切にするという取組を参考にし、節水を心がけて生活をしていかなければいけないと思いました。普段の生活を振り返ってみると、歯を磨いている時に水をずっと出しっぱなしにしたり、お風呂の時にシャワーを出しっぱなしにして体を洗ったり、反省しなければならないことがたくさんあります。少し意識するだけで節水できることがたくさんあります。今すぐにも取り組んでいこうと思います。

オーストラリアの人たちが様々な工夫をしながら無駄なく水を利用している姿、そして一人一人が意識して節水対策に取り組んでいる姿を大仙市の人たちに伝え、少しでも節水意識をもつ人が増えるよう努めたいと思います。

Ⅲ 海外で働いている日本人の方へのインタビュー

海外で働いている日本人の児玉さん、日下部さん、黒田さんにインタビューしました。

Q なぜオーストラリアに来て働こうと思ったのですか？

A 日下部さん 「ダイビングが趣味なので、ダイビングをしてみたかったことと、好きなことを仕事にしたかったから。」

A 黒田さん 「修学旅行で海外に行った時の通訳の人にあこがれて、この仕事に就こうと思ったから。」

A 児玉さん 「英語の勉強をしたかったことと、オーストラリアの印象がよかったことから。」

Q オーストラリアに来て困ったことは何ですか？

A 日下部さん 「英語を学習したがその学習では足りなかったこと。」

A 黒田さん 「食文化、考え方、オーストラリアの文化などの違いに苦しんだことと、英語を話すこと。」

A 児玉さん 「文化の違いや英語。特に学校では教えてくれない専門用語。」

Q 子どもの頃やっておけばよかったことは何ですか？

A 日下部さん「英語と勉強。私は水泳部だったのでダイバーとして困ることはなかった。」

A 黒田さん 「英語と自国（日本）の良い点を見つけること。」

A 児玉さん 「英語と将来のことをよく考えること。」

黒田さんが言っていた「日本の良い点を見つけること」は、今回オーストラリアに来てみて自分も同じように感じました。これから日本の良い点をたくさん見つけていきたいです。

また、皆さんが共通して「英語は勉強しておいたほうがよい」とおっしゃっていたので、英語の力を高めるために、今まで以上に努力を重ねていきたいと思います。そして海外で通用する英語力を身に付けていきたいです。



インタビューした日本人の皆さん

IV エピソード

1 ファームステイ

午前4時頃にケアンズ国際空港に到着。そこからバスでマンガリーに行きました。ホストマザーと面会後に、車でステイ先となるお宅に行きました。ホストファミリーは、お父さんとお母さん、娘と孫の4人家族です。みんなとても明るくて優しい家族でした。ペットは犬が3匹、馬が1頭、金魚が5匹と、とてもにぎやかでした。

ホストマザーがピクニックに連れて行ってくれ、周辺にある三つの滝を案内してくれました。その後、他のステイグループがお世話になっているお宅に遊びに行き、一緒にお昼ご飯を食べました。ステイ中の出来事を話し合ったり卓球をしたりしてとても楽しい時間を過ごすことができました。夜には、皆でホストファミリーに日本の文化をたくさん紹介しました。日本からのお土産を渡しながら、日本の文化について伝えました。特に折り紙が好評で、みんなで鶴や兜を折りました。喜んでくれてとてもうれしかったです。



滝の写真

ショッピングで印象に残っているのは、お土産としてブーメランのマグネットを買ったことと、ホストファミリーが連れて行ってくれた大きなショッピングモールです。日本のショッピングモールと違って、倉庫のようなところに商品が山積みでした。驚いたのは、お菓子のパックがとても大きくて、入っている量もとても多かったです。お菓子に限らず、一つ一つのパックに入っている量がとても多くて驚きました。値段は均一ではないけれど、日本でいう100円ショップのようなお店もありました。



BORGARTさん夫妻と記念撮影

ファームステイ先での最後の夜は、写真を見せながら自分の家族を紹介したり、各自の研究テーマやオーストラリアについての質問をしたりしました。

ホストマザーが作ってくれた料理は毎食とてもおいしくて、ソーセージ入りのカレーやパスタなどが好評でした。中でも僕が一番おいしかったのはガーリックとバターがたっぷりのガーリックトーストです。口の中に入れるととろけるようにガーリックが出てきて大満足でした。とても明るい家族の皆さんと有意義な時間を過ごすことができました。

2 オージーキッズとの交流

オージーキッズとの交流では、一緒にお昼ご飯を食べたりダンスをしたりして楽しみました。小学生から高校生まで幅広い年齢層の人たちとの交流でした。

3 レインフォレストेशन

朝マンガリーを出発してから、キュランダ高原という山間部に行きました。まず訪れたのが、キュランダレインフォレストेशनという自然公園です。そこで「アーミーダック」と呼ばれる水陸両用車に乗って熱帯雨林の中に行きました。日本では見たことのない植物がたくさんあってびっくりしました。

アボリジニ文化体験もしました。ブーメランを投げたり、ダンスショーを見たりしてアボリジニについて理解を深めました。アボリジニの吹いた

楽器の音色が、笑いカワセミの鳴き声やカンガルーの動きを象徴していて、とても印象的でした。

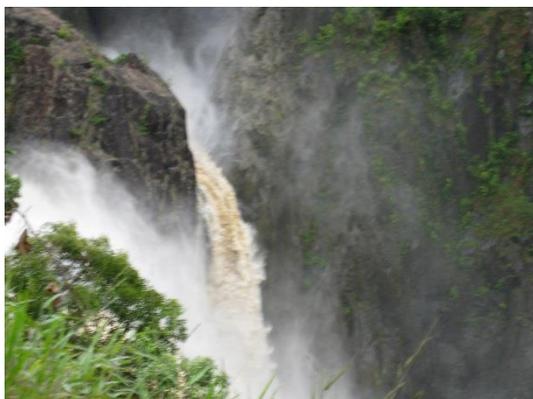


アボリジニ

4 キュランダ鉄道

日本の「世界の車窓から」という番組でも取り上げられたキュランダ鉄道に乗って、ケアンズまで下りました。途中の景色がとてもきれいでした。

電車に乗っていると滝が見えましたが、ファームステイ中に見た滝とはまた違って、とても迫力がありました。



キュランダ鉄道から見える滝



キュランダ鉄道からの風景

5 フランクランド島

フランクランド島へは、30分ほど船で川を下ってから海に出てたどり着きました。島でシュノーケリングをしたり、グレートバリアリーフのサンゴ礁を見たり、散策をしたりしました。シュノーケリングでは3メートルぐらいの深さまで潜りました。下の方には、サンゴや魚が見えてとてもきれいでした。ウミガメが泳いでいるのも見ることができました。とても大きかったです。

船でサンゴ礁も見に行きました。サンゴ礁は大きいものから小さいものまで、大きさも形も様々でした。

島の散策では、珍しい動植物を見ることができました。その中でも、どんどん根を張って前方に伸びていく「歩く木」と呼ばれる植物が印象的でした。

ほかにも、魚にとってちょっと毒のある木の実があって、昔のアボリジニの人たちはその木の実を海に投げ入れ、魚を採っていたそうです。

島にはたくさんのサンゴの死骸もありました。その中にイカの死骸があり、それをこすると白い粉が出できます。アボリジニの人たちは、それで歯を磨いたり顔に塗ったりしていたそうです。



グレートバリアリーフの海



歩く木

V 研修を終えて

今回の研修では、今まで体験したことのない様々な文化に触れることができました。相手に伝えようとする心やコミュニケーションの大切さ、また働くことの大切さも学びました。そして、見るもの全てが驚きでした。この貴重な体験の中で得たことを、これからの生活に生かしていきたいと思います。

環境に関しては、オーストラリアの人たちの工夫や節水への取組をたくさんの人に伝えていきたいです。自分でも普段から意識して取り組むよう努力していきます。

飛行機が欠航し、オーストラリアに一日長く滞在するというハプニングもありましたが、素晴らしい経験ができました。本当にありがとうございました。

Australia Report

No. 3 大曲中学校 2年 高橋 明花

I はじめに

私がこの海外研修に参加してみようと思った理由は二つあります。

一つは、自分の英語が海外でどのくらい通用するのか確かめてみたかったからです。もう一つは、将来の夢の実現へ少しでもつなげたいと思ったからです。この海外研修は、私にとって大きなチャンスでもあり、目標でもありました。私は英語が好きで、将来英語に関わる仕事をしたいと考えています。世界には多くの民族が生活しており、それぞれの国の言葉を話し、文化を築いています。海外でそれらに触れることで改めて日本の良さを知り、それを世界に発信していくことで、日本と世界をつないでいきたいと思っています。

II 研究テーマ

「ゴミの量を減らすために私たちにできることは何か？」

＜設定理由＞

私の家の近くには、大仙美郷クリーンセンターがあります。一般開放日には、たくさんの車が並んでいるのを見ました。こんなにも多くの人が家庭からのゴミを捨てにくるのかと、驚いたと同時に、その光景を見て、「そのゴミはいったいどこから出るのか？」「もっと減らすことはできないのか？」と、疑問に思いました。

そこで私は、ゴミを少しでも減らすために、私たちにできることは何かないのか、調べてみようと思いました。

III 調査結果

1 大仙市のゴミの分別状況について

市役所の担当の方にゴミに関する話を聞いてみました。また、大仙市内のスーパーマーケットや家電製品を販売している店などを回ってみました。

- ・大仙市では、ゴミの分別の仕方などを分かりやすく書いた「ごみカレンダー」がある。分別を推進することで、リサイクルしたり燃やせるゴミを減らしたりすることにつながっている。
- ・大仙市は、平成21年にゴミ袋の有料化が決まって以来、燃やせるゴミ、燃やせないゴミ、ビン・カン、ペットボトル等、いくつかの種類にゴミを分別している。
- ・リサイクルしているゴミは、ビン・カン、古紙、古布、蛍光灯、電池、電球、小型家電（ゲーム機や音楽プレーヤー）、家電製品など。小型家電からはレアメタルを回収し、リサイクルしている。



大仙市ごみカレンダー

- ・スーパーマーケットや家電製品を取り扱っている店を回り、リサイクルボックス等の種類を調べたところ、14種類もあることが分かった。

2 オーストラリアの家庭でのゴミを減らすための工夫について

ホストファミリーに、ゴミを減らす工夫についてインタビューしてみました。

- ・紙は細断し、鶏小屋の巣のために再利用している。
- ・電池や紙類、プラスチックなどをリサイクルしている。
- ・大仙市のようなゴミ袋があるのか聞いたところ、いろいろな種類の燃やせるゴミ用、紙類用、リサイクルできるペットボトル用がある。



日本のリサイクルボックス

3 まとめ

大仙市内のスーパーマーケットでは、ゴミの回収箱を設置し、リサイクルするゴミの種類ごとに細かく分けられていました。そして回収箱にゴミを持ってくる人たちは、それぞれきちんと分別していました。オーストラリアでは、燃やせるゴミか、リサイクルするゴミか、の二つに大きく分けられていました。リサイクルできるものはリサイクルする、という考え方は、日本もオーストラリアも同じでしたが、その方法はそれぞれの国で違っていました。言葉や文化が違うように、物事の考え方も違うことを改めて感じました。

二つの国での取組を参考に、買い物のレジ袋の使用を最小限にする、むだなゴミを増やさない、ゴミにせず生活の中に工夫して活用する、ゴミを分別しリサイクルできるものはリサイクルする、など、小さなことでも私たちにできることに、積極的に取り組んでいきたいです。私たち一人一人がゴミを減らす努力をすることで、大仙市のゴミの量も減らせると思います。リサイクルに積極的に協力して大仙市のゴミ減量に貢献したいと思います。

IV 海外で働く日本人にインタビュー

海外で働いている三人の方々に、次の四つの質問をしました。

- Q1. オーストラリアに移住しようと思ったきっかけは何ですか？
- Q2. 言葉も文化も違うオーストラリアで困ったことは何ですか？
- Q3. オーストラリアと日本の一番の違いは何ですか？
- Q4. 英語でコミュニケーションをとるために大切なことは何ですか？

<児玉さん>

- A1. ホテル学校に入るために、英語が必要だと感じたからです。
- A2. 言葉が通じず、文化も違い、当たり前で日本ですらやってきたことが、オーストラリアでは当たり前ではなかったことです。
- A3. 家族優先ということです。子どもを迎えに行ったり、子どものイベントのために、仕事を抜いたり休んだりすることは、オーストラリアでは普通のことです。
- A4. 笑いをとることです。これも一つのコミュニケーションスキルです。また、一生懸命に堂々と話し通すことも、コミュニケーションをとるうえで大切なことです。

<日下部さん>

- A1. 幼いころ、近くに外国人の友達がいたため、海外に興味があったからです。
- A2. 私の職業は、ヨーロッパ出身の人たちと働く機会が多くありました。フランス人に指示を出されたとき、話していることがよくわからず、指示通りに動くことができなくて、呼び出されることもありました。
- A3. 私は、オーストラリアに来る前に発展途上国にいたので、オーストラリアに来たとき、日本との違いはほとんどないと思いました。
- A4. 笑ってごまかさず、自分の意見をはっきり言うことが大切です。

<黒田さん>

- A1. 高校2年生のとき、ロサンゼルスに修学旅行に行きました。そのときに、アメリカに住んでいる日本人と会って、海外に憧れをもちました。
- A2. 日本旅行の運営をしているので、様々な文化の人たちとの間に入ってやり取りするのが大変でした。
- A3. やはり、文化と言葉の違いです。
- A4. 恥ずかしがるのは絶対にダメです。日本では、知らないことが恥ずかしいという人が多いですが、海外では、知らないことをどんどん聞く人が多いです。積極的に聞いてみるのが大切です。

私は三人の方々のお話を聞き、みんなそれぞれ自分の夢や目標、憧れがあつて、日本から遠く離れたオーストラリアまで来たのだ、ということが分かりました。インタビューの中で、過去に苦勞をしたことなどを話してくださいましたが、そのような体験があつたからこそ、今があるようにも感じました。人生の先輩としてのお話を聞かせてもらえて、とてもよかったです。私も自分の夢に向かって積極的にチャレンジしていきたいです。

V オーストラリア滞在中のエピソード

1 ファームステイ

私たちは、Cahillさんのお宅にファームステイしました。初めてのファームステイで、慣れない環境や食文化、そして自分の英語が伝わるのかどうか、いろいろと不安がありました。それでも、ホストファミリーはみんな優しく接してくれて、会話が弾み、とても楽しい時間を過ごすことができました。

Cahillさんの敷地はとても広く、驚きました。その広い敷地では、牛を100頭飼っている、とホストマザーが教えてくれました。この牛から、Cahillさんたちはミルクを搾っているそうです。その他にも、家の周りではバナナやドラゴンフルーツ、マンゴー、パパイヤなどを育てていました。ごちそうになったフルーツは、とてもおいしかったです。

私たちが日本からのおみやげとして持っていった湯のみ茶わんやせんすも気に入ってくれて、次の日には、棚に飾ってくれていました。もう一つ持参したおみやげのそうめんは、私たちが作ってホストファミリーと一緒に食べました。「Delicious!」と言って食べてくれたので、



広大な敷地にびっくり!

ほっとしました。

ファームステイ最終日の夜はみんなでバーベキューをしました。日本では、家の外でご飯を準備するということがほとんどないので、外で調理したオーギービーフやソーセージは、とてもおいしかったです。

三日間のファームステイもあっという間に過ぎてしまい、お世話になったホストファミリーに感謝の思いを込めて、手紙と折り紙を渡しました。とても喜んでくれて、私たちもうれしかったです。オーストラリアでのファームステイは、私にとって、とてもすばらしい思い出になりました。



珍しい鳥



ホストファミリーとの写真

2 キュランダ

六日目にはマンガリーフォールズからキュランダに向かいました。キュランダでは、アボリジニが狩りに使うブーメランを投げたり、ダンスショーを見たりしました。ダンスはとても迫力があっておもしろかったです。動物園では、カンガルーにエサをあげました。とてもかわいかったです。

キュランダからケアンズに行くときは、キュランダ鉄道に乗りました。この鉄道は、日本のテレビ番組「世界の車窓から」でも紹介されたことがあるそうです。列車が通る鉄橋は、その番組のオープニングシーンにもなった、と教えてもらいました。列車の窓から入る大地の風がとても気持ちよかったです。



先住民族のアボリジニ



先住民族のアボリジニ



キュランダ鉄道の列車内の様子



テレビで取り上げられた鉄橋

3 フランクランド島

七日目には、フランクランド島に行きました。この島は、一日に100人しか上陸が許されない特別地域で、島の周りは「海はこんなに青かったのか」と驚くほど青く、本当にきれいでした。シュノーケリングをしたり、グラスボトムボートに乗って海の中を観察したりして楽しむことができました。海底のきれいなサンゴを見たり、「星の砂」を見付けたりすることもできて、感動しました。



フランクランド島の青い海



星の砂

VI 海外研修を終えて

今回の海外研修は、初めてのことをたくさん学び、経験することができて、とても貴重な時間でした。オーストラリアで八日間を過ごしてみて、日本とは違う文化、環境に触れ、オーストラリアのよさを知ると同時に、日本のよさも改めて実感しました。

現地の人の英語のスピードが速くて、聞き取るのが大変でしたが、自分の伝えたいことが相手にも伝わるように、積極的にコミュニケーションをとることに努めました。オーストラリアで働く日本人の方々も、コミュニケーションをとるときに大切なことは、「一生懸命に話し通す」、「自分の意見をしっかり言う」、「恥ずかしがらない」ことだ、と教えていただきました。コミュニケーションをとることは簡単ではありませんが、この経験を生かし、相手に伝えたい、という気持ちをもって、これからも頑張っていきたいです。

最後に、この研修を無事に終えることができたのは、引率の高橋先生、牛木先生、日本旅行の飛田さんのおかげです。そして、学校の先生方と家族の協力があったからです。オーストラリア研修に参加させてくださり、本当にありがとうございました。

Australia report

No. 4 大曲中学校 高橋 凜子

I はじめに

私がこの研修に参加したいと思った理由は、普段の生活では英語を使う機会がほとんどないため、All Englishの中で生活することを通して、自分の英語力を向上させたいと思ったからです。また、他の国を知ることで日本のよさを再発見したり、外国の人とどれくらいコミュニケーションをとることができるのか自分の力を試したりして、視野を広げたいと思ったからです。

初めての海外ということで不安もありましたが、事前学習でオーストラリアについて学んでいくうちに、充実した九日間にしたい、そして自分の考え方や行動力をステップアップさせたいと思う気持ちが大きくなりました。

II 研究テーマ

「食文化や郷土料理を引き継ぐために どのようなことができるか？」

1 設定の理由

私たち日本人の食文化は「和食」が中心です。そして各地域の産物を活用して食べられ伝えられてきた郷土料理は、昔の人の知恵や工夫があり、地域ごとに引き継がれてきたものです。しかし、私たちの世代は「和食」や「郷土料理」に対する関心が低く、好んで食べる機会は少ないと思います。そこで、これらの食文化や郷土料理を私たちが引き継いでいくためには、どんなことができるのか、また、どんな気持ちで「食」と関わっていったらよいのかを、オーストラリアの食文化と比較しながら考えてみようと思いました。オーストラリアの「食文化」や「郷土料理」に対する取組から参考になる点を見付けたいと思い、このテーマを設定しました。

2 調査方法

- ① 日本の食文化や、秋田県（大仙市）の郷土料理を引き継ぐための取組について調べる。
 - ・秋田県（大仙市）の郷土料理の種類について、大仙市役所農業振興課の方々に質問したり祖母に聞いたりして調べる。
 - ・食文化や郷土料理を引き継ぎ、広めていくためにどんな取組をしているのか、大仙市役所農業振興課の方々に質問する。
- ② オーストラリアの食文化や郷土料理を引き継ぐための取組について調べる。
 - ・オーストラリアの郷土料理の種類について、ホストファミリーに質問する。
 - ・食文化や郷土料理を引き継ぎ、広めていくためにどんな取組をしているのか、ホストファミリーに質問する。
- ③ ①と②を比較する。
 - ・共通点や相違点を分析する。
 - ・オーストラリアで活躍している日本人に、食文化の違いについてどのように感じているのかインタビューする。

3 調べて分かったこと

【食文化・郷土料理の種類について】

◇秋田県（大仙市）

郷土料理の種類

- ・きりたんぼ鍋
- ・小豆汁
- ・なすの花ずし
- ・サラダ寒天
- ・なすのふかし漬け
- ・だまこ汁
- ・三杯みそ
- ・納豆汁
- ・はたはた寿司
- ・いぶり大根
- ・粕漬け
- ・かすべの甘煮
- ・きゅうりもみ
- ・豆腐カステラ
など



郷土料理のよさ

- ・旬の食材を使うので安全で栄養価が高い。
- ・地域への関心を高め、愛着心を育てる。
- ・昔の人の知恵，工夫がある。
(傷まない→保存食，食欲増進)
- ・季節にあった伝統料理がある。
- ・失われていく食材を見直すことができる。
- ・地域の食文化や産物にふれる。

◇オーストラリア

郷土料理の種類

- ・肉を使うワンプレート料理
- ・バーベキュー
など



郷土料理のよさ

- 地元の食材を使う。(肉、野菜など)
- ・・・地産地消
- ↓
- 新鮮でおいしい。

【マンガリーフォールズでの夕食】



【マンゴーシャーベットと
アイスクリーム】



【ファームステイの夕食】

【シャーベットを作る機械】



【バーベキューのメニュー】



【ファームステイの朝食】

【近くのスーパーの直売コーナー】



【食文化や郷土料理を引き継ぐ取組】

◇秋田県（大仙市）

- ・農産物直売所で地元の農産物や農産加工品を提供する活動を行っている。
- ・学校給食への地場農産物供給体制整備と拡大に取り組んでいる。（「米粉パン」など）
- ・地域農産物を活用した料理講習会の開催。（公募による地域伝承料理会など）
- ・地域特産物を活用した、「特産品」や「農産加工品」づくりを支援する。（6次産業化）
- ・伝統野菜料理講習会の開催。

（大仙市認定：亀の助ネギ、石橋ごぼう、仙北丸ナス、横沢曲がりネギ）

◇オーストラリア

ホストファザーのBobさんに質問しました。

オーストラリアの郷土料理を引き継ぐ取組として「郷土料理を販売する」ということをしているそうです。

また、学校給食や料理講習会についても質問させていただきました。

●学校給食

- ・給食はあるが、食べる人だけ買う。買わなかった人はお弁当などを持ってくる。
- ・郷土料理は出ない。
- ・サンドイッチやスナック菓子などが出される。

●料理講習会

- ・料理講習会はない。（ホストファミリーの地域では）
- ・テレビの料理番組はある。



【質問に答えてくれるBobさん】



【ピクニックの昼食】

【オーストラリアの大屋泰斗さんにインタビュー】

マンガリーフォールズで働く大屋さんにも食文化についての質問をさせていただきました。

Q1 食事をするとき栄養面で気を付けていることは？

A1 肉が安く、魚が高いため、どうしても肉中心の食事になってしまい、野菜を食べても足りない栄養素がある。

それを補うためにビタミンなどの錠剤を飲んでいる。オーストラリアではジュースに錠剤を溶かして飲んだりしている。

[私たちのホストファザーもジュースに錠剤を入れて飲んでいました。]

Q2 日本とオーストラリアの食文化の違いをどう感じていますか？

A2 オーストラリアはワンプレート料理なので、日本に比べて品数が少ないと思う。

Q3 オーストラリアで郷土料理を引き継ぐ取組として、どのようなことをしていますか？

A3 オーストラリアには材料を持って行くとすぐにバーベキューができる場所がたくさんある。（プレート、水道などがある）

【家の中にマンゴーを保存】

4 考察・まとめ

オーストラリア料理の歴史は比較的浅いからか、大仙市ほど郷土料理に対する取組はありませんでしたが、すぐにバーベキューができるところがたくさんあるということに驚きました。また、スーパーなどで郷土料理を売るといこともとてもいい取組だと思いました。私たちの地域の郷土料理は、作り方を知っている人が少ないと感じています。料理講習会などで作り方は習えますが、なかなか参加できないという人もいます。しかし、スーパーなどで郷土料理を売ってもらえると、手軽に食べることができるし、郷土料理に興味をもってもらえるようになるのではないかと思います。

このように、普段の生活の中に郷土料理を手取る機会を組み込むことで、興味を高め継承できるだけでなく、地産地消も促進できると考えました。

Ⅲ エピソード

1 ファームステイ

私たちのホストファミリーのRussell夫妻とホストマザーの双子の弟のJohnはとてもフレンドリーで面白い方々でした。牛をたくさん飼っていて、牛舎に連れて行ってもらったとき、子牛に指と足の裏を舐められました。ホストファミリーの家の犬にもなぜかとても懐かれました。

二日目には近くにステイしていた男子のグループが遊びに来て、一緒にバーベキューをしました。三日目も一緒にピクニックやショッピングを楽しみました。ショッピングモールに行ったとき、私たちが「おいしそう」といったケーキをホストマザーのCarmelさんが買って来て、夕食のデザートとして出してくれました。

毎晩、夕食後にはホストファザーのBobさんと一緒にUNOをしました。BobさんはUNOに負けるととても悔しそうにして、何度もリベンジしようとしていました。私がそろそろと思い「Can I take a shower?」と聞いても、Bobさんに「No. You must play UNO. 」と言われ、なかなかシャワーを浴びることが出来ませんでした。でも、とても楽しかったです。

ホストファミリーは私たちとたくさんコミュニケーションをとってくださり、お別れするときにハグをしてくれました。嬉しかったけれど、同時にものすごくさみしくなりました。短い期間でしたが、ファームステイの三日間は忘れられない思い出となりました。

2 オージーキッズとの交流

オージーキッズは年下か同じぐらいの子どもたちだったので気軽に話すことが出来ました。中にはハーフの子もいて、日本語で会話をしたりもしました。一緒に障害物レースをしたり、休憩



【みんなとバーベキュー】



【Johnと牛舎で】

時間も、ある男子の買ったドローンを飛ばして一緒に遊んだり、たくさん交流が出来ました。

夕食後にはダンスを楽しみました。そのとき、オージーキッズは積極的に前に出て踊っていました。私たちは恥ずかしくてなかなか前には出られなかったのですが、その積極性を見習わなければと思いました。



【オージーキッズ】

3 キュランダ高原・フランクランド島

「世界の車窓から」のオープニングで使われたというキュランダ鉄道に乗りました。走ると窓から風が入ってきて、とても心地よかったです。流れてゆく景色は雄大で、自然の大きさを感じることが出来ました。しかし、最後の方は疲れと列車の揺れが相まって眠ってしまったため、景色を見ることが出来ず、少し残念でした。



【キュランダ鉄道】



【帰りのデッキで】

フランクランド島には船で行きました。行きの船内で酔ってしまい、皆がグラスボトムボートで海の生きものを見に行っている間、ビーチでお城を作って待っていました。

体調も回復し、シュノーケリングで海中に潜ったときには、さんご礁の大きさと美しさに感動しました。私たちが泳いでいるすぐ下には色とりどりの魚がたくさん泳いでいて、「リトル・マーメイド」の世界に入った気分になりました。

帰りの船では、デッキで風に当たっていたので酔うこともなく、景色を楽しめました。

IV オーストラリアで活躍している日本人にインタビュー

① ダイビングインストラクターとして働く日下部さん

Q 1 日本との食文化の違いは何ですか？

A 1 日本よりも食費が高いこと。肉が安いこと。
南の国なのでマンゴーが安いこと。

Q 2 オーストラリアで困ったことは何ですか？

A 2 英語を学んでいても、伝わらないことが多かったこと。

【3人の皆さん】



② ホテルヒルトンで働く児玉さん

Q 1 日本との食文化の違いは何ですか？

A 1 油ものが多い。デザートが甘い。オーストラリアに来てから太ってしまった。

Q 2 オーストラリアで困ったことは何ですか？

A 2 病院などで専門用語を使う場面になったとき。分からなかったらもう一度聞き、すぐに調べて覚えるようにしている。

③ 旅行会社で働く黒田さん

Q1 もともと英語はできたのですか？

A1 できなかった。英語を身に付けるために映画を見て勉強したり、英語で書かれた釣りの本を読んで勉強した。→好きなもので勉強した。

Q2 現地の人たちとどのようにコミュニケーションをとっていますか？

A2 普段の会話の中で分からなかった言葉、覚えたい言葉をいつも持ち歩いているノートに書いて覚え、自然な会話ができるようにしている。また、現地で使われるスラングなどの言葉も覚えるようにしている。

【インタビューを通しての感想】

インタビューで、「何でも経験することは大切で必要だ」というアドバイスをいただきました。経験することで、次に同じことが起こったとき、よりよい結果につなげることができるのだとおっしゃっていて、3人の方々は自分から進んでいるいろんなことを経験してきたからこそ広い視野をもって行動できるのだと思いました。また、英語を実際に話す機会が大切だというお話も聞くことができました。

3人の方々のお話を聞いて、私も様々なことを経験し、多くのことを吸収して将来に繋げていきたいと思いました。

V 研修を終えて

このオーストラリア研修では、外国の文化に触れること、また、様々な人と関わることによって、自らの視野を広げることが出来たと思います。そして考え方もよい方向に変えることができたと思います。例えば、最終日に飛行機が機材トラブルで飛べなくなり、オーストラリアにもう一泊すると知ったとき、以前の私だったらイライラして何もする気が起きなかったのではと思います。しかし、あのとき私は「せつかくの機会だから楽しもう。」と思い、その日はプールで友達と遊んで楽しみました。そう思えたのは、オーストラリアで様々な考え方を知ったからです。

また、試したいと思っていた英語ですが、現地に行くとき聞き取ることも難しく、もっと勉強しなければと感じました。自分の実力を知ることができたので良い経験だったと思います。日常のちょっとした一言がなかなか言えず困ったので、これからは授業で学ぶ基本的な表現だけではなく、日常会話で必要になる表現も自ら覚えていこうと思います。

私はこの研修で学び、得たことを自分の糧とし、自分自身を成長させていきたいです。そして、自分の将来にも繋げていきたいです。

Thanks to many people, I was able to grow as a person on this trip.

I received a lot of kindness in Australia, so I want to return the favor in the future.

Thank you very much



【ホストファミリーと】

オーストラリアレポート

No. 5 大曲中学校 竹田 紫乃

I はじめに

小さい頃家族と海外旅行へ行き、私は初めて見る異国の文化や風土に衝撃を受けました。

その後、姉から海外派遣研修のことを聞き、ずっと参加したいと思っていました。

また、今まで何度か家族と海外旅行をした時に、自分でコミュニケーションをとることができなかつたため、自分の力で現地の方々と交流をしたいという思いもあり、この研修に参加しました。

II 研究テーマ／設定の理由

「日本の和食、秋田の郷土料理をもっと世界に広めるために、
自分たちができることは何か？」

日本の和食は世界的に有名です。しかし、海外の人が知っている和食はごく一部であり、さらに郷土料理を知っている人はほんのわずかです。秋田県の郷土料理を世界へ発信していくことで、秋田県や大仙市の良さを広められると思ったため、このテーマを設定しました。

III 研究テーマの予想／検証方法／調べた内容

1 研究テーマの予想

- ・昔から伝わる日本食が海外で有名なのではないか。
- ・SNSやガイドブックなどによっている食べ物が世界に伝わりやすいのではないか。
- ・海外にも郷土料理があり、地域の方々に親しまれているのではないか。

2 研究方法

- (1) 大仙市では郷土料理を広めるためにどのような取組をしているのかを調べる。
- (2) ファームステイ先と日本の一日の食事の相違点を見つける。
- (3) 郷土料理についてホストファミリーや地域の方にインタビューをする。

3 調べた内容

(1) 大仙市の郷土料理を広めるための取組

大仙市役所で、農業振興課の方にお話を伺いました。

- ①地域特産物を活用した料理講習会を開催
- ②地域特産物を活用した特産品や農業加工品づくりを支援
- ③米粉料理コンテストの開催
- ④伝統野菜の料理講習会を開催

など、いろいろな面から郷土料理を広めるための活動や地産地消の活動がありました。

(2) オーストラリアと日本の一日の食事の相違点

ファームステイ先と日本の一日の食事を比較してみました。

ファームステイ先の食事



朝

- ・ トマト
- ・ 玉ねぎが入ったオムレツ
- ・ パナナ・ベーコン
- ・ ハッシュドポテト



昼

- ・ パンの中にハンバーグ、ソーセージ
- ・ 炒めた玉ねぎ
- ・ コールスロー



夜

- ・ 茹でたインゲン、かぼちゃ、じゃがいも
- ・ ローストビーフ

基本的にワンプレートで出てきます。ご飯を食べた後、ティータイムの様なものもありました。生野菜(サラダ)よりもマンゴーやバナナ、パイナップルなどのくだもので栄養バランスをとっていました。日本でもワンプレートの食事をしますが、その場合には大皿で出され、それを小皿にとって食べる家が多いと思います。日本には一汁三菜と言う文化が昔からありますが、オーストラリアではそのようなものは見られませんでした。

(3) 郷土料理についてのインタビュー

ホストファザーにインタビューをしました。

Q1. オーストラリアに郷土料理はある？

A1. ある！

Q2. どんなものか

A2. 牛肉と新鮮な野菜が使われているもの。

Q3. どのようにして郷土料理が伝えられているのか

A3. お店などで売られている

その他にも、「たくさんの新鮮な野菜を食べて、新鮮な牛乳を飲めば長生きができるんだ」とも教えてくれました。確かにホストファザーはとても元気で明るく、若々しい方でした。

4 考察

オーストラリアにも郷土料理があり、地域の方々に親しまれていることが分かりました。ホストファミリーの和食への興味が高く、和食を通して日本をさらに積極的に世界へ発信していくことができると考えます。

最近、郷土料理の継承が危うくなっていることが、テレビで取り上げられています。

今回ファームステイ先で、家庭料理を食べたり、オーストラリアの郷土料理についてインタビューしたりしました。さらに私たちも日本食を作ったり、和食や秋田の郷土料理について説明したりしました。オーストラリアと日本という異国の食文化をお互いに体験し合うことで、改めて自国の「食」や郷土料理への関心を高めることができ、よかったです。

また、ケアンズ市内でも日本食を楽しめる場所をたくさん発見し、海外に住む人たちが日本の食

事を楽しんでいることが分かりうれしく感じました。私たちは日本人として、そして大仙市に住んでいる者として、和食や郷土料理をまず自分たちで楽しむことこそが、世界へ広めるための第一歩だと考えました。

IV エピソード

1 ファームステイ

ファームステイ先では、ピクニックやBBQ、ショッピングなど、いろいろなことを体験させてもらいました。また、ホストマザーの料理はどれもすべておいしかったです。

他のステイグループが遊びに来て、一緒に卓球をしたり、ベランダでお話したり…。本当に楽しい三日間でした。



素敵な家のづくり

↓卓球



ホストファザー Bobさん
ホストマザー Carmelさん
ホストマザーの双子の弟 Johnさん

↓ホストファミリー



本当の家族のように優しく接してくれました。夜には必ずUNOをやり、三日間、とても充実していました。

いろいろな体験をさせてもらったBobさん、Carmelさん、Johnさん本当にありがとうございました。

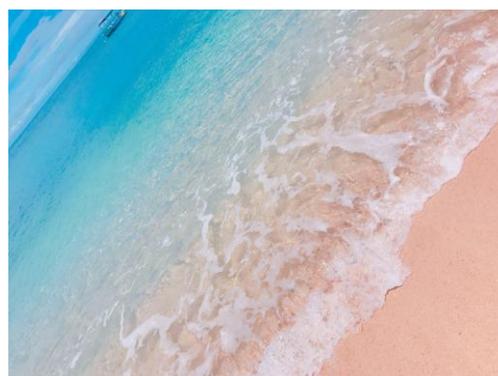
2 ケアンズ市内散策&グレートバリアリーフ

ケアンズ市内散策では、ラーメンを食べたり、お土産を買ったり、洋服を見たり、たくさん買い物をしました。皆でいろいろな場所へ行き、よい思い出ができました。

グレートバリアリーフでは、行きの船で船酔いしダウンする人もいましたが、島に着くと元気を回復し、今まで見たこともないようなきれいな海を見て、皆かなり興奮していました。足がつくような浅瀬でも魚がたくさんいて驚きました。シュノーケリングも楽しかったです。行きにはあまりよくなかった天気が、着いた頃には晴れていて、それも幸運でした。



グレートバリアリーフのきれいな海



透明な海水

3 海外で活躍する日本人

研修最終日の夜は、海外で働く日本人3名の方々へインタビューしました。

その中でのやりとりの一コマを紹介します。

Q1. 英語の勉強はどのくらいしたか？

A1. 毎日、200個単語を見て、書いて、発音して勉強した。

Q2. オーストラリアと日本の違いは？

A2. 無いと思う。人と人とのつながりはどこに行っても同じだと感じた。

Q3. オーストラリアに来て困ったことは？

A3. 英語が上手く聞きとれず指示が分からなかったとき。

Q4. コミュニケーションで大切なことは？

A4. 笑ってごまかさないこと。自分で「それは違う！」と思ったら、自分の意見を通すこと。

インタビューを通して、皆さんが自分の考えをしっかりと持っていることを感じました。

私は自分の意見をしっかりと伝えないときがあります。今回のインタビューで、自分の考えを貫く強さが大事だと学びました。

V 研修を終えて

この海外研修で、人の生き方としてたくさんの選択肢があると気付きました。

オーストラリアで出会った日本人は誰もがキラキラしていて本当に楽しそうでした。

また、日本とオーストラリアという、言葉も文化も違う異国に住む者同士でも、通じ合うものはたくさんあり、これからもっと英語を勉強して、さらに多くの海外の人たちと交流したいと強く思いました。

今回の経験は、将来の自分の生き方に大きく影響すると思いますし、この経験をしっかりと生かしていきたいです。

このような貴重な体験をさせてくれた両親、教育委員会の方々、優しく接してくれたホストファミリー、マンガリーフォールズのスタッフの皆さんに感謝したいと思います。

Thank you very much for everyone!!!

I はじめに

私がこのオーストラリア海外派遣研修に応募しようと思った理由は二つあります。一つ目は、私が日本とは言葉や文化が違う外国に興味があったからです。外国の文化に触れ、体験することで自分自身の成長につなげたり、視野を広げたりすることができればと思いました。

二つ目は、この海外派遣研修に参加した先輩が「とても楽しかった。」と言っていたからです。その時の話を聞いて、私も行ってみたいという気持ちになり、自分を変えるきっかけにもなるのではないかと思い、応募しました。

II 研修テーマと設定理由

『町おこしや人口減少への工夫について』

設定理由

近年大仙市だけではなく、日本全体が少子高齢化に悩まされています。私の通っている大曲中学校でも、昔に比べ生徒数が大幅に減少していると聞きました。そこで、私は大仙市の人口減少を抑えるためにはどうすればよいかを考えてみたいと思いました。大仙市にはたくさんの魅力があります。それなのに何故年々人口は減少しているのか、大仙市を活性化させるために何かできることはないかなど、様々な疑問が浮かんできました。

III 調べた方法/調べて分かったこと

1 調べた方法

- ① オーストラリアで観光客を増やすために行っていることを質問する。
- ② オーストラリアの街の様子から気が付いたことをまとめる。

2 調べた内容

① 観光客を増やすために

私たちが滞在したレインフォレストロッジで働く大屋泰斗（たいと）さんに、「観光客を増やすために何をしていますか？」と聞くと、日本の旅行会社にアピールをしたり、来てくれたお客さんに世界遺産を大々的にアピールしたり観光スポットを紹介したりと、リピーターを増やすための努力をしているそうです。そのために、まずは土地の魅力を自分自身が理解するために情報を集めたり、実際に行ってみたりするそうです。他にも、牧場などでは全国大会などの大きな大会で受賞したことをアピールしているとの話を聞きました。

② 町の様子

オーストラリアの街は自然がとても多いという印象を受けました。私たちが市内散策に行ったケアンズでも、いたるところに木々や草花などの植物が植えられていました。また、日本語表記の店や日本人の店員が働いている店もたくさん見かけました。会計の時に「あ

りがとうございました」と日本語で返してくれる店がほとんどで、お金の計算に困っていると優しく教えてくださる方もいました。

IV まとめ

人口減少に悩まされている日本に比べ、国全体の人口は日本より少ないものの、オーストラリアの人口は年々増えています。観光名所としても有名なところがたくさんあるオーストラリアに実際に行って調べてきましたが、「リピーター」を増やし、土地の魅力を知ってもらうことを重視していることが分かりました。レインフォレストロッジで働く泰斗さんがここで働き始めた頃は、この施設の利用については旅行会社に取り合ってもらえなかったそうです。そこで、直接日本に足を運んで周り、宣伝することで観光客を増やしてきたそうです。

また、オーストラリアには動物や自然の豊かさを生かし、ワラビーに餌やりのできる自然公園のような場所や、カンガルーが近くで見られるゴルフ場がありました。車で数分程で滝が見られるスポットにも気軽に行くことができるなどの良さもありました。大仙市で花火大会以外への観光客をもっと増やすためには、気軽に行くことができ、なおかつ土地の魅力をアピールできるような観光施設や体験施設を増やすとよいのではないかと考えました。

VI エピソード

1 ファームステイ先

私たちは、ファームステイでVOSSさんのお宅に泊まりました。ホストファザーのHANSさんはとてもおもしろい方で、ドライブの途中で歌を歌ってくれたり、カエルを投げてきたりと、場を盛り上げるのがとても上手でした。ホストマザーのMARITAさんは、優しくて料理がとても上手な方でした。MARITAさんの作る料理で一番印象に残ったのは、二日目のお昼に出てきたピンク色のポテトサラダです。初めて見たときは衝撃的な色に声が出ませんでした、「これは何ですか?」と聞くと「Beetroot」と缶詰を見せながら説明してくれました。味は少し酸味があり、「オーロラソースみたいだな」と感じました。食後には庭で育てているスターフルーツやブドウ、パイナップルをいただきました。どのフルーツも甘く、ジューシーでとても美味しかったです。私たちは三日目の夜に、それまでの感謝をこめて、代表的な日本食である白米とみそ汁を二人に作りました。ファームステイグループの皆と協力して作った夕食を二人は「delicious!」と言いながら美味しく食べてくれました。



ホストファミリー



二日目の昼食



三日目の夕食

2 オーギーキッズとの交流/土ボタル

オーギーキッズとの交流では、障害物競争やダンスをしました。障害物競争では、皆と協力して壁を登ったり、縄をくぐったりしました。オーギーキッズは活発で、どんどん先に行ってしまうので追いかけていくのが大変でしたが、皆で心をつにし、最後まで走り切るこ

とができたのでよかったです。食後のダンスでは、PPAPや秋田民謡「ドンパン節」を皆で踊ったり、オーストラリアで人気のあるグループのダンスを踊ったりしました。激しいダンスでしたがとても面白かったです。

私は今回の海外派遣研修で初めて「土ボタル」というものを知りました。土ボタルは英語で「Glow Worm」と言います。日本語に翻訳すると、光るミミズになります。帰国後調べて分かったことなのですが、土ボタルは「ヒカリキノコバエ」の幼虫だそうです。実際の姿はミミズのような姿ではなく、蚊のようなものらしいです。夜道を歩き見に行った土ボタルは青白く光っていてとても綺麗でした。

また、土ボタルには2種類の見え方があるそうです。一つは私と同じように青白く見える見え方です。もう一つは、黄色や緑色に見える見え方です。一般的には前者の青白く見える見え方が多いそうで、この見え方の人は“普通の人間の目”だそうです。後者のように黄色や緑色に見える方はとても珍しく、滅多にいないそうです。この見え方の人は“野生の動物の目”で、派遣生徒の中にも何人か黄色や緑色に見える野生動物の目の持ち主がいてとても驚きました。



オージーキッズ

3 アボリジニ/キュランダ鉄道

オーストラリアの先住民族、アボリジニの人々によるやり投げやダンスショーはとても迫力があり目が離せませんでした。ディジュリドゥと呼ばれる楽器は演奏の仕方によって様々な聴こえ方がありとても面白かったです。4種類の動物の鳴き声の真似をディジュリドゥを使い披露してくれましたが、どれも本物そっくりで驚きました。



アボリジニショー

その後、キュランダ鉄道に乗りケアンズへ向かいました。私たちは一番後ろの車両に乗ったので、カーブの時は先頭車両が綺麗に見えました。他にも窓からの景色はどれも絶景で、先頭車両が見えたのも印象深かったのですが、滝や町の様子が見渡せたときは感動しました。



キュランダ鉄道からの景色

4 フランクランド島

数時間船に乗り、フランクランド島へ到着した私たちはシュノーケリングのグループとグラスボトムボードのグループに分かれました。

私は先にグラスボトムボードに乗り、船の上から海底にあるいろいろなサンゴ礁を見てきました。鮮やかな青色や黄緑色のサンゴ礁はとても綺麗で感動しました。シュノーケリングではグラスボトムボードよりも近くでサンゴ礁を見ることができました。サンゴ礁の周りには小さな魚がたくさん泳いでいて、幻想的な光景を見ることができました。私たちは見つけることができませんでしたが、運がよければウミガメを見ることができそうです。機会があればもう一度行き、ウミガメを見てみたいと思いました。



グラスボトムボードから見たサンゴ礁



フランクランド島

VII 海外で働いている日本人にインタビュー

私達は、ケアンズで働いている3人の日本人（黒田さん・日下部さん・児玉さん）にインタビューしてきました。

Q：英語はどのようにして勉強しましたか？

A：趣味の映画で覚えました。初めに日本語字幕で見て、慣れてきたら英語字幕、字幕なしにしていきました。（黒田さん）

A：英語1000単語帳を使い、1日200単語ずつ勉強しました。初めは単語なんて…と思いましたが、単語が分かると聞き取れるようになり、周りの助けもあり、だんだんと話せるようになりました。（日下部さん）

Q：オーストラリアに来て、驚いたことは何ですか？

A：日本に比べて、家族の優先順位が高いことですね。例えば、仕事中に簡単に子供のお迎えに行くことができたり、出勤日を変更してお休みを貰えたりします。（児玉さん）

Q：外国人とコミュニケーションをとるときに気を付けていることは何ですか？

A：恥ずかしがって自分の殻に閉じこもらないことですね。日本人は知らないから恥ずかしいと考えがちですが、外国人は知らないなら聞こうとします。だから、皆さんも恥ずかしがらずに！（黒田さん）

A：笑って誤魔化さないで自分の意見をしっかりと言うことです。笑って誤魔化すのは、外国人から見ればおかしい人と見られてしまいますからね。（日下部さん）

今回の質問で印象に残ったのが、外国人とコミュニケーションをとるうえで必要なことが「恥ずかしがらない」と「誤魔化さない」ということです。この二つは、英語を上手に話すことよりも大切なことだと強く感じました。3人の方々に教わったことを忘れずに、いつか私も外国で活躍できるような人になりたいと思いました。

VIII 研修を終えて

今回の海外派遣研修では、様々なことを体験し、学び、楽しむことができました。私にとっては初めての外国ということで、初めは不安しかありませんでした。しかし、事前学習でオーストラリアや英語について学んでいくうちに、外国への不安はオーストラリアへの期待や楽しみに変わっていきました。私にとって、オーストラリアで過ごした一週間は視野を広げ、生きた英語に触れ、実際に会話することで英語力を向上することのできた、とても有意義な時間だったと思います。

この海外派遣研修で学んだことを大仙市の活性化や将来につなげていきたいと思っています。貴重な経験を本当にありがとうございました。

オーストラリアレポート

No.7 大曲西中学校 2年 小松 夏奈

I はじめに

私がこの研修に応募した理由は二つあります。

一つ目は、私の姉や部活動の先輩から以前この研修に参加したときの話を聞き、興味をもったからです。素晴らしい自然に触れたり、オーギーキッズと交流したりと、日本では経験できないことができると聞き、参加したいと思いました。

二つ目は、コミュニケーション能力を向上させたかったからです。海外の人と交流することは、これまで学習してきた英語力を試すだけでなく、更に英語力を向上させることができる良い機会であると考えました。また、研修に参加した他校の生徒とも積極的にコミュニケーションをとることで、自分を成長させたいと思ったからです。

II 研究テーマと設定の理由

1 研究テーマ

「今ある自然と共存していくためには？」

2 設定の理由

大仙市には多くの自然があります。しかし、地球温暖化が進む今、地球の環境は大きく変化しつつあります。また、人間の手によって自然が破壊されているのも事実です。大仙市も将来、自然環境が大きく変化し、今の状態を維持していくのが難しくなるかもしれません。豊かな自然を維持していくためには、大仙市の一人一人が環境問題について考えていかなければならないと思います。乾燥大陸と言われ、決して気候に恵まれているとはいえないオーストラリアを訪れることで、美しい自然を守るためにどのような取組を行っているかを調べ、大仙市に反映させていきたいと思い、このテーマを設定しました。

III 研究方法と調べた結果

1 研究方法

- ①大仙市役所の方からお話を聞き、大仙市の現状を調べる。
- ②オーストラリアの各家庭で行われている取組を調べる。
- ③現地で行われている動物・自然保護についてリサーチする。

2 調べた結果

① 大仙市の現状

- ・大仙市の森林の割合は57.2%
- ・太陽光発電所を設置したり、太陽光パネルを学校の屋上に取り付けたりしている。
- ・野生の保護は団体が行っている。

② ホームステイ先でインタビューから分かったこと

- ・各家庭で多くの植物を育てている。

(ホストファミリーのお宅では野菜を10～12種類、果物を10種類育てている。)

- ・シャワーの時間を短くしている。
- ・雨水をためるタンクがある。
- ・野生の鳥にえさをあげている。
- ・食事の前にみんなでお祈りをする。

(すべての植物や動物に感謝するため。自然を大切に思う心がある。)



ホストファミリーの庭に設置されていた鳥籠。野鳥がたくさん集まる。



ベランダに来た野鳥。日本と違って色鮮やか。

③ 現地の取組

<キュランダ>

- ・熱帯雨林には200種類以上の鳥、蝶、蛇などがいる。→中には絶滅危惧種もいる。
- ・先住民アボリジニが利用していた植物なども多くある。

<ホテル「ダブルツリー・バイ・ヒルトン」>

- ・使用済み石けんをリサイクルして新しい石けんを作り、発展途上国に送っている。→1年で200kg!
- ・全室の明かりをLEDにしている。
- ・動物保護団体に犬や猫用のおもちゃをプレゼントしている。

↓

「社会貢献」「地域貢献」「環境保全」



絶滅危惧種のサザンカソワリ

3 考察

一見自然が豊富に感じるオーストラリアですが、森林の割合は全国土の約15%であり、これは大仙市に比べると、とても少ないです。しかし、オーストラリアには世界自然遺産に登録されている場所が12箇所もあります。このことから、オーストラリアでは少ない自然を大切にしていることが分かりました。また、どこを訪れても、一人一人が自然を大切に守っていきこうと心がけたり、野生動物と人間が上手に共存していきこうとしたりしているように感じました。

私たちが訪れた時は雨季で、雨が毎日降っていましたが、それでもシャワーの時間を制限したり、タンクに水を貯めたりするなど節水を心がけ、国全体で水資源を大切にしていることが分かりました。日本では水が豊富で、つい水を流しっぱなしにしてしまうこともありますが、もっと資源を大切に考えていかなければいけないと思いました。

オーストラリアの自然について調べてみて、大仙市でも一人一人がもっと環境問題について真剣に考え、行動していくことが必要だと思いました。私たちにできることは「シャワーの時間を短くする」「ゴミを減らす」「リサイクルをする」「節電を心がける」など小さなことですが、できることにみんなで取り組んでいく必要があります。また、企業や学校で定期的にクリーンアップを行うなど、大仙市全体で取り組んでいくことも必要です。このような活動が地球温暖化を止める一歩になり、自然と共存していくことにつながると感じました。

IV エピソード

☆ ホームステイ

私はWarrenさんとAnneさんという方のお宅にホームステイをしました。私たちがホームステイをした三日間はほとんど雨で、家の中でお手伝いをしたり遊んだりすることが多かったです。一日目はAnneさんとクッキー作りをしました。ベリーなどが入ったねっとりしたクッキーで、とてもおいしかったです。二日目はビーズでアクセサリー作りをしました。お昼にはそうめんを作ってごちそうしました。具材をのせすぎたけれど、二人とも喜んでくれていたし、私も久しぶりに日本食を食べることができて嬉しかったです。三日目は外でお手伝いをしました。石をトラックに載せて牧場の中にある湖に捨てに行くというお手伝いでした。湖の周りには森林があり、家の敷地とは思えない広さにとても驚きました。

また、ホームステイでの食事は、主食はパンかじゃがいもでした。昼食と夕食の後にはデザートがあって、ケーキとアイスやフルーツということが多かったです。どれもとてもおいしかったです。

ホストファミリーの二人はとても優しく温かい方々で、三日間を楽しく過ごすことができました。初めはあまり話せなかったけれど、徐々に英語を理解できるようになり、自分から話しかけられるようになりました。外国の生活に触れることができ、とてもよい思い出となりました。



ホストファミリーの牧場の中に湖と森がある。



ホストファミリーに作ってごちそうしたそうめん。

☆ オージーキッズとの交流

オーストラリアの子どもたちとアクティビティをして遊びました。障害物レースでは、チームで障害物に登ったり、池に入ったりして遊びました。夜はダンスをしました。簡単なダンスかと思っていましたが、意外に難しかったです。でも思いきり踊って楽しい一時を過ごすことができました。その後、土ボタル鑑賞に出かけました。青白い光が舞っているようで、日本の蛍とは違った美しさでした。

☆ キュランダ

ここではアボリジニのショーを見たり、動物園を見学したりしました。アボリジニが作ったブーメランを体験できる所やアボリジニが使っていた楽器を聴ける所などもありました。ショーではアボリジニ特有のダンスを見ることができました。動物園では、初めてワラビーに触ることができました。おとなしくて、かわいかったです。



アボリジニのショー

☆ フランクランド島

世界遺産に登録されているフランクランド島では、シュノーケリングや島内散策を楽しみました。海はとても青く、珊瑚礁や美しい魚を見ることができてとても楽しかったです。散策では岩場にいるヒトデやナマコを見たり、無人島ならではの植物を観察したりしました。オーストラリアの自然を肌で感じることができました。

V 海外で働く人へのインタビュー

ダイビングインストラクターの日下部さん

- Q：なぜオーストラリアで働いているのですか。
A：海がきれいなケアンズでダイビングをして働きたいから。
Q：海外で働く上で大切なことは何ですか。
A：自分から積極的に行動すること。分からないときは「助けて!」と言う。
Q：中学校のうちにやっておいた方がよいことは何ですか。
A：英語をしっかりと学習する。書くことも話すこともどちらも大切!

日本旅行ケアンズ支店に勤めている黒田さん

- Q：海外に来てよかったことは何ですか。
A：初対面の人でも“マイト（友達）”という関係。
Q：英語の勉強法は何ですか。
A：いろいろな人と話すと英会話の練習になる。また、映画やテレビなど自分の好きなもの
とつなげると覚えやすい。
Q：海外の人とコミュニケーションをとるときに工夫していることは何ですか。
A：会話の中で気になった表現や、覚えたい単語をノートに書く。

ホテル「ダブルツリー・バイ・ヒルトン」で働く児玉さん

- Q：海外に来てよかったことは何ですか。
A：従業員に日本のやり方を教えて納得してもらえたときはやりがいを感じる。
Q：苦労したことはありましたか。
A：なかなか自分の考え方を理解してもらえなかったこと。病気で病院に行ったときに医者の話す特別な用語が分からなかったこと。
Q：中学校のうちにやっておいた方がよいことは何ですか。
A：将来やりたいこと、なりたいものから逆算して考えるとよい。（この職業に就くためには、この大学に入ってあの資格をとって…と考える。）

～インタビューを通して～

海外で働くためには努力と覚悟が必要なのだと感じました。また、海外で仕事をするのは、私たちが想像している以上に大変そうでしたが、とても楽しそうでやりがいもあるということが分かりました。今回のインタビューは自分の将来設計をしていく上で、とても参考になりました。また、生活の中でも生かしていけることがたくさんありました。英語の大切さも分かり、今のうちに英語をもっと勉強したいと思いました。

VI 海外研修を終えて

今回の研修では、たくさんのことを発見し、学ぶことができました。オーストラリアに行き、現地の英語に触れ、様々な場所を訪れることができたことは、私にとって貴重な経験となりました。予定より帰国日が一日延びてしまうというハプニングもありましたが、それも楽しむことができました。日常生活や日本文化に対しての感じ方が、行く前と帰国後では変わり、視野が広がった気がします。また、日本の文化とオーストラリアの文化、どちらも素晴らしく両方の良さを再確認することができました。

今回の研修の中で私の英語力だけでは伝わらない場面があり、外国の方と会話することはとても難しいことなのだと痛感し、もっと英語を学びたいという意欲が高まりました。この経験を生かして、これからはさらに積極的に取り組んでいきたいです。

最後になりますが、このような体験をさせてくださった教育委員会の皆様、引率して下さった先生方、そして家族に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



キュランダ鉄道から見た風景



ワラビーと触れ合っ

Australiaでの経験と成果

No. 8 大曲西中学校 今野 伶音

I はじめに

1月3日の朝、私は不安と期待で複雑な気分でした。「これからオーストラリアへ行くんだ」と思うと楽しみなのに、同時に「自分の英語は伝わるだろうか。」という不安にもかられました。さらに、成田空港で外国の方に話しかけられたときに答えることができず、不安がさらに大きくなってしまいました。しかし、現地の人は私の言いたいことを理解しようと熱心に耳を傾けてくださって、「自分に足りないのはこういう姿勢だったのか」と気付きました。私は、オーストラリアでたくさんのことを学んできました。この研修に参加できて本当によかったと思います。

II 研究テーマについて

私のテーマは、「大仙市をスポーツで活性化するには？」です。

1 設定理由

現在秋田県には、バスケットボール、サッカー、ラグビーのプロチームがあります。私はバスケットボールチームの試合を見に行ったことがあります。そこでの応援に圧倒され、大仙市はスポーツで活性化できるのではないかと考えました。その経験から、私はこのテーマを設定しました。

2 研究テーマについての予想

大仙市でのプロチームの試合を増やせばよいと考えました。理由としては、大仙市で開催することでより多くの大仙市民が見に行くことができるし、そうすればより多くの人に興味をもってもらえると思ったからです。

3 検証方法

インタビュー1（大仙市教育委員会スポーツ振興課）

インタビュー2（ステイ先のホストファミリー）

4 調査

まず、最初に大仙市のスポーツ振興課の方にお話を伺いました。そこで私は自分の予想がどれだけ、甘い考えだったかを知ることになりました。お話によると、バスケットボールのプロチームを呼ぶのに100万円、さらに会場準備を含めすべてやると、一回でおおよそ500万円かかってしまうそうです。簡単に活性化には繋がらないことが分かりました。しかし、スポーツ振興課の方からは新たなアドバイスをしてもらうことができました。それは、スポーツを三つに分類し自分に合った楽しみ方をしてもらうというものです。その三つというのは、

①自分がするスポーツ

②見る（観戦する）スポーツ

③手伝うスポーツ の三つです。

③の「手伝うスポーツ」というのは、他の人が参加するスポーツの大会で、運営等を手伝う形で参加することです。

次に、ホストファミリーの方とスポーツについて話しました。ホストファミリーが好きなスポーツは、ジョギングとラグビーでした。オーストラリアのスポーツチームの仕組みは日本とは若干異なるようでした。州や市町村を代表するチームが一つとは限らず、オーストラリア全体でいくつものチームがあり、気に入ったチームをそれぞれで応援するということでした。

5 考察

「三つの分類に基づくスポーツの楽しみ方」やホストファミリーから聞いた「自分のお気に入りチームを応援する」という発想を、自分たちの身近な生活と結び付けて、私は次の二つの考察をたてました。

①小・中学校のスポーツの試合をポスター等で掲載し、親や身内でなくても気軽に見に行けるようにする。

②小・中学校のスポーツの大会のときに、ボランティアで手伝ってくれる人を募集する。

この二つで色々な形でスポーツに参加することができます。また、自分の子どもがいない家庭でも参加できるので、よりたくさんの方がスポーツに関われると思います。

III エピソード

私たちは、Borgartさんの家に三日間ステイしました。ステイ中に、馬に餌をやったり犬と遊んだりすることができました。最初はホストファミリーの方とちゃんと話せるか不安でしたが、意外にも単語を並べただけで会話ができてしまいました。そして、ホストファミリーの方からは、たくさんの経験をさせていただきました。

一日目は、馬に餌をあげたり、家を案内してもらったりしました。馬の口にパンを近づけただけで、餌が馬に吸い込まれていく感覚がおもしろかったです。また敷地はとても広く、大きな水のタンクが六つもありました。オーストラリアは水不足だと事前学習で学んでいましたが、タンクが六つもあるとは思いませんでした。

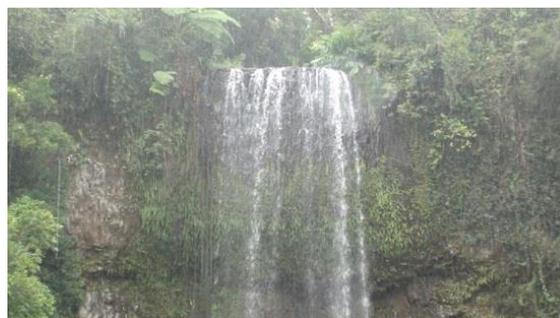


Borgartさんの家にあった大きなタンク



餌を与えた馬

二日目は、午前中に滝を見に行きました。マンガリーフォールズというとても大きな滝でした。この日はあいにくの雨でしたが、それでもとてもきれいな景色でした。

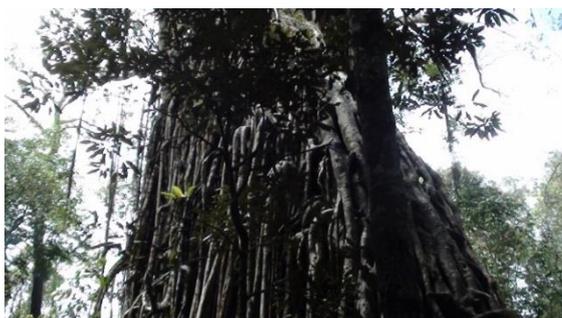


私たちが見たマンガリーフォールズ

昼にバーベキューをするために向かった先は、女子の班がステイしているところでした。そこで女子と合流してバーベキューをしました。

三日目は、ショッピングに行きました。日本にはないような、ユニークな商品もたくさん見ることができました。飲み物の値段が高くて、日本では160円で買えるコーラが3.50\$（約325円）もして驚きました。また、ジュースの容量が大きく、持ち歩き用の飲み物では700mlのものもありました。

長いようで短かったファームステイでしたが、ホストファミリーの方はとても優しく、私たちの英語を理解しようとしてくれたし、いろいろな所へ連れて行ってくださいました。行く先々で幻想的な景色、迫力ある滝、珍しい動物などが見られ、本当に楽しかったです。



たくさんの木がからみついでできた木



迫力ある滝を間近で撮った写真

四日目は、オージーキッズと交流しました。オージーキッズはパワーが有り余っていて、とても元気にはしゃいでいました。夜はツチボタルを観察しました。緑色に見える人と青白く見える人がいるようですが、私は緑色に見えました。

五日目は、アボリジニの文化に触れるため、キュランダ村に行きました。キュランダ村ではおいしい食べ物や珍しいものにたくさん出会うことができ、欲しくなるものがたくさんありました。

アボリジニのダンスショーでは、数名の観客がステージに上げられ、アボリジニと一緒にダンスを踊りましたが、その一人に選ばれて驚きました。



アボリジニのダンスステージに上がった時の写真

この日の夕方には、ある意外な人と遭遇しました。それは「ガキの使い」にも出演している月亭方正さんです。握手していただいたあと手を振ってもらいました。有名人なのにフレンドリーな方でした。

IV 海外で働く日本人の方にインタビュー

3人から聞いて、わかったことや印象的だったことを紹介します。

1 黒田さん（日本旅行ケアーズ支店長）

- ・アメリカに行った時に会った語学堪能な日本人に影響され、自分も英語を使った仕事がしたいと思い、オーストラリアで働くことにした。
- ・英語をおぼえるため、辞書を読んでから寝た。

2 児玉さん（ホテル ダブルツリー・バイ・ヒルトンの営業取締役）

- ・以前オーストラリアに来たことがあり、ここで働くことにした。
- ・いつもお客様第一で考え、丁寧な対応を心がけている。

3 日下部さん（ダイビングインストラクター、カフェレストランスタッフ）

- ・あまり英語を勉強せずにアメリカへ行き苦労したことがあり、こちらに来てからは毎日英単語を200個おぼえた。
- ・絶対に笑って誤魔化さないようにしている。分からないことがあった場合は、すぐに尋ねると決めている。

VI 研修を終えて

この研修を通してたくさんのことを学びました。いつもは周りに流されがちな私でしたが、「自分の意見をしっかりもつこと」や「他の意見を参考によりよい考えに高めていくこと」ができるようになりました。トラブルのため、滞在が1日伸びたこともよい経験になったと思います。日常生活では体験できないようなこともさせていただき、自分をより成長させることができたと思います。この研修で培ったことを忘れず、今後の生活に役立てていきたいです。今回このような貴重な体験をさせてくださった教育委員会の皆様はじめ、たくさんの方々にお礼を言いたいです。本当にありがとうございました。

Australia Report

No. 9 大曲南中学校 吉川 晴菜

I はじめに

私がこの研修に参加した理由は二つあります。

一つは、自分の学んできた英語が伝わるかどうか試してみたかったからです。私は、4歳の頃から9年間英語を習ってきました。そこで学んだ英語を使って、外国人とコミュニケーションをとることができるだろうかということに興味を沸きました。

もう一つは、訪れたことのない海外に行ってみて、自分の視野を広げたいと思ったからです。英語が日常的に使われている世界で、生の英語に触れたり、現地の文化に触れたりすることで、自分の視野を広げたいと思いました。

II 研究テーマと設定の理由

1 研究テーマ

『伝統的な芸能や祭りを守り、つないでいくためには何をすればよいか?』

2 設定の理由

私の住んでいる地域をはじめ、大仙市・秋田県にはたくさんの伝統芸能があります。

以前、テレビで「なまはげを次世代につなげていく後継者がいなくなっている」というニュースを見ました。もしかしたら自分の身近にある伝統芸能も同じ状況にあるかもしれない。そんな時、私たちは何ができるのか、大仙市とオーストラリアでの伝統芸能の継承の仕方を比較しながら考えていきたいと思い、このテーマを設定しました。

III テーマについて

1 予想

伝統的な芸能や祭りを体験できたり、学べたりする機会をつくると、若い世代の人が興味を持ち、継承する人が増えるのではないかと。

2 検証方法

- ・大仙市とオーストラリアの伝統芸能について調べ、継承の工夫をまとめ比較する。
(インタビュー)

3 調べた内容

《大仙市の伝統芸能》

今の生活の中で、私たちが伝統芸能に触れる機会は少なくなっています。それはつまり、若い世代の人に、伝統芸能を伝える機会が減っているということです。

文化財保護課、仙北支所市民サービス課の方にインタビューしたところ、伝統芸能の保存会に新しく入る人が少ないため、継承が難しくなっているとおっしゃっていました。伝統芸能に少しでも

触れてもらうために、小学校で披露して見てもらったり、学校行事活動として教えたり、たくさんの若い世代の人に参加してもらえるような工夫をしているそうです。後継者になるための資格は特にはないようですが、例えば協和の蛇頭神楽のように、その神社の家系の中でしか後継者になれないものもあるそうで、神職に関わるものはそのケースが多いそうです。



(刈和野大綱引き)



(黒土神楽)



(角間川盆踊り)

《オーストラリアの伝統芸能》

オーストラリアの原住民、アボリジニによるアボリジナルアートやアボリジナルミュージックなどは世界的にも有名で、オーストラリアの観光資源にもなっています。

六日目に行ったオーストラリア先住民関連施設では、アボリジニのやり投げを見学したり、「デイジュリドゥ」と呼ばれる伝統的な演奏を聴いたり、アボリジニのショーを見たりしました。伝統芸能に触れることができ、とても貴重な経験ができました。



(アボリジニのショー)



(デイジュリドゥ)

4 現地でインタビュー

マンガリーフォールズで働く、大屋泰斗さんにインタビューしました。

Q 伝統芸能を次世代につないでいくために、何をしなければいけないと思いますか。

A 生活の一部になっているものは自然に受け継がれていくと思うが、生活と掛け離れてしまっているものは、国が対策をとって守るべき。しかし、私たちにもできることはあるはずで、若い人に伝統芸能を教えたり、伝えたりすることが重要になっていくと思います。

IV 考察

日本でもオーストラリアでも、伝統的な文化や芸能を大切に保護しているのは同じでした。その地ならではの昔からの生活や昔の人たちの思いがこもったものをしっかりと受け継いでいました。

アボリジニの音楽やダンス、芸術作品などに触れてみて、大仙市の伝統芸能もしっかり残していきたいと思います。先人たちが残してくれた一つ一つの伝統を私たちは責任を持って受け継ぐ必要があると思います。

今回インタビューに答えてくれた人たちは、小さい頃から伝統芸能に触れてもらうことで、「それらを残していきたい」という強い気持ちをもってもらえれば、それが継承につながっていくのだとおっしゃっていました。

私自身、小学校のときから角間川盆踊りに参加し続けていますが、これも一つの継承活動であることを実感しました。しかし、中学校を卒業した後は盆踊りに関わる機会がなくなってしまうと思うので、そのような年齢層を対象に何をしていくかを考えることも、継承問題の解消に必要だと思いました。

V エピソード

1 ファームステイ

私は、Rossさんの家にステイさせてもらいました。緑が多く、のどかで素敵な場所にあるお宅でした。色々な所に連れて行ってもらい、たくさんのおいしいものを食べさせてもらい、幸せな時間を過ごしました。滞在最終日の夜には、お土産を渡しました。はしと手ぬぐいとそうめんです。「Wow!」といって喜んでくれて嬉しかったです。その夜のティータイムには、Glenさん（ホストファザー）とSueさん（ホストマザー）と、Danielさん（息子さん）と一緒に折り紙をしました。私たちが鶴の折り方を教えてあげると、逆に紙風船の折り方を教えてくれて、オーストラリアの人たちも折り紙ができることに驚きました。



(ステイ先の夕食)

2 オーギーキッズとの交流

五日目にはレイフォレストロッジで、オーギーキッズと交流しました。日本語を話せる子もたくさんいて驚きました。思っていたよりも自分の英語が通じ、たくさん会話ができてよかったです。夜には、みんなでダンスをしたのが楽しかったです



(仲良くなったオーギーキッズ)

3 エメラルドグリーン的大海

七日目には船に乗って、一日100人の上陸のみ許可されているフランクランド島へ行きました。行くまでは曇りで天気はよくなかったのですが、島へ着く頃にはこの研修の中で一番の晴天で最高でした。

この島で見た海は、言葉では表せないほど美しく、砂浜にはゴミ一つないし、海水は透き通っているし、まさに宝石箱のようでした。

貝殻や生物の持ち帰りが禁止されており、皆がきまりを守り続けているからこそ、この美しい自然が存在するのだということを感じました。



(フランクランド島と海)

4 海外で働く日本人へインタビュー

Q 海外で働こうと思ったきっかけは何ですか？

A ホテルで働くために、海外に出て本場の英語を勉強したいと思ったから。

Q 外国人とコミュニケーションをとる上で、大切にしていることは何ですか？

A 何でも笑ってごまかさないで、自分の思っていることを相手に伝えようとする事。

Q どのようにして英語を勉強しましたか？

A 好きな海外映画や海外ドラマを最初に日本語字幕で見て、次に英語字幕で見て、最後に字幕なしで見るということをしていました。自分の好きなものだと覚えられます。あとは、英語の辞書を毎晩読んでいました。

Q 外国人と接する上で大切なことは何ですか？

A 自国と相手の国の文化の違いを理解して、他国の人の考え方を受け入れること。日本人とオーストラリア人の考え方の違いをきちんと理解すること。

V 研修を終えて

この研修では、日本には学べないことをたくさん吸収することができました。例えば、言語の違う人とのコミュニケーションのとり方です。はじめは、自分もっている知識では十分に会話をすることができなくて、困ったときもありました。しかし、ジェスチャーを付けて説明すると相手に伝わりました。ほんの少しでも英語が通じた瞬間は嬉しかったです。相手に伝えようとする気持ちと、相手を理解しようという気持ちがあれば、どんな人ともコミュニケーションがとれることが分かりました。

また、日本とは違う環境で過ごしてみて、文化の違いを実感しました。とてもフレンドリーで心優しい人が多いというオーストラリアのよさを見付けるとともに、日本のよさも見付けることができました。

私は将来、英語を使う職業に就きたいと考えているので、これからさらに英語を勉強していきたいです。10日間の研修を通して、自分の視野が広がった気がします。とても貴重な経験になりました。この研修に行かせていただき感謝しています。ありがとうございました。

AUSTRALIA REPORT

No. 10 大曲南中学校 菊池由佳

I はじめに

私がこの海外派遣に応募した理由は、外国に興味があったからです。これまで海外を訪れた経験がなかった私には、地理の教科書で学んだ海外についての知識しかありませんでした。私は以前から、「いつかこの国々を自分で訪れて、自分の目で確かめたい」と思っていたので、この海外研修は自分の視野を広げるよい機会になると思い、参加を希望しました。

II 研究テーマと設定の理由

オーストラリアから学ぶ！地域の魅力を伝えるには？

【設定理由】

現在、大仙市は、一年間におよそ1,000人というペースで人口が減少し、著しく少子高齢化が進んでいます。しかし、私は、大仙市には他の地域に負けないくらい、たくさんの魅力があると思います。大仙市をどのようにPRすれば、人口減少を抑え、かつ人を呼び込むことができるのでしょうか。観光地としてたくさんの人が訪れているオーストラリアで、リサーチしてみることにしました。

III 調査活動

- 1 大仙市役所の総合政策課・観光交流課で働いている方に、大仙市についてインタビューする。
- 2 オーストラリアの観光者向けの取組を、インタビューしたり、パンフレットを読んだりするなどして調べる

IV 調べて分かったこと

1 大仙市の取組

大仙市では、人口減少を抑えるために、お試し移住を実施したり、大学生のスポーツ合宿を受け入れたりしています。また、大仙市は花火産業でも有名なので、「毎月花火が打ちあがる街」として、市をPRしています。大曲の花火には外国人観光客も訪れるので、ガイドブックやプログラムも、多言語に対応しているそうです。

2 オーストラリアで見聞きしたこと

① インフォメーションセンターの設置

ホストファザーが、私たちをまちのインフォメーションセンターに連れて行ってくれました。中に入ると、そこで働いている方が、地域の情報が掲載されたパンフレットを手渡してくれました。小さな建物でしたが、オーストラリアに生息する動物のはく製や木の実が展示されていて、興味深い場所でした。さらに、お土産も売られていて、観光客が訪れるのによい場所だと思いました。私は、このようなインフォメーションセンターを、ケアンズの市内散策の時にも発見しました。地域ごとにインフォメーションセンターがある、というのは大仙市にはないことなので、新鮮に感じました。



インフォメーションセンターの様子

② ダブルツリー・バイ・ヒルトンの取組

私たちが宿泊したホテルで働く日本人の児玉さんにインタビューしました。

Q. ダブルツリー・バイ・ヒルトンでは、外国からのお客様のためにどのようなことをしていますか？

A. ランゲージ・バリアを解消するようにしています。外国語を話せる人を雇ったり、(多言語で書かれた)紙でインフォメーションを表示したりしています。たとえば、日本語や中国語などですね。

Q. ホテルだけではなく、ケアンズ全体に観光に来てもらうために、取り組んでいることはありますか？

A. はい。私たちも、観光にいらっしゃるお客様には「まずケアンズに」来てもらいたいので、日本の旅行会社と連携して広告をするなどして、プロモーションをしています。

Q. では、ケアンズのどんなところが魅力だと思いますか？

A. 世界遺産が二つあるということ。そして、人々がみなフレンドリーで、過ごしやすい地域であるということですね。

*グレートバリアリーフとダブルツリー・バイ・ヒルトンだけではなく、ケアンズ市内では、店の看板やメニューが日本語でも表記されているところが非常に多く、さまざまな国から訪れる観光客に対応して、情報を多言語で表示していることが分かりました。これは、大仙市でも、花火を見に来る外国人観光客のために行われています。海外から観光客を呼び込むために、多言語対応をするというのは大切なことだと実感しました。

③ 親切なオーストラリアの人々

オーストラリアで、何人かの親切な人々に出会いました。ショッピングセンターにホストマザーとショッピングに出かけた日の出来事です。

私が缶ジュースを買おうと手に取ったとき、缶を落としてしまい、中のジュースがこぼれてしまいました。その時、近くで見ていた一般のオーストラリア人が、片付けるのを手伝ってくれました。さらに、英語を上手に話せない私に代わって、店員に説明をしてくれました。店員の方は、「お金は払わなくてもいいですよ」と言ってくれました。私は二人に、Thank you. と Sorry. しか言えませんでした。二人とも笑顔で丁寧に接してくれて、嬉しかったです。

このことをホストマザーに話すと、彼女は、「Australian are helpfully. But it is Japanese too.」(オーストラリア人は親切です。でも、それは日本人もですよ。)と言ってくれました。



ショッピングセンターの内部

④ ケアンズ市内で

友達と三人でケアンズ市内を散策していた時の出来事です。

私たちが道に迷って、地図を持って道路にたたずんでいると、一人のオーストラリア人が近くに来て、「Map.」と言いました。私たちが地図を渡すと、「We are here. This street.」(私たちはここにいます。この通りです)と地図を指し示して教えてくれました。

V まとめと考察

海外を訪れるときに、言語の違いは大きな壁になってしまいます。

オーストラリアでは、情報を多言語で表示するなど、外国人のためのサービスが充実していました。これは、

オーストラリアが観光地として人気である理由の一つではないかと思いました。大仙市でも、今年の国際花火シンポジウムに向けて多言語化が進んでいます。しかし、来てくれる人たちに秋田の魅力をより知ってもらうためには、花火に特化したものだけではなく、さまざまな場所やイベント等で多言語化を進めるべきだと考えました。

また、オーストラリアでは、たくさんの親切な人々に出会うことができました。日本人はよく、外国人に「親切だ」と言われています。しかし、それは日本に限ったことではなく、オーストラリアにも親切な人はたくさんいるのだということを学びました。日本人には、外国人と話すことを怖れてしまったり、内気になってしまったりするところがあります。だから、「困っている人を見かけたら、自分から積極的に助けよう」とするオーストラリア人の姿勢を見習うべきだと思います。

私は、「またオーストラリアに来たい」と思いました。

人口減少を抑えたり、外から人を呼び込んだりするためには、無理に観光地を作る必要はありません。いつでも親切な心と、困っている人を助けようとする少しの勇気があれば、それに心を打たれる人がいて、少しずつまちが活性化していくのではないかと考えました。相手に分かってもらうには、自分から相手に話しかけていくこと・・・この思いこそが魅力を伝えることの基盤になるのではないのでしょうか。

VI エピソード

1 ホームステイ

私は、Hans/Marita Vossさんのお宅に3日間ホームステイしました。

ホストファザーとホストマザーは、私たちのことを「Family」と言ってくれました。私たちは3日間、二人のことを「Papa」「Mama」と呼ばせてもらいました。

Mamaは料理がとても上手で、毎日3食、私たちのためにおいしい料理を作ってくれました。日本では見たことのない料理や、珍しい果物を食べさせてくれて、食文化や風土の違いに触れることができました。



一日目の昼食 パスタ入りのスープ



昼食後はたくさんの果物が出される

Papaは私たちがいろいろな場所に連れて行ってくれました。特に印象に残った場所は、グラナイトゴージ・ネイチャーパークです。私たちはそこで、ロックワラビーに餌付けをしました。ロックワラビーだけではなく、綺麗なクジャクや馬の親子、舌が青い蛇などがいました。動物たちと触れ合った後は、ホストファミリーと私たちでピクニックをしました。

ホームステイ最終日の夕食は、私たちが作りました。二人へのお礼の気持ちを込めて、あきたこまちを炊き、味噌汁も作りました。日本食が口に合うか心配でしたが、PapaもMamaも、「Delicious」と言って食べてくれました。二人がスプーンを使って味噌汁を飲んでいたのので、私たちもスプーンを使って飲みました。



味噌汁を飲む Papa

2 オージーキッズとの交流会

ホストファミリーとお別れしてから、マンガリーフォアの子どもたちが集まってきて、一緒に昼食をとりながらお話をしました。オージーキッズのほとんどは、オーストラリア人と日本人のハーフで、上手な日本語で話しかけてくれました。

昼食の後は、障害物競走やボートづくりをしました。元気なオージーキッズについていくのは大変でしたが、広い自然の中で体をたくさん動かすことができました。オージーキッズとのお別れの際に、

私がポケモンのキーホルダーをあげると、「I like Pokemon!」と言って、とても喜んでくれました。日本のゲームが、オーストラリアでも人気があることを知って、嬉しかったです。



オージーキッズ

3 アボリジニの文化体験

アボリジニが使うブーメランを投げる体験をしました。独特な形をしています、少しの力でよく飛ぶブーメランでした。アボリジニのダンスショーも見ました。伝統的な楽器を用いた演奏に合わせて、狩猟の様子やヘビなどの動物をまねた踊りを披露してくれました。

4 ケアンズ市内を散策

キュランダ鉄道に乗ってケアンズ市内に移動して、ショッピングをしました。

ケアンズ市内の道路は碁盤目状になっていて、道路の幅も広がっていました。交通信号の青色点滅の時間がとても短いこともあり、急いで渡る必要がありました。ものを買うときは店員との会話が必要になるので、英語が通じるかという不安がありました。ケアンズには日本人がたくさんいて、ほとんどのお土産屋さんで日本人スタッフが働いていました。しかし、カフェに入ったときは店員が日本人ではなかったため、英語で注文しました。店員はホストファミリーと違い早口で喋ってきたので、言われていることが理解できず焦った場面もありましたが、ゆっくり言ってもらったり、何度も聞き返したりして、何とか注文することができました。

5 オーストラリアで働く日本人にインタビュー

オーストラリアで働く日本人の日下部さんにインタビューをしました。

Q. どうやって英語を勉強しましたか？

A. 単語をたくさん覚えるようにしました。1日200単語を、見て、書くという勉強を繰り返していました。単語を覚えるだけで、話せるようになったし、言われていることが分かるようにもなりました。

Q. オーストラリアで困ったことは何ですか？

A. 初めて働いた会社ではヨーロッパ出身者が多く、英語の発音の違いから、指示されたことが聞き取れず上司に呼び出されたことがありました。

Q. 英語でコミュニケーションをとる上で大切なことは何ですか？

A. 笑ってごまかさないことと、自分の意見をちゃんと持つことです。日本と違って、外国は自分の意見を言い合う文化なので、思ったことはきちんと伝えなくてはなりません。

このお話を聞いて、言葉や文化が違っていても、自分が持っている考えはきちんと伝えなければいけないということを学びました。私はそれまで、英語が伝わらなかったときに諦めてしまっていたところがあったので、外国人と話すときは、簡単に折れてしまうような自分は捨てなくてはいけないなと思いました。

Ⅶ 研修を終えて

言葉も文化も全く違う国に飛び込むということに、最初はとても不安を感じていました。しかし、実際に行ってみると、日本とは全く違う環境が、自分にとってはとてもおもしろく感じられました。オーストラリアでは、日本にいたら絶対にできなかった貴重な体験をたくさんさせてもらいました。

英語に関しても、最初は何を言われているのか、どう反応していいかも分からず、日本で勉強してきた英語と、実際にネイティブの生活で使われている英語の違いに戸惑ってしまいました。しかし、ホストファミリーとの会話を重ねていく間に、英語の聞き取りに慣れてきて、会話をつなぐための相槌の打ち方もわかるようになっていきました。私はそれまで、「伝わらないのが怖い」という思いから、英語で話しかけることに抵抗がありましたが、この研修の中で、徐々にその思いは消えて、「1回で上手に伝わらなくてもいいから、言いたいことを言ってみよう」という思いに変化していきました。それからは、本当の意味で、英語での会話を楽しむようになりました。

外国人とコミュニケーションをとるときは、自分の殻に閉じこもってはいけないのだということを学びました。私自身も、この研修で自分の殻を破ることができたのではないかと思います。

そして、この研修で学んだこと、得たもの、すべてを無駄にしないように、これからの人生の糧にしたいと思います。

最後に、この研修に参加する機会をいただいた教育委員会の皆様と、先生方、そして家族に深く感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



バスでの移動中に撮影した美しい川



キュランダ鉄道

AUSTRALIA REPORT

大仙市中学校生徒海外派遣に参加して

No. 11 大曲南中学校 2年 佐々木 万穂

I はじめに

私がこの研修に参加しようと思ったのは、二つの理由があります。一つ目は自分の英語がどれだけオーストラリアで通用するか確かめたかったからです。自分は小さいときから英語の塾へ通っています。自分もっている英語力を確かめ、これからの英語学習に生かしたいと思いました。

二つ目は自分のコミュニケーション力をアップさせたかったからです。私は将来、人と接する仕事に就きたいと考えています。自分の英語力を向上させるとともに、コミュニケーション力に必要なことは何か確かめようと思いました。

II 研究テーマ/テーマ設定の理由

1 テーマ

「現地発祥の伝統文化を守り、残していくためにはどうすべきか」

2 設定の理由

大仙市には多くの伝統文化があります。しかしそのうちのいくつかは、後継者不足などに悩まされ、継続が厳しくなっているものがあります。それらを守っていくためには何をすればよいのか、オーストラリアの伝統文化と比較しながら、答えを見つけようと思いました。

III 検証方法

- ① 大仙市役所の方やオーストラリアの人へインタビューする。
- ② 文化の継承方法の共通点と相違点を比べる。

IV 調査報告

1 大仙市でのインタビュー

(1) 文化財保護課

Q：大仙市内の有形・無形文化財にはどのようなものがありますか？

A：無形文化財については、大曲・刈和野の大綱引き、角間川盆踊り、国見ささら、梵天などがあります。有形文化財・史跡については、旧池田氏庭園、弘田柵跡、線刻千手観音等鏡像、檜岡焼などがあります。

Q：それらを守り、残していくために何をしていますか？

A：若い人に実際にふれてもらい、興味や関心をもってもらえるような活動をしています。例えば、学校に教えに行くなどです。また、保存会を立ち上げることも有効です。

(2) 仙北支所市民サービス課

Q：和服が着られなくなった理由は何ですか？

A：生活の洋風化が一番の理由だと思います。

2 大仙市でのインタビューについての考察

インタビューをして、文化財には日本古来の生活に根付いたものが多いこと、またそれらを継承していくうえで、後継者不足と生活の洋風化が課題になっているということが分かりました。若い人たちが伝統文化に価値を見いだせるかが重要なのだそうです。また、関連行事に参加しやすい環境づくりも、それらを次世代へ継承していくための一つのステップになるそうです。伝統文化の継承には、若い人の力が不可欠なのだと感じました。また、伝統工芸品として残っているものについては、だれでも継承できるわけではなく、確かな技術を親から子へ、子から孫へと受け継いでいく必要があるようです。

3 オーストラリアでのインタビュー

キュランダにあるレインフォレストेशन・ネイチャーパークのアボリジニ

キュランダは、クイーンズランド州の北東にある都市ケアンズから北西へ約25kmの位置にある世界自然遺産に登録された熱帯雨林に囲まれた小さな村です。アボリジニの言葉で「熱帯雨林の村」という意味です。この村にあるレインフォレストेशन・ネイチャーパークは、世界自然遺産の熱帯雨林内につくられた40haの総合観光施設です。オーストラリアの先住民族であるアボリジニは、狩猟採集が生活の基盤であり、過酷な自然環境の中で、独自の文化を形成してきました。この観光施設では、アボリジニ文化を体験するアトラクションがあり、インタビューはアトラクションの際にガイドを通じて、ここで働いているアボリジニの方に行いました。



先住民族 アボリジニ

Q：伝統的なダンスはどのようにして継承しているのですか？

A：アボリジニは文字をもたないため、すべて口頭で伝えています。基本的に男性のみに伝えられ、父から子へ、子から孫へと受け継がれていきます。

Q：狩猟につかう槍やブーメランなどの道具の技術はどのようにして受け継がれていますか？

A：アボリジニの生活は狩猟採集の毎日で、日々の生活の中で、親から自然と学びます。

4 オーストラリアでのインタビューについての考察

インタビューをして感じたことは、アボリジニ固有の文化は、すでに生活に根差した文化ではなくなっており、観光資源のように扱われてしまっているということです。イギリスによるオーストラリアの植民地化とともに、アボリジニは殺害されたり、強制移住させられたりしました。その段階でアボリジニの生活文化は破壊されてしまっており、このように観光資源のように扱われているのだと思いました。そのため、日本の工芸品と違い、アボリジニのブーメランは観光客のお土産となり、工場で大量生産され、今回訪れた各地の売店で同じ商品を目にしました。オーストラリアでは、アボリジニや彼らに由来するブーメランなどの道具が観光資源としてとても大きくPRされているのが印象的でした。

5 大仙市とオーストラリアの比較

両者を比較すると、大仙市ではまだ昔からの文化や風習が受け継がれ、四季折々の行事として残っていることが改めて理解できました。自分の住んでいる角間川地区でも、夏には角間川盆踊

りがあり、冬には厄払い梵天があります。それらは大曲南中学校でも伝統文化継承活動として取り組まれており、地域の皆さんから教わったり、全校生徒で参加したりする機会があります。

一方、オーストラリアでは、大仙市のように日常生活に根ざした文化や風習が残っていると言いはれ、欧米の文化が流入した段階でアボリジニ固有の文化が浸食され、既に途切れていると感じました。ブーメランはもう狩猟道具として用いられることはなく、観光資源の一つとなっていました。ただし、観光資源として残ることで、まったく消滅してしまうことは免れているようです。

このことから、文化は一度途絶えると復活させることはとても難しいことであるため、文化はしっかり受け継いでいかなければならない非常に大切なものだという思いを強くしました。現在秋田県では人口減少がどんどん進んでおり、2017年3月には100万人を下回ると予想されているようです。そのため、今後伝統文化の継承がどんどん難しくなることが考えられるので、文化財保護課の方がおっしゃっていたように、地域で保存会を立ち上げることなどが有効ではないかと考えました。今の自分たちにできることは、学校の伝統文化継承活動の意義をしっかりと理解しながら取り組んでいくことや、地域行事に積極的に参加していくことだと思います。今回は、伝統文化の継承という視点で、外から自分たちの住んでいる地域を見ることができて、とても有意義でした。

V エピソード

1 オーストラリアの自然

オーストラリアは日本と違い、牧草地が広がり、あたりの丘一帯が家畜のための牧場のようになっていました。家の外を眺めると、当たり前のように牛や羊がいることに驚きました。また、ホストファザーのJohnさんに連れて行ってもらった滝では、たくさんの人たちが水浴びをしており、日本ではあまり見られない光景でした。

キュランダの熱帯雨林では、太古の昔からあまり姿を変えていない植物がたくさんありました。茎に大量のとげが生えている植物や、エルクホーン・フーンという大きなまつぼっくりのような植物を見て、恐竜が栄えていた時代にタイムスリップしたような気分になりました。

オーストラリアへの動植物や土、食べ物の持ち込みが厳しいのは、これらを守るためだということが分かりました。



シダ植物 エルクホーン・フーン



世界自然遺産 フランクリン島

2 オーストラリアの動物たち

オーストラリアといえば、カンガルーやコアラ、エミューなどが有名です。「カンガルー注意」や「羊が横切ります」という意味の道路標識もありました。特に印象に残ったのがカンガルーで、朝ロッジから出ると、十数匹のカンガルーがこちらを見ていました。後で自然の家のスタッフに聞くと、カンガルーより少し小さい「ワラビー」だそうで、予想以上



ワラビー

に走る（ジャンプする）スピードが速かったです。

また、市街地に野生の鳥がたくさんいることも驚きました。オーストラリアの人たちはパンをちぎって与えるなど、動物との生活に慣れている様子でした。オーストラリアの鳥はエミューをはじめ飛べないものが多いと聞いていましたが、私が見た鳥たちも走り回っていました。外敵があまりいないためだと思います。

3 食文化

オーストラリアに行ってまず驚いたのは牛乳です。日本の牛乳とは別物で、サラサラにした飲むヨーグルトのような食感で、慣れるまで時間がかかりました。またオーストラリアは水資源が少ないために、水が高価です。しかしそれ以外の飲料は安く、スポーツドリンクや炭酸飲料が水以下の値段になっていることもあり意外でした。オーストラリアの食事では、ハンバーガーがよく出てきました。自分で好きな具材を取り、パンにはさんで食べるといった食べ方でした。オーストラリアでよく親しまれている食べ物なのだと感じました。

4 ファームステイ

ステイ先のお宅のテレビで、オーストラリアの人気スポーツであるクリケットの試合を見せてもらいました。ルールが独特で、ホストファザーのJohnさんに説明してもらいました。6～12人で行うスポーツで、途中昼休憩をとるほど時間がかかるそうです。Johnは地元のチームが勝つとうれしいと話していました。夜にはウノをして遊びました。ルールが日本と全く違って驚きました。オーストラリアでは勝ったら「シャワー」と言って体を洗う真似をするそうです。同じカードゲームでも、それぞれの地域性が出るのが面白いと思いました。Johnは私たちを様々な場所に連れて行ってくれました。滝や湖、BBQなど、普段は味わうことのできない貴重な体験をすることができました。

5 伝統的な楽器ディジュリドゥ

アボリジニが用いる楽器で、演奏の仕方或使用目的は多様です。シロアリに食われて筒状になったユーカリの木から作られており、吹いたときに名前のような音が出ることから、イギリス人がそう名付けたそうです。

6 オージーキッズとの交流、土ボタル鑑賞

オージーキッズはとても積極的で、彼らとは、障害物レースやダンスをして交流しました。

楽器の演奏やタップダンスを見せてもらい、とても楽しい時間を過ごしました。お返しに派遣生全員でPPAPを披露しました。自分が例の衣装を着てセンターに登場すると、「PPAPだ！」という歓声が上がり、皆が自分を指差して喜んでいました。日本のお笑いの知名度はかなり高いものだと感じました。途中から飛び入り参加をしてくれたキッズもいました。

ダンスを楽しんだ後は熱帯雨林に生息する「土ボタル」とよばれる虫を見に行きました。土ボタルは、木の上から光る糸をだしてぶら下げ、それに寄って来た虫を捕まえて食べる習性があります。この光る糸は、人によって見え方が様々で、青く見えると人間の目、緑色などに見えると動物の目をしているそうです。自分は緑色にしか見えませんでした。



元気なオージーキッズ

7 現地で働く日本人の方へインタビュー

オーストラリアで働く3人の方にインタビューしました。

児玉さん

Q：オーストラリアへ来たきっかけは何ですか？

A：ホテルで仕事をするための応募書類に資格を記入する欄があり、オーストラリアの語学学校へ行き、勉強することにしました。



左から児玉さん、日下部さん、黒田さん

Q：オーストラリアに来て、困ったことは何ですか？

A：自分の英語が通じませんでした。日本の当たり前も通用しませんでした。しかし、それを説明することがやりがいでもあります。

Q：オーストラリアについて驚いたことは何ですか？

A：オーストラリアの人たちは家族を優先させることです（例 工作中でも簡単に子どもを迎えに行くことができる）。そのため休みがとりやすい環境といえます。

Q：英語でコミュニケーションをとるコツは何ですか。

A：笑いを絶やさないことです。笑いも一つのコミュニケーションスキルです。できる限り会話を弾ませることが重要です。通じなくても、一生懸命に積極的に伝えようとするのが大事です。

日下部さん

Q：英語を勉強するときのコツは何ですか？

A：単語を侮らないことです。単語は、見る、覚える、書く、言う、の順で繰り返し練習するとよいです。日常会話を練習してもよいです。

Q：オーストラリアに来て困ったことは何ですか？

A：英語には慣れていましたが、ヨーロッパ出身者の英語が分かりませんでした。発音が聞き取れませんでした。

Q：英語でコミュニケーションをとるコツは何ですか？

A：絶対に笑ってごまかさないことです。他人に左右されず、自分の意見をもつことです。

黒田さん

Q：英語を勉強するときのコツは何ですか？

A：ボキャブラリーを豊富にすることです。映画を見るとき、字幕や音声を英語にするとよいです。外国人の友達が、お酒を飲みながら教えてくれたこともありました。

Q：日本との違いをどのようなところに感じましたか？

A：生活習慣や文化の違いを強く感じました。学校の教育制度も違います。

Q：オーストラリアへ来ようとしたきっかけは何ですか？

A：アメリカとメキシコへ行ったときに刺激を受けました。英語と日本語の両方を流暢に話す人を格好いいと思ったからです。また、教科書では使わない英語を使えるようになりたいとも思いました。

Q：英語でコミュニケーションをとるコツは何ですか？

A：恥ずかしがらないことです。英語は武器です。

以上のように、3人の方から貴重なお話を伺うことができました。3人のお話を聞いて、たとえ通じなくても、積極的にコミュニケーションをとろうとすることが大切だと分かりました。自分は、児玉さんの「笑いを絶やさない」という言葉が印象に残りました。誰に対してでも、笑顔はとても大きな武器になるのだなと感じました。

8 ダブルツリー・バイ・ヒルトン バックヤードツアー

ダブルツリー・バイ・ヒルトンの裏側を見てきました。このホテルは、チェックインしたときにクッキーのサービスがあります。焼きたての状態でクッキーを出すために、フロントの下にオーブンがあり、そこで温めているそうです。また、フロントの混み具合をモニターで確認して、お客様を待たせず柔軟に対応できるようにしているそうです。絶対に下準備を怠らないホテルだと感じました。

エコに関する取組についても伺いました。ヒルトングループとして、使わない石鹸を回収し新しく作り替えアフリカの国々に送ったり、ホテルごとに、リサイクルして使えるものは最大限使うことを心がけたりしているそうです。さらにヒルトンは、DBHという動物保護のボランティアをしたり、体が不自由な人々のサポートに行ったりする活動など、地域に密着し貢献しているホテルだと思いました。

VI 海外研修を終えて

今回の研修では、オーストラリアの生きた英語に触れ、自分の英語力を確かめるとともに、自分が必要とするコミュニケーションの力を付けることができました。また、自分の住んでいる地域を外から見ることによって、地元の魅力が再発見し、改めて大仙市は魅力にあふれたよい地域なのだと感じるようになりました。このような研修ができたのも、大仙市教育委員会や両親をはじめ、たくさんの方々のおかげです。本当にありがとうございました。この経験を生かし、将来大仙市に貢献できるようになりたいです。



オーストラリア見聞録



No. 12 西仙北中学校 佐々木 玲央

I はじめに

私は、小さい頃から世界の国々のことが書かれている本が好きで、世界各国の人々の生活の様子や文化などにずっと興味をもってきました。本を読む度に、いつかは必ず海外へ行ってみたいと思っていました。また、小学生から英語の学習を始め、英語で会話することに憧れを抱いていました。そんな海外への好奇心の実現と自らが進んで挑戦することが、今回の研修への参加理由です。

II 研究テーマ

「どのようにすれば水を使用する量を抑え、

かつ人々が安心・安全・快適に暮らすことができるのか？」

〈テーマ設定の理由〉

私たちの身近にある「水」は、人々が生きていくために必要不可欠なものです。日本は水資源が豊富で、日々の生活の中でたくさんの水が使われています。しかし、近年気候の変化により、水不足の問題が起こることがあります。一方オーストラリアでは水資源が乏しく、普段から使用する水の量を減らす工夫をしているので、日本でも参考にできる取組があるのではないかと思います。このテーマを設定しました。水以外にも快適な暮らしの工夫について調べる予定を立てました。現地の方々の日常の生活に着目しながら調査しようと考えました。

III 調べた内容と結果

ホストファミリーやマンガリーフォールズの大屋泰斗さんに、水資源や住環境についてインタビューするとともに、実際に自分の目で見て調べました。その結果は次のとおりです。

【水に関わる状況】

- ・シャワーは3分
- ・雨水がとても大切
(雨季と乾季があり、雨季に雨水を貯める)
- ・井戸水を使用している
- ・オーストラリアの1 m³あたりの水道料金は1.01ドル
- ・食事で使う皿の枚数が少なく、ほぼワンプレート

【暑さ対策】

- ・部屋の天井にファンがある
- ・家は平屋の高床式が多く、風通しがよい造りになっている
- ・大きな窓はなく日差しが入ってこない造りで、屋根のかかったデッキやバルコニーがある

IV 気付いたこと、考えたこと

オーストラリアでは入浴はシャワーのみです。浴槽がなくシャワーの時間も決められていました。これは水の無駄使いを防ぎ、使用する水の量を極力少なくするためです。なぜなら、オーストラリアでは年間を通じて乾季には雨がほとんど降らず、たった3か月しかない雨季に雨水をタンクに貯めておいて使っているからです。井戸水も利用されていますが、これらの水を浄化して飲み水にしたり、そのまま生活用の水にしたりして、年間通して使用しています。

食事について気が付いたことは、一人一枚の皿に全ての料理を盛り付けていたことです。食器洗いのための水の使用量を減らすためだそうです。

日本では夏の暑さ対策として、打ち水や風鈴、かき氷、扇風機やエアコンなどがありますが、オーストラリアでは、ほとんどの建物の部屋の天井に巨大なファンがありました。これにより空気の循環をよくします。また平屋で窓はあまり大きくなく、部屋の中に日差しが入らないようになっています。オーストラリアのケアンズはこの時期、雨季で高温多湿であったにもかかわらず、涼しく快適に過ごすことができたのは、建物の形状と空気の循環（風通しのよさ）によるものと考えられます。広大な敷地面積があるため、平屋で風通しのよい建物が一般的でした。その土地の風土に適した建物が建てられていることが分かりました。



貯水タンク



ファームステイでの朝食

V エピソードなど

1 飲み物の値段が高い！

のどが渇いて飲み物を購入しようとしたところ、水が約4ドル、ジュース類が5ドル（為替レートは1ドル＝90円弱）でした。日本に比べて飲み物が高価で気軽には買えませんでした。普段、水道の蛇口からすぐに美味しい水が飲める私たちは幸せなんだなあと実感しました。

2 大自然の中で



滝

① 滝！滝！滝！

とにかく滝をたくさん見ました。周辺には熱帯雨林が繁り、動物たち（亀や鳥など）が生息しています。凄い迫力がありました。



野生のカンガルー

② 野生のカンガルー発見

カンガルーが普通に目の前を通り過ぎていきました。

③ カーテンフィグツリー

「カーテンフィグツリー」＝カーテンのように根を垂らしたいちじくの木です。樹齢数百年を超えるととても大きくて大地のエネルギーを感じるような木でした。このような木は初めて見ました。



カーテンフィグツリー

④ 土ポタル観賞

幻想的な無数の光を放つ土ポタル。緑色に見える人は「動物的な目」をもっていて、青色に見える人は「人間的な目」をもっているそうです。懐中電灯で照らすと死んでしまうので、真っ暗闇の中で観察しました。最近では日本でもなかなかホタルを見ることができないので、とてもきれいで感動しました。

⑤ フランクランド島

1日100人の上陸のみ許可された特別地域の島です。海の色が真っ青で、なんでこんなにきれいな色をしているのだろう、と不思議に思いました。特殊な生態系の宝庫で、そこにしか生息しないナマコや植物など、珍しい動植物をたくさん見ることができました。



フランクランド島 上陸

3 先住民アボリジニ

オーストラリア大陸の先住民アボリジニの伝統的な踊りと楽器の演奏が衝撃的でした。思わず踊りだしたくなるようなリズムの音楽で楽しかったです。また、アボリジニアートも素晴らしかったです。アボリジニの文化は、世界でも古い歴史をもつ既存の文化であり、大自然への深い敬愛やそこに住む動物たちと調和を望んでいるとのことでした。日本の文化に通じるものがあると思いました。



アボリジニの看板

VI ファームステイ&現地で働く日本人へのインタビューで学んだこと、印象に残った言葉

1 海外の方とのコミュニケーションのとり方

「笑ってごまかさない」

笑って引き下がるのではなく、分からないことは聞く姿勢が大事です。

笑ってごまかすとそこで会話が終わってしまい、本当に自分が伝えたいことが相手に伝わらないと感じました。



ファームステイの家族と

2 英語の勉強法

「英語を覚えるために英単語を毎日200単語書く、辞書をながめる、自分の好きなものから英語を学ぶ（例えば趣味などから）」

様々な勉強方法を紹介していただきましたが、日々の努力が大事と感じました。

3 あいさつは当たり前のこと

「日本人は自分のことをあまり主張しない、外国人は自分のことをよく話す。」

英語初心者の私にとって言語だけでのやり取りではなく、なんとかして自分の思いを伝えようとする気持ちが重要なのだと思いました。これからは、人と接する際にはきちんと相手の目を見て、顔を上げて、表情豊かに話そうと思います。国の別なく、この考え方は非常にシンプルで、かつコミュニケーションの基本です。これから心掛けていきたいです。

Ⅶ 海外研修を終えて

「百聞は一見に如かず」という言葉があります。実際に見たオーストラリアの大地は、写真で見ても想像していた以上に広がりました。この研修では、五感をフルに活用し、自分の目で見て、足で歩き、その土地の文化や生活環境などを実際に肌で感じとることができました。

また、この研修で楽しかったことの一つに、参加した仲間と一緒に過ごしたことが挙げられます。共に素晴らしい景色を見て感動し、様々な体験をしたことは、きっと何年たっても忘れない貴重な思い出となるでしょう。



仲間と一緒に

初日、期待で胸高鳴る想いで迎えた10日間の研修は、長いようであつという間でした。研修を通して、怖れずに挑戦することの大切さを学ぶことができました。これからも世界の国々や世界の中の日本・大仙市について関心を持ち、「大仙市の未来は私たちがつくる」をモットーにいろいろなことに挑戦していこうと思います。

最後になりましたが、無事研修を終えることができ、受け入れてくださったファームステイのご家族、支えてくださった関係者の皆様には心から感謝しています。本当にありがとうございました。





I はじめに

私は将来、報道関係の仕事に就き、世界の人々と関わりをもちたいと思っています。そのためには、英語を話す能力とコミュニケーション能力がとても重要だと考えています。そこで、オーストラリアの方々と交流し生の英語に触れて、英語の能力を高めたいと思いました。また、ホストファミリーや現地の学生との交流で、自分のコミュニケーション能力を試すとともに、自分のコミュニケーション能力も向上したいと思い、この研修に参加しました。

II 研究テーマ・設定の理由

1 研究テーマ

～伝統行事以外にも大仙市に観光客を呼び込むには？～

2 設定の理由

私たちの住む大仙市では、「大曲の花火」を代表としてさまざまな伝統行事が行われています。私の住む西仙北にも「刈和野の大綱引き」という伝統行事があります。伝統行事が行われると、大勢の観光客が大仙市を訪れていると感じています。しかし、伝統行事のとき以外の大仙市の観光客の数は、まだまだ少ないのが現状だと思います。そこで今回行くオーストラリアで、観光客を増やす工夫をリサーチしたいと思い、このテーマを設定しました。

III 研究テーマについての予想・検証方法・調べた内容・考察

1 研究テーマについての予想

オーストラリアでの観光客を呼び込む工夫を予想してみました。

- ・観光客向けの施設がある。
- ・「この地域といたらこれ！」という地域を売り出すポイントがある。

2 検証方法

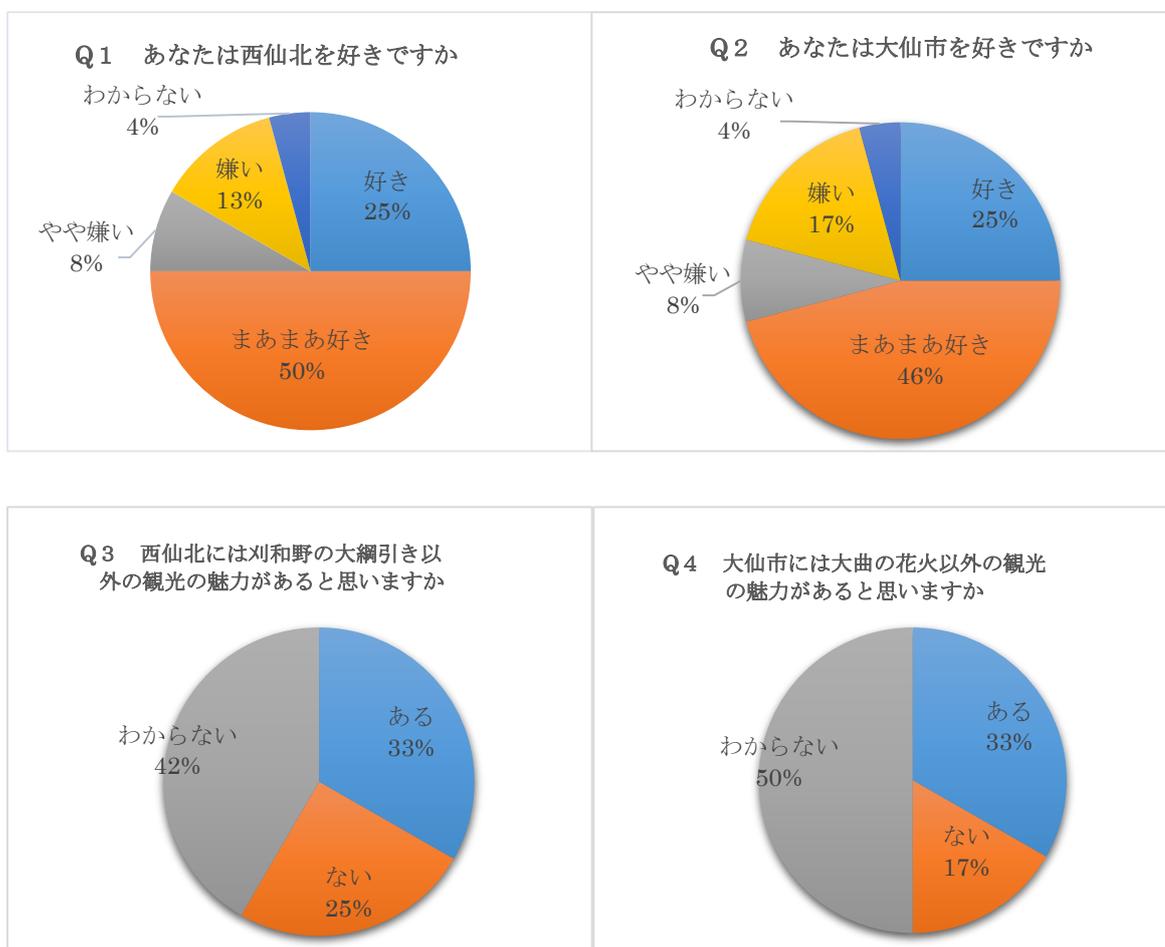
- ①大仙市の現状を大仙市観光交流課の方へインタビューをして調べる。
- ②中学生は大仙市のことをどう感じているのか私のクラスメイトにアンケートに協力してもらう。
- ③オーストラリアの方にインタビューをして、観光客を呼び込む工夫やその町の魅力を調べる。
- ④自分の行った場所で、観光客に向けてどのような工夫がされているのかを調べる。

3 調べた内容

① 大仙市の観光の現状（大仙市観光交流課）

- ・年間約250万人の人が大仙市を訪れている。
- ・大曲の花火が行われる8月の観光客が一番多い。
- ・一番の観光資源は大曲の花火。
- ・大仙市の特産物は、強首白菜、太田曲がりネギ、大曲納豆汁、大曲カレー旨麺、大仙市米っこバーガー、豆腐かまぼこ、豆腐カステラ、米、大豆、枝豆など。
- ・大仙市を売り出すポイントは、交通の要衝であること（東京から飛行機で1時間、大曲駅まで新幹線で3時間）や四季がはっきりしていること。

② 私のクラスメイトへのアンケート結果（2年A組24名）



- ・ Q3の「ある」と答えた人の具体例
自然、ばっこ杉、ユメリア、大佐沢公園、米、人のやさしさ、人のおもしろさ
- ・ Q4の「ある」と答えた人の具体例
自然、姫神山、米、納豆汁

◆アンケート結果から見てきたこと

- ・全体の約4分の3の人が自分の住む土地を「好き」または「まあまあ好き」と思っている。
- ・全体の半分以上の人が刈和野の大綱引き、大曲の花火以外の観光の魅力が「ない」「分からない」と思っている。
- ・西仙北や大仙市を「やや嫌い」または「嫌い」と答えた人は、西仙北と大仙市には観光の魅力が「ない」と答える場合が多い。
- ・大仙市の特産物を地域の魅力だと感じている人がほとんどいない。

- ③ マンガリーフォールズ自然体験学校で働く大屋泰斗さんにインタビューをして分かったこと
「土地の魅力を伝えるうえで大切なのは、その土地の情報を集めること。自分がその土地のことをよく理解していないと伝わらない。」と大屋さんはおっしゃっていました。

④ オーストラリアでの観光客に向けての工夫

私がホストファミリーに連れていってもらった所や、訪れた所には、さまざまな観光客向けの工夫がありました。

写真1のCheese factoryには、オーストラリアならではの小さな牧場が併設されていて、写真2のような動物と触れ合うことができました。

また、Cheese factoryでは、チーズだけでなくチョコレートを作る工程を見ることもできました。また、レストランもあり、Cheese factory一か所だけで楽しめる工夫がされていました。

写真3のNature Parkでは、カンガルーに餌をあげたり、珍しいヘビに触ったりしました。オーストラリアならではの体験ができました。

また、マンガリーのInformation centerでは、写真4のようにたくさんさんのパンフレットや、町の魅力を伝えるボードによって、その町をよく知ることができました。パンフレットがたくさんあると、さまざまな分野のことを知ることができます。同じようなInformation centerはキュランダにもありました。大仙市にはそのような施設がないので新しい発見でした。Information centerに行くだけで、その土地の特徴や魅力、おすすめのポイントを知ることができるので、観光客に向けてとてもよい工夫だと思いました。さらに、私たちの行ったアボリジニの文化を体験できる施設では、アボリジニの紹介だけでなく、小さな動物園やオーストラリアの自然をたくさん見ることのできるツアーがありました。そこには、写真5のようにいろいろな国の言語で書かれているパンフレットがあり、外国人観光客も楽しめる工夫がされていました。その施設でも、cheese factoryのように一か所でいろいろなことを体験できるので、さまざまな人に興味をもたせる工夫をしていると感じました。大仙市にもいろいろなことを盛り込んだ複合施設があれば、もっと観光客に喜んでもらえるのではないかと思います。



写真1 : Cheese factory



写真2 : Cheese factoryの牧場で見た動物



写真3 : Nature Park



写真4 : Information centerのパンフレット



写真5:いろいろな国の言語で書かれたパンフレット

4 考察

大仙市を訪れる観光客を増やすためには、まず私たちがこの土地の魅力をよく理解し、好きになることが大切だと思います。住んでいる人がその土地の魅力を知っていなければ自分の町を紹介することはできません。アンケート調査では、私たち中学生は大仙市の魅力をあまり理解していないということが分かったので、大仙市の「ハローパスポート」を利用したり、学校で地域の魅力を考えたり、これからの大仙市を担っていく私たちが市の魅力をよく理解して自分たちの市を大好きになることが、観光客を増やす第一歩になると思います。そのことで、「大仙市に住み続けたい」「大仙市の魅力を発信したい」と思う人が増え、大仙市の明るい未来へつながっていくと思います。

また、観光客を増やすために、大仙市にしかないものをどんどんアピールしていくとよいと思います。オーストラリアでは、その土地にしかないものを、その土地に住む人がよく理解していて、観光客が喜ぶ工夫をしていました。だから大仙市でも、もう一度私たちの「あたりまえ」を見直してみる必要があると思います。私たちが「当たり前」と思って見過ごしている桜や紅葉、雪景色や田園風景などは、海外や市外に住む人から見ると珍しいものかもしれません。また、大曲の花火以外でも、観光資源が豊富に見つかるかもしれません。そうやって、大仙市の魅力を発信する場をもっと増やしていくとよいと思います。大仙市には代表的な大きな施設はありませんが、小さくても楽しめる施設はたくさんあると思います。その施設を大仙市の観光資源としてもっとアピールしていくとよいと思います。旧地域の枠を超えて大仙市全体で協力し、インターネットを利用して大仙市の魅力をアピールしていけたら、もっと大仙市が発展していくと思います。また、大仙市ではたくさんの伝統行事が行われているので、大仙市内のいろいろな地域の魅力をPRし、観光客のリピーターを増やしていくのも一つの手だと考えました。

IV エピソード

1 ファームステイ

私は、Vossさんのお宅にお世話になりました。Vossさん夫妻は出会ったときに「Please call us Papa and Mama. We are family.」とおっしゃってくださり、ファームステイの初日からリラックスすることができました。二人ともとてもフレンドリーで明るい方たちでした。

Mamaは日本では味わうことのできないとてもおいしい料理を作ってくれました。また、毎晩一緒にゲームをしたのもとても良い思い出です。

Papaは私たちをいろいろなところに連れて行ってきて私たちを楽しませてくれました。

私たちが、日本の文化紹介としてお米を炊きみそ汁を作ると、PapaとMamaは喜んで食べてくれました。

このファームステイを通してコミュニケーションをとることの大切さを学びました。自分の思っていることを口に出さないと自分も相手も楽しくないと思い、怖がらず話しかけてみると、意外と話が通じてとても楽しくなりました。



Papa



Mama



Vossさんの家の前



ある日の夕食



Mamaと一緒に遊んだゲーム

2 オージーキッズとの交流

オージーキッズとは、一緒にご飯を食べたり、遊んだり、ダンスを踊ったりしました。私が一番心に残っているのは、オージーキッズと一緒にPPAPを踊ったことです。オージーキッズもPPAPを知っていて、とても楽しく踊ることができました。さすが世界のピコ太郎だなと思いました。



交流をしたオージーキッズ

3 海外で活躍している日本人へのインタビュー

Q. 生活で困ったことはなんですか。

A. 文化や考え方が違うこと。

Q. オーストラリアのよいところは何ですか。

A. 縦社会ではなく、横社会でフレンドリーなところ。

Q. 海外の人とコミュニケーションをとるコツは何ですか。

A. 笑ってごまかさないこと。どうにかして自分の考えを相手に伝えること。

Q. オーストラリア人は日本をどのように思っていますか。

A. アニメ、高い建物、デフレで食べ物が安い。

インタビューをしてみて、海外で活躍している日本人は楽しいことだけでなく、つらいことを乗り越えて生活していることが分かりました。例えば、言葉の壁や考え方の違いなどです。つらいことがあってもめげずに努力をし続けて今を楽しんでいると思いました。だから私も、つらいことがあってもあきらめずに努力し続けたいと思います。

V 海外研修を終えて

オーストラリアでは、日本には学ぶことのできないたくさんの方のことを学ぶことができました。特に、コミュニケーション能力の大切さを改めて感じました。どれだけ英語の教科書で勉強しても、伝えることができなければ勉強した成果を発揮することができないし、自分から動かなければ周り

の人も動いてはくれません。だから、一番大切なのはコミュニケーション能力だと思います。私は、今回オーストラリアで身に付けてきた力にプラスして、いろいろな人と話したり、積極的に発言したりして普段から自分のコミュニケーション能力を高めていきたいです。

オーストラリアへ行く前はとてもドキドキしていて不安もありましたが、行ってみるととても楽しくて、不安は吹き飛びました。オーストラリアへ行くことで確実に自分の考え方の幅も広がり、以前に比べて大きく成長できました。狭い日本に留まらず、もっと世界のいろいろな人と関わり、たくさんの人の考えを聞いてみたいと思いました。これからオーストラリアで学んだことを糧に、将来の夢を叶えるため努力をしていきたいと思っています。

今回は、たくさんの方々の支えがあってこの研修に参加することができました。とても感謝しています。ありがとうございました。



動物園で見たコアラ



キュランダ鉄道



マンガリーの滝



オーストラリアの先住民アボリジニ

オーストラリア研修レポート

No. 14 中仙中学校 明平風花

I はじめに

私は幼い頃から英語を学んでいて、外国の人と直接話してみたいとずっと思っていました。また、日本以外の地域での生活を体験することで、それまで気付かずにいた秋田の素晴らしさ、日本の素晴らしさを見付けたいと思い、今回の研修に参加しました。

II 研究テーマの設定

(1) 研究テーマ

「大仙市で継承されている伝統芸能の素晴らしさを次世代に伝えるためには？」

(2) 設定の理由

私の住んでいる中仙地域には、古くから伝わるドンパン節や円満造甚句などの踊りや民謡があります。そしてオーストラリアにも、アボリジニという先住民に伝わるダンスがあると聞きました。そこで大仙市で今問題になっている伝統芸能の継承者不足について考え、学び、少しでも改善につなげたいと思い、この研究テーマを設定しました。

III 研究の過程と考察

(1) 研究テーマについての予想

若い世代の人たちは伝統芸能に触れる機会が少ないと思います。そのため、小学校や中学校で体験活動を行ったり、地域のお祭りに参加したりして、たくさんの方が実際に伝統芸能に触れる機会を増やすことが重要だと考えました。

(2) 検証方法

自分が立てた予想を検証するために私は次の活動を行い比較することにしました。

- 大仙市に伝わる伝統芸能を調べる
- 現在大仙市で行われている継承のための取組を調べる
- アボリジニの文化は実際にどのようにして継承されているか調べる

(3) 検証結果

大仙市の文化財保護課の方とアボリジニの方に同じ質問をして答えていただきました。

①大仙市の現状

大仙市では重要無形民俗文化財、秋田県指定無形民俗文化財、大仙市指定無形民俗文化財の三つの無形文化財を合わせて18の伝統文化財があるそうです。しかし、これら三つの文化財に登録されていないお祭りや踊りもあるため、実際にはもっと多くの伝統芸能があるそうです。

②Q&A

Q1. 誰が誰に伝統的な踊りを継承しているのですか？

Who teaches whom traditional dances?

- A. 大 仙 市→保存会を作り活動しているが、若い人がいないため、保存会自体の高齢化が進んでいる。

アボリジニ→基本的には親から子へ受け継がれる。しかし、事情があり親から教わるできない場合は、一族の長や祖父、兄、などの自分より年上の人から教えてもらう。

Q2. 後継者になるために必要な資格はありますか？

What are the requirements to become the successors?

- A. 大 仙 市→資格が必要な伝統芸能もある。例を挙げると、唐松神社の蛇頭神楽がある。蛇頭神楽には神主しか使えない獅子頭があるため、誰でも演じることができるわけではない。

アボリジニ→基本的に生活の仕方を受け継いでいるため、必要な資格はない。しかし、男性が狩りやダンス、女性が木の実を採取するなどの役割分担がされている。

Q3. 具体的にどんな後継者育成の活動を行っていますか？

What are the methods of teaching?

- A. 大 仙 市→小学校へ出向き、体験活動を行う。

アボリジニ→親から子へ「口頭伝承」する。

Q4. 着る衣装に意味はありますか？

Do the design and colors of the costumes have any special meaning?

- A. 大 仙 市→衣装の色に東西南北や動物を表す意味が込められているものがある。また、神楽などでは小袖を着ることが多い。

アボリジニ→ボディペイントをする。それには意味があり、その人の名前を表している。ペイントの絵の具は白、黄、赤、黒がある。



アボリジニの文化をたくさん学びました！

(4) 考察

アボリジニの文化は大仙市に残る無形民俗文化財と違い、親から子へといった確実に伝承されるルートがありました。しかし、大仙市では伝統芸能を親から子へと継承していくのは難しいことだと思います。また、アボリジニの文化を観光客が体験できるような設備があり、例えばブーメランを投げたりすることもできました。このように大仙市でも伝統芸能の文化を紹介し、実際に体験できる機会を作って観光化することで、県内外の若い世代の人からも興味をもってもらえるのではないかと感じました。

IV エピソード

(1) ホームステイ先で…

私はホームステイ先のRossさんのお宅に滞在させていただきました。

ホストマザーのSueさん、ホストファザーのGlenさん、息子のDanielさん、みなさん優しく陽気で楽しい方たちでした。また、たくさんのペットと生活していて、とても大きいけれど穏やかで賢い犬のペッパー、ふわふわでモコモコの猫のルナの他、鳥やへびとも仲良くなりました。



賢いペッパー



ホストファミリーと



ふわふわなルナ

歩いて色々な場所に滝を見に連れて行ってもらったり、船に乗って湖にいる亀や鳥、植物など、オーストラリアの自然をたくさん見せてもらったりしました。

最終日の夜はホストファミリーと一緒に折り紙をしました。少し難しいようでしたが、みんなで楽しい時間を過ごしました。ホストファザーが紙風船をつくることができたのにはびっくりしました。

また、ホストマザーとは一緒にたくさん料理をしました。



ホストマザーと一緒に作った料理の品々

野菜の麺でパスタを作ったり、私達の顔より大きいラムを焼いたり、家では作ったことがない料理作りを体験させてもらいました。毎食とても美味しかったです。夕食の後に楽しんだジェンガゲームやホストファミリーとの会話は、最高の思い出になりました。親切にしてくれたホストファミリーに感謝を伝えたいです。



ホストファミリーに連れて行ってもらった
オーストラリアのスケールの大きな大自然

(2) 海外で活躍している日本人にインタビュー

ケアンズ市内で働いている日下部さんにインタビューしました。

Q. なぜオーストラリアで働こうと思ったのですか？

A. 前は日本で保育士をしていました。その時に趣味で行っていたダイビングをグレートバリアリーフでやりたいと思ったからです。

Q. この仕事(ダイビングのインストラクター)に就いてよかったことはありますか?

A. ダイビング関係の仕事は様々な国の人に出会えるため、色々な考え方ができる様になりました。

Q. 中学英語で日常会話はできますか?

A. できます!今の内にきちんと勉強しておくで将来が楽です。

Q. 英語の勉強方法を教えてください。

A. 一日に200個単語を覚える→そしてその単語を使って会話する、ということを繰り返して行いました。

<感想>

中学生のうちにしっかり勉強しておくで、将来の選択肢が増え、やりたいことが見付かり、充実した暮らしができるのだなと感じました。また、自分の趣味や好きなことを仕事にするためとはいえ、海外で働くことは簡単なことではないのだとも感じました。今回インタビューさせていただいて、今できることは今の内に頑張らないといけないと思いました。勉強や部活動を楽しみながら、もっともっと頑張っていきたいです。

V 研修を終えて

飛行機のトラブルにより予定が1日延びましたが、とても楽しく充実した研修になりました。たくさん知ること、見ること、感じる事ができ、毎日が新しい発見でいっぱいでした。

オーストラリアの人たちは、同じエレベーターに乗った人や道ですれ違った人など、知らない人でも気軽におしゃべりをしていたのが印象的で、とてもフレンドリーだと思いました。

また、今回の研修に参加させていただいたことで、改めて日本の素晴らしさにも気が付くことができました。時間どおりに物事が進んだり、お店の売り場の陳列がきれいだったりするところは日本人の几帳面さの表れだと感じました。

研修期間、自宅から離れた場所で、たくさんの方の優しさに触れ、心から人の温かさを感じることができました。帰りの飛行機の中で熱をあげてしまい、先生方、飛田さん、一緒に研修してきたみんなに迷惑をかけてしまいました。この研修でお世話になった方々にお礼を言いたいです。本当にありがとうございました。

オーストラリアレポート

No15 大山市立中仙中学校 熊谷 尊登

I はじめに

私が今回この研修に参加したいと思った理由は、海外の人々は日本をどう思っているのか、また自分の英語がネイティブの人たちにどのくらい通じるのかといった、実際に海外に行ってみないと分からないことを学び、見聞を広げたいと常々思っていたからです。そんな中、実際にオーストラリアに行くことのできるこの研修を知り、ぜひとも参加したいと思い応募しました。

II 研究テーマの設定と理由

研究テーマ

海外の人々にもっと日本の製品を買ってもらうにはどうすればよいか

テーマ設定の理由

最近日本の製品よりも他の国の製品のほうが人気があるというニュースを耳にして、なぜ他の国の製品のほうが人気があるのか、どうすればもっと日本製品が売れるのかという疑問を抱いていたからです。

III 研究テーマについて

1 予想

私は海外の人にもっと日本の製品を買ってもらうには、機能性を高くすればよいと考えました。理由は最近売れている、中国や韓国製の製品の強みは安さだからです。人件費などの問題から、日本の製品が価格競争に勝つというのは難しいと思います。私は日本の製品の弱点である価格を補うよりは、長所である機能性を高めたほうが売れるようになるのではないかと考えました。

2 検証方法

- ① 現地の電機店に日本の製品がどのくらいあるかを調査
- ② 大仙市教育総務課、ホストファミリーへのインタビュー

3 調査

(1) 調査対象

- ①TV (現地電機店)
- ②カメラ (現地電機店)
- ③パソコン (現地電機店)
- ④自動車 (インタビュー)

(2) 調査結果

①TV

- 日本のメーカー (ソニー パナソニック)
 - 価格 \$ 1498～\$ 2298
 - 台数 32台中5台
 - 機能 4Kなど画質が良い
- 海外のメーカー(サムソン、ソニック等)
 - 価格 \$ 559～\$ 2796
 - 機能 画質がよいものもあったが、機能性よりも安さを追求した製品



テレビ売り場

②カメラ

- 日本のメーカー (キャノン、ソニー)
 - 価格 \$ 528～\$ 1399
 - 台数 8台中6台
 - 機能 画質が良い
- 海外のメーカー
 - 価格 \$ 249～\$ 699
 - 台数 8台中2台
 - 機能 価格が安い



カメラ売り場

③パソコン

- 日本のメーカー
 - 台数 0台
- 海外のメーカー
 - 価格 \$ 448～\$ 3198
 - 台数 20台
 - 機能 価格を追求したものから容量が多いなどの機能性を重視したものもある



パソコン売り場

④自動車

※ホストファミリーへのインタビューを参照

4 インタビュー

- 大仙市教育総務課 (日本の製品について)
 - Q、日本の製品の良さとは?
 - A、サポート、機能性が良い。特にパソコンはサポートが強み
 - Q、日本の製品の短所は?
 - A、価格が高い
 - Q、日本はオーストラリアになにを輸出しているか?
 - A、1位は自動車

・ホストファミリー（なにを基準に購入するか）

Q、カメラはなにを基準にして買うか？

A、画質

Q、パソコンはなにを基準にして買うか？

A、価格

Q、テレビはなにを基準にして買うか？

A、価格

Q、車はなにを基準にして買うか？

A、速さと燃費

5 考察

調査した四つの日本製品の中で、売れているものはカメラと車、やや売れているものはテレビ、まったく売れていないものはパソコンという結果に分類できます。

売れている理由は、カメラについては画質、車については速さか燃費がよいというように、どちらも機能が求められているからだと考えられます。あまり売れていないテレビとパソコンは求められているものが安さなのに対して、日本製のものには価格が比較的高いためと考えられます。ホテルの各部屋にあるテレビが海外メーカーだったことから、日本製が浸透していないことがわかります。テレビは画質を求めて日本の製品を買う人もいますが、パソコンについては一番の武器であるサポートが海外では満足に受けられないため、価格は高いが機能は海外メーカーのものとは変わらないということになってしまいます。そのため一台も電機店になかったのだと考えられます。このことからもっと日本の製品を買ってもらうには、売れているカメラと車はさらに機能性を高めていくことが必要だと思います。テレビは画質を重視している人のためにさらに画質をよくするように技術開発に力を入れることと、価格を重視する人のために消費電力を少なくする省エネモードのついたテレビの開発、それによって日々の電気代が節約できるといった売り方をする必要があると思います。パソコンはサポート業務を今から急激によくすることは難しいと思うので、オーストラリアのパソコンユーザーに何が求められているかの調査と、その結果によっては他国の市場に力をいれることも必要ではないかと思いました。

IV エピソード

1 ファームステイでの出来事

私たちは一日目から三日目までファームステイをしました。そこでたくさんのことを学びました。

一日目はインフォメーションセンターに行って自然について学びました。ドライブしていると辺り一面が緑に覆われていて、山がどこまでも続いていくようで、とても気持ち良かったです。

二日目は色々なところにドライブに出かけました。最初にバーベキューをしました。自然の中でするバーベキューはとても開放感がありました。次に茶畑にいきました。ここでは茶葉を買ったり、お茶を飲んだりしました。香りも味も心にしみました。

三日目はケアンズのショッピングセンターに行きました。日本食を扱う店舗もあり、そこで

いなりずしを食べました。久しぶりの日本食で少し家を思い出しました。同時にオーストラリアでもおいしい日本食が食べられることに驚きました。

三日間のファームステイでは、日本とオーストラリアの文化の違いにたくさん触れることができました。一番驚いたことは、水に対する考え方です。日本では、「湯水のように〜」という言い回しがあるように、水は豊富なものという意識でいますが、オーストラリアはその反対で、水をととても大切に使っていました。シャワーは3分以内など様々なところに水を大切に使う工夫が見られました。他にもたくさんの文化の違いを肌で感じることができました。

2 海外で活躍している日本人へのインタビュー

六日目に海外で活躍されている日本人にインタビューをしました。インタビューしたのは、ダイビングの先生をしてらっしゃる日下部さん、日本旅行の黒田さん、ヒルトンホテルの児玉さんです。それぞれオーストラリアに行こうと思った理由は違いました。しかし三人とも現在華々しい活躍をされています。お話の中で心に残ったことが二つありました。

一つ目は「学校でしっかりと学ぶ」ということです。三人とも同じようなことをおっしゃっていました。これは「14歳の自分にアドバイスをするとしたらどんなことをアドバイスしますか」という質問に対しての答えです。三人とも「もっときちんと勉強しなさいということをおアドバイスする」とおっしゃっていました。今活躍されている方でも、もっと勉強しておけばよかったと後悔しているということが分かったので、もっと身を入れて勉強しようと思いました。

二つ目は「ビジョンをもって生活する」ということです。これは児玉さんがおっしゃっていました。自分は将来何になりたいかということを決め、そこから逆算して今何をしなければならないかを考えながら生活しなさいという意味でした。今後はそのように、ビジョンをもって生活していきたいと思いました。



インタビューに答えてくださった方々

V 研修を終えて

今回の研修では、日本には学べないとても大切なことをたくさん学んでおくことができました。その中で私の心に一番残っていることは、現地の人々の心の温かさです。私が困っていると、現地の人々はすぐに声をかけてくれました。目が合うと優しく笑ってくれました。店員の対応は日本の方が優れています。しかし、一般の人の心の温かさを考えると、オーストラリアの人々の方が温かいと感じました。両親に話すと、日本の田舎や東京の下町も昔はそうだったそうです。この心の温かさは、次の世代へつないでいかなければならない大切なことのひとつだと思います。

また、今回のテーマ「海外の人々にもっと日本製品を買ってもらうにはどうすればよいか」ということの解決策を考えたことも、自分では手応えを感じました。将来は、日本の製品を海外にどんどん輸出する仕事に就いてみたいです。

このようにたくさんの素晴らしいことを学べた有意義な研修でした。学んだことを今後の生活に生かしていきたいと思っています。

オーストラリアレポート

No16 大仙市立中仙中学校 齋 藤 咲

I はじめに

私は、今まで何回か外国の方とお話する機会がありました。決して上手には話せませんでしたが、言葉が伝わることに喜びを感じました。英語をもっと身近に感じてみたい、自分の英語力を試してみたいと思い、この研修に参加することにしました。

II 研究テーマ

『理想的な朝食とはどうあるべきか』

〈設定の理由〉

私は、朝のあたたかい味噌汁と卵焼きが好きです。朝食は小さい頃から毎日欠かさず食べていますが、一日の大切なエネルギーになることを小学校の家庭科で勉強しました。

また、中仙中学校では「弁当の日」があります。「弁当の日」は、自分でバランスを考えて献立を立て、買い物をして弁当を作り、自分で作った弁当を持っていく日のことです。そのおかげで食べるだけではなく作る人の立場で、理想的な食事について考えることが増えました。

今回の研修では、日本だけでなく海外の朝食を見た上で、よりよい朝食(食事)について考えたいと思いました。

III 調査活動

1 我が家の朝食についての調査

出発前の一週間、我が家の朝食について記録を撮り、わかったことがありました。

◇主食・主菜・副菜が揃うようにしている。

◇多彩な食材によって作られている。

食材は「地産地消」や「秋田県・国産」のものを意識して購入し使用している。

スーパーにも「地産地消」コーナーが設置されていて見やすく購入しやすい。

◇おつゆは「かつおだし」。

◇高校生の弁当に詰めやすいもの。



12月16日
豚肉ときのこの炒め物
とろろ
ほうれん草の玉子炒め
ごはん
味噌汁



12月19日
春菊の天ぷら
玉子焼き
ウインナー
おにぎり
味噌汁



12月24日
ポテトサラダ ナスの天ぷら
玉子焼き 豚肉ほうれん草炒め
ごはん 味噌汁



12月25日
野菜炒め 目玉焼き
れんこんきんぴら たらこ
ごはん 味噌汁



12月27日
さけ きんぴら 玉子焼き
ポテトサラダ ごはん
野菜いっぱい汁

2 研修で知りたいことの洗い出し

我が家の朝食を調べてみて、オーストラリアの食事で次のことを調べようと考えました。

- ①和食でいわれる「出汁」。オーストラリアでは何を使用しているのか？
- ②盛りつけの仕方には、どんな工夫がなされているのか？
- ③食材をどのように手に入れているのか？ など

3 オーストラリアでの食事についての調査

ステイ先では食事の前にみんなで手をつなぎ、ホストファザーのあいさつで食事が始まりました。

食事をして、次の点は日本と変わらないと思いました。

- 主食・主菜・副菜が揃っている。
- ヨーグルトの味は日本と変わらない。
- 必ず野菜料理が添えられている。

野菜は蒸したり煮たりして食べることが多い。生野菜はステイ中には配膳されなかった。

①和食でいわれる「出汁」。オーストラリアでは何を使用しているのか？

- 食事は、食材そのものを味わうものが多いと感じた。
- スープは野菜や肉の旨みがきいた『コンソメ』味が多かった。



【コンソメ味のスープ】

②盛りつけの仕方には、どんな工夫がなされているのか？

- ワンプレートに、主食と主菜、副菜を盛りつけているので後片付けが楽である。
- ボリューム感がある。
- フルーツは食後に別皿で出された。



【出された食事】

③食材をどのように手に入れているのか？

- 野菜で必要な物は、自家栽培している。
 - 鶏・牛など飼育していて、卵や牛乳は自足自給のようだ。
 - 買い物ではお菓子やジュースなどを買っていた。
- なお、スーパーで『地産地消のコーナー』は見つけることができなかった。

4 考察

日本の朝食もオーストラリアの朝食も、主食・主菜・副菜がそろっていました。また、我が家では、地産地消を意識して食材を購入していますが、ホームステイ先でも、自家栽培・自給自足の物を多く使って料理をしていました。私がステイしたお宅では鶏を飼っていて、その日の朝生まれたばかりのたまごを朝食で食べることができました。また汁物については、日本の味噌汁もオーストラリアのスープも、魚や肉、野菜の旨みが出ていておいしいと感じました。

和食はご飯に合うよう比較的塩分がきいた副菜が多いのですが、ホームステイ先の食事の味付けはシンプルで食材を生かしたものが多かったと感じました。

ステイ先の朝食の盛り付けはワンプレートでした。我が家ではご飯と味噌汁の他に三種類程度の小鉢や皿を盛り付けに使っています。ワンプレートだと後片付けが楽にできますが、様々な食器に盛り付けられていることで、それぞれの味が混ざらず、またより豊かな気持ちで食事ができると感じます。

日本とオーストラリアでは環境や文化が異なるので、両方の食事に共通して理想の朝食を考えるのは難しいのですが、地元でとれる新鮮な食材を使った料理と、肉や魚・野菜などの旨みがきいた汁物、そして主食と主菜、副菜のバランスがとれた朝食が理想的だと思います。また盛り付けについてはメニューや状況に応じて、ワンプレートにしたり、丼や皿、小鉢などを使って盛り付けるのがよいと感じました。

IV エピソード

1 ホストマザー Anneさんとのクッキーづくり



【一緒に作ったクッキー】

昼食後に、Anneさんが、クッキーのレシピを教えてくださいというので、ステイグループの友だちと四人でクッキーを作りました。今までのお菓子作りで使ったことのない色鮮やかなベリーもあって、焼き上がるのが楽しみでした。

オーブンはとても大きく、鉄板が一気に三枚入る大きさでした。Anneさんはこのクッキーをよく作るそうで、見ただけで焼き上がりを予測していました。

「お家でも作ってみてね！」と、レシピも教えてもらいました。

*** レシピ ****

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 1 1cup rolled oats | 1 1～4をまぜる |
| 2 1cup plain flour | 2 5を細かくして1に入れる |
| 3 1/2cup coconut | 3 6～9をなべに入れてあたためる |
| 4 3/4cup caster suger | あたたまったら混ぜる |
| 5 1/4cup choppednuts | 混ぜたら少し冷やす |
| 6 1/4cup sultanas or cranberries | 4 2でつくったものを真ん中をくぼませてそこに卵を流す |
| 7 1teas baking soda | そこに3でつくったものを流し、それから全体を混ぜる |
| 8 4teas golden syup | 5 クッキーの形に整える |
| 9 1/2cup oil | 6 オーブン180℃ 15分焼く |
| 10 1beaten egg | できあがり ☆☆☆ |

2 ホームステイでの思い出

ホームステイ先のホストファザーとホストマザーは、笑顔で私たちを迎えてくれました。そして、分からないことがあれば丁寧に説明し、家の広い畑を案内してくれました。

一緒に買い物に行ったときは、ホストファザーのWarrenさんがAnneさんに車のドアを開けてあげたり、荷物を持とうかと声をかけてあげたりし、その様子がマザーにとっては当たり前のようなだったので、海外の男性が思いやりの心を持ち、自然に紳士的に振る舞えることがとてもステキだと思いました。

ファザーのWarrenさんが湖へ連れて行ってくれたときは、車の荷台に乗って行きました。フ



【ファミリーとの思い出の一枚】

ァザーが「その席はエコノミークラスだよ。」と言ったのでみんなで笑いました。車の上で受ける風はとても気持ちよく、初めての経験ということもあり、私にとっては「ファーストクラス」でした。

ステイ先には、かわいらしい犬と猫がいました。二匹ともとてもフレンドリーで、私を明るく迎え入れてくれました。特に犬のジェンダはどこへ行くのも一緒でした。大自然の中を嬉しそうに走る姿がかわいらしく印象的でした。



【ステイ先の犬と猫】

3 海外で活躍している日本人へのインタビュー

私は三人の方とお話をしてきました。その中でも一番印象的だった「黒田さん」について紹介します。黒田さんは旅行会社に勤めている方でした。

Q：英語はどのようにして勉強したのですか？

A：趣味の映画鑑賞と釣りを通して勉強した。映画はハリウッド映画を、最初は英語の字幕で見る、慣れてきたら字幕を外して耳で聴くというようにして鑑賞した。映画の台詞と日本語訳との違いも興味深い。また、英語の釣りの本を読むことで釣り用語のボキャブラリーをふやし、釣り仲間との会話から学んだ。学んだ中に気に入った言葉があれば、ノートにすぐメモをすることになっている。

Q：海外の方との接し方で大切なことは何ですか？

A：恥ずかしがらないこと。日本人は知らないことが恥とってしまいがちだが、知らないことは積極的に相手に聞いて、最後に「ありがとう」と伝えることが大切。

Q：仕事をしていて嬉しいと感じるときはどんなときですか？

A：普段は異なる言葉を使う者どうしがお互いの意見をマッチングできたとき。英語は人と人がつながるための一つのツールだと思う。

【感想】

私たちの質問に対して、一つ一つ丁寧に答えてくださいました。

英語は『人と人とのつながりをひろげるためのツールの一つである』という言葉が印象的でした。また、海外で働き生活することの魅力がたくさん感じられ、英語を身に付けていることで、可能性が広がるのではないかと感じました。将来へつながるお話を聞くことができ、貴重な時間になりました。

V 海外研修を終えて

この研修を通してたくさんのお逢いがありました。

ステイ先のファミリーはとても優しく接してくれて、私たちが英語がわからなくて困っていると、ジェスチャーを使いわかりやすく伝えてくれました。そのおかげで不安を感じることもなく、とても楽しい四日間を過ごすことができました。

また、研修でお世話になったオーストラリアの方たちはみなさんとても親切にしてくれました。優しい人々にお逢いすることができ嬉しかったです。

自分の研究テーマである『理想的な朝食』については、『食べる』ことだけでなく、食材の生産から食卓に並べられるまでを考えるよい機会になりました。そして、日本の食事だけではなくオーストラリアの日常食を見たことで、これからの『食生活』をより深く考えるきっかけを得ることができたと思います。

私が感じたオーストラリアの良さを周りの人たちにたくさん伝えていきたいと思います。

貴重な体験ができたステキな時間でした。

ありがとうございました。



【みんなと見た滝】

AUSTRALIA REPORT

No. 17 協和中学校 秋山 凜音

I はじめに

海外研修への参加が決まった8月以降、私は「オーストラリア滞在中は何をするのだろうか、どのような環境なのだろうか」など、様々なことを考えていました。不安もありましたが、事前学習会や説明会に参加していくうちに、そんな気持ちは解消されて、期待が大きくふくらみました。

私にとっては、今回の研修で行くオーストラリアが初の海外旅行でした。そのため、パスポート取得や国際線の飛行機は初めての経験でした。オーストラリアは南半球にあって、飛行機で7時間30分もかかりました。予想以上の長旅でした。

私がこの研修への参加を希望した理由は三つありました。

一つ目は、日本と海外の様々な違いを、オーストラリア滞在を通して学びたいと思ったからです。実際に生活をしてみないと分からないことはたくさんあると思います。例えば、住居、食事、家族や人との関わり方、買い物などの生活の仕方の違いを、体験を通して学びたいと思いました。

二つ目は、以前English Campで学んだ経験にあります。そのとき、オーストラリアでは水不足が課題だと学びました。水不足に対してどのような対策をとっているのか、以前から気になっていました。シャワーに時間制限があるということは、事前学習会で学んでいましたが、他にはどのような対策や工夫をしているのか、それがどれくらい大変なことなのかを自分で体感したいと思いました。

三つ目は、自分の英語力が海外ではどれくらい通用するのか試したいと思ったからです。私は、小学一年生のときから英会話を習い始め、学校ではALTの先生と時々会話をしています。しかし、長文を自分の頭の中で組み立てそれを口にすることは、あまりありません。ALTの先生と会話をするときも、いつも簡単な単語を使って同じようなことばかりを話しがちです。そこで、今回のオーストラリア訪問では、今まで学んだ英語表現を使って、一つの話題について内容の濃い会話をしてみたいと思いました。

II 研究テーマ

1 研究テーマについて

私は「限りある水資源のために私たちができることは何か？」というテーマを設定しました。設定の理由は、オーストラリアでは水不足が課題となっていますが、その対策としてどのような節水の工夫をしているのか知りたいと思ったからです。私は普段、深く考えずに水を流しっぱなしにしたまま歯磨きをしたり、食器を洗ったりしています。オーストラリアの水不足の深刻さや、人々の取組、その取組に対する思いなどを、自分で見て、聞いて、体験したいと考えたからです。

もしかすると節水のために、トイレで水が流れなかったり、毎日はお風呂に入れなかったりするかもしれないと思っていました。

2 調査内容とわかったこと

私はこの研究テーマについて考えるために、実際にオーストラリアでの生活を体験し、ホストファミリーにもインタビューをしました。聞き取った内容と結果は次のとおりです。

- (1) シャワー → ・シャワーの水を流す時間は、一人一回3分まで。(毎日)
・実際に3分で体を洗うのは、時間が短くて大変だった。
- (2) トイレ → ・洗浄のときに使用する水量が少ないため、トイレットペーパーの使用量はできるだけ抑える。
・「トイレットペーパーの使用は最小限にしてください」や、「節水にご協力ください」などのポスターがあちこちにあった。
・水量が日本のトイレの半分くらいのため、ペーパーが流れるか心配になった。
・トイレットペーパーの切り込みが20cm間隔で節約して使った。
- (3) 台所 → ・水の無駄使いを可能な限り抑えるため、二つあるシンクを有効に使う。
・一つ目のシンクでお皿の汚れを落とし、二つ目のシンクで洗剤を流す。
・Bobさんが洗っているのを見て、洗うスピードが速いと思った。
- (4) タンク → ・オーストラリアでは、どの家庭にも生活用水を貯めておくためのタンクがあった。日本の灯油タンクの5倍くらいの大きさで、円柱に蓋がついていた。
・タンクからホースで家に水を引いており、浄化した後、生活用水として使う。
- (5) プール → ・プールがある家庭が多く、プールには雨水を貯めて使っている。家のプールは約25m、水深2m程の大きさで、思ったより水が透明だった。



右側のシンクで汚れを、左側で洗剤を落とす



日本とは違いバスタブが無いシャワールーム

3 考察

オーストラリアでは、家庭でも公共施設でも、どこに行っても節水を呼びかけるポスターがあり、国民の節水に対する意識がとても高いのだと思いました。日本では、水不足になることは滅多にありません。だから私は、日本にいるときはあまり深く考えずに、使いたいだけ水を使っていました。事前学習会で学んだように、オーストラリアには雨季と乾季があるため、雨季には家の横に置いてあるタンクに雨水を貯め、乾季に雨季に貯めておいた水を使用します。使うときはその雨水を浄化するそうです。ケアンズは、オーストラリアの中で最も湿度の高い都市といわれており、実際私が滞在していた時も、雨がたくさん降ってしまし

た。これまで私は、雨を資源として管理する発想はありませんでしたが、環境の違いからか、オーストラリアの人々の雨に対する考え方の違いに驚きました。将来にわたって水を使い続けることができるよう、日本でも必要以上の水を使わないように節水を心がけたいです。

Ⅲ オーストラリアで働く日本人へのインタビュー

私たちが2日間滞在したホテル「ダブルツリー・バイ・ヒルトン」で、ホテルマンとして働く児玉さんへインタビューしました。児玉さんは、バックヤードツアーで、キッチンなど普段は入れないホテルの裏側を案内してくれました。

Q. どうしてオーストラリアで働こうと思ったのですか？

A. ホテルマンとして働くために、英語を勉強したいと思ったから。

Q. オーストラリアで働いてみてよかったことは？

A. ホテルのお客様に、日本のことや文化について紹介するときに頼ってもらえること。

Q. オーストラリアで働いていて苦労したことは？

A. 日本と文化が違うため、相手にうまく考えが伝わらないこともあるということ。



スタッフ休憩室で説明をしている児玉さん

〈 感想 〉

児玉さんはとても優しい方で、どんな質問にも丁寧に答えてくださいました。私は児玉さんのお話を聞いて、日本にいてもオーストラリアにいても、働くことには、やりがいと大変さの両面があるのだと思いました。

児玉さんは、中学生のうちに「将来、自分は何になりたいのか」ということを、常に頭に入れておく（考えておく）ことが大切だと教えてくれました。

Ⅳ Home stay

私がお世話になったステイ先は、Russellさんの家族でした。パパのBobさん、ママのCarmelさん、ママの双子の弟のJohnさんの三人家族で、いずれも仕事を引退した方々でした。

ホームステイの初日は、とても緊張してしまい、ほとんど会話をすることはできませんでした。徐々にうち解けていろいろ話すことができるようになりました。例えば食事の量が多く、最初はおなかいっぱいになっても頑張って食べていましたが、メンバーで、「ご飯の量を減らしてもらえないか」という気持ちをCarmelさんに伝えると、快く「Okay」と言って、量を減らしてくれました。毎日の食後には必ずマンゴーが出ました。新鮮で甘くてとても大きなマンゴーでした。日本では滅多にマンゴーを食べることはないので、たくさん食べました。

一日目には牛のミルクを搾るための牛舎に連れて行ってもらいました。牛が100頭以上いて驚きました。夜にはホストファミリーと一緒にUNOをやりましたが、BobさんはUNOをやっている間ずっと「I'm a champion!」と陽気に叫び、とても盛り上がりました。

二日目は、ホストファミリー同士の仲がよいということで、別のステイ先に行った男子グループが遊びに来ました。みんなでバーベキューをしたり、卓球をしたりして遊びました。また、

ホストファミリーが車で滝を見に連れて行ってくれました。3階くらいの高さから水が落ちている滝で、迫力がありました。

三日目は、家で飼っている鶏や子牛を見に行きました。鶏は約30羽いました。「家で食べている卵はこの鶏たちのものだよ」と、Johnさんが教えてくれました。子牛は2匹いて、どちらもとても元気で、飼い犬と楽しそうに遊んでいました。昼食は、この日も男子グループと一緒に公園にピクニックに行きました。双方のホストマザーがサンドイッチやクッキー、ビスケットなどを用意してくれて、とても楽しい昼食となりました。その後、Carmelさんが色々なお店に連れて行ってきて、ショッピングを楽しみました。500mlのペットボトルの水が日本の2倍くらいの値段で売られていました。反対に様々な肉類は、日本の約半分の値段で売られていて驚きました。自動販売機はありましたが、水しか売っていないものがほとんどでした。帰る途中には、前日見た滝とはまた違う滝を見に行きました。雨が降ったせいか水量が多くて迫力がありました。夕食は日本から持っていった材料を使って、私たちが「お好み焼き」を作りました。ホストファミリーはみんな「Delicious」と言って食べてくれたので嬉しかったです。最後の夜には家族みんなで、またUNOをやりました。私も何度か勝利でき、思い出になりました。

四日目は、ホストファミリーとお別れの日でした。家族と別れるのはとても寂しかったです。Carmelさんが、「We will welcome your coming back.」と言ってくれました。私も「Thank you」と、気持ちを伝えることができました。「いつか絶対にまた来たい」と思いました。



My Host Family



私たちが作ったお好み焼き



床で熟成中のマンゴー

V 美しい自然

1 マンガリーフォールズ

マンガリーフォールズは、自然に囲まれている熱帯雨林国立公園の中にある施設です。四日目はそこで、オージーキッズの皆さんと一緒にアウトドアスポーツや、ダンスなどを楽しみました。オージーキッズはみんな積極的でやる気満々だったので、とても楽しい時間でした。お互いの趣味や学校の様子を紹介し合いました。中には、日本語を流暢に話せるオージーキッズもいました。

2 土ボタル鑑賞

夜には土ボタル鑑賞に行きました。土ボタルとは英語で「glow worm」（光る虫）と言い、暗闇で光を発する生きものです。なかなか見ることができない貴重な生きもので、人工的な光を当ててしまうと死んでしまうため、懐中電灯で照らすことも、フラッシュ撮影することも許されません。暗闇の中がかすかに光る土ボタルは、はかなく幻想的でした。

3 アーミーダックツアー

キュランダ村では、水陸両用車に乗って熱帯雨林の中を回るツアーを体験しました。途中、水の中も走ったので、とても面白かったです。走行中に上を見たら、見たことのない木々がうっそうと茂る景色が広がっていて、別世界にいるようでした。岩の上に人間の手のひら程の亀を見つけることもできました。

4 キュランダ高原列車

キュランダからケアンズまでを結ぶ観光列車です。列車に窓ガラスが無く景色がよく見えました。約2時間乗車する間に、次々と変化していく美しい景色を楽しむことができました。途中の停車駅で、列車から降りてバロン滝を見ることができました。滝壺に水が落ちて霧のように立ち上っている、迫力のある大きな滝でした。

5 フラン克蘭ド島

フラン克蘭ド島は、1日100人しか上陸できない無人島で、周囲がグレートバリアリーフに囲まれています。ここで、シュノーケリングをしたり、底が透明になっている船に乗って海の中を見たり、島を1周して散策したりしました。海中には、サンゴ礁や見たことのないカラフルな魚が泳いでいて、とてもきれいな光景にうっとりしました。私が海水浴に行く日本の海とは違い水が澄んでいて、魚もよく見えました。



フラン克蘭ド島の海岸



熱帯雨林の景色



迫力のあるバロン滝

VI 研修を終えて

私はこの研修を通じて、日本とオーストラリアの様々な生活習慣の違いと、水不足に対してのオーストラリアの節水方法を知りました。一方で、自分の英語力を試すこともできました。

言葉だけでなく、生活スタイルの違いが数多くあり、初めは戸惑いました。住居・食事・家族や人との関わり方・買い物、自然、動物など、知らなかったことに触れたり、見たことのない光景もたくさん見たり、体験したりすることができました。オーストラリアでの生活に慣れてくるとその違いを楽しむ余裕も出てきました。

今回の研修で日本とオーストラリアの違いをたくさん学ぶことができたので、これからは自分の視野をもっと広げて、世界の状況を自ら進んで考えられるようになりたいと強く思いました。この世界にはたくさんの方がいてそれぞれ違いがあります。その違いを尊重しあい認め合える世界になることを願います。I learned many important things for me while I was in Australia. For example, people, nature, language ...etc. I will not forget this homestay experience. And also I want to tell my friends what I saw and how I felt about it.

Australia Report

No. 18 仙北中学校 2年 伊藤 春野

I はじめに

私が今回この研修に参加した理由は、小さいころから海外のコメディードラマなどを見ていて、日本とは違う文化にとっても憧れがあったからです。そんな小さいころの経験があったからか、私の将来の夢は自然と海外と関われる仕事に就くこと、になっていました。中学生が海外に行ける機会はなかなかないし、将来絶対に自分のためなると思い応募しました。最初はとても不安でしたが、研修を終えてみると、あの時勇気を出して応募してよかったと心から思える素敵な経験になりました。

II 研究テーマ

「海外でも活躍することができる日本人になるためには？」

(テーマ設定の理由)

私は日本と海外の伝統的衣装について調べる予定でしたが、現地で会った日本人のみなさんにとっても衝撃を受け、急ぎで研究テーマを変更しました。将来、海外で働きたいという希望をもっている私にとって、海外で働く日本人について関心や質問したいことがあったし、その方々から学んだことを自分の友達に伝えることができれば、この研修に参加した意味がさらに深まるのではないかと思います、このテーマを設定しました。

III 調べた内容

1 Mungalli Fallsのマネージャー 大屋泰斗さん

最初に会ったときから、とても話やすく、本当に面白い方で、すぐに惹きつけられました。

泰斗さんから学んだことを紹介します。



Mungalli Fallsの看板

○ なぜオーストラリアに来たのか

高校2年生のとき、吹奏楽の世界大会でハワイに行く機会があり、そこでソロ演奏をしたら、観客は心の底から喜んで拍手をしてくれた。立ち上がってハイタッチしに来てくれる人もいた。その時に日本との違いに感激し、自分は将来は海外で生活したい、と強く思ったから。

○ 日本とオーストラリアの違い

日本はリーダーシップをとることを遠慮したり、自分の殻を破ってパフォーマンスすることを恥ずかしがったりする人が多い。自分らしくいる人程、浮いてしまい、周りの人に合わせてしまう傾向がある。それに対してオーストラリアはみんなオープンで、堂々と自分を主張する人が多い。いろいろな人種の人が出て、それぞれの個性を尊重しているところがとても魅力的な国。また、日本人はとても勤勉だと感じる。

○ どうやって英語を勉強したか

大学を卒業してオーストラリアに来た後さらに3年間学校に通った。8か月間9時から3時まで勉強をした。勉強方法でずっと続けてきたことは、

- ①ディズニー映画などを最初は字幕なしで観て、2回目は字幕付きで観ること。
- ②分からない単語を書いて意味を調べること。
- ③何度もスペルを練習すること。

④映画の声優さんの真似をして発音すること。

映画はチャプターで区切って観ていくと1回当たりの時間が短いので継続して取り組んでいくことができる。

○ オーストラリアに来てよかったこと、辛かったこと

よかったことは自分らしく生きられていること。人を楽しませる今の仕事にも満足しているし、周りに流されるような人生を送らなくてもよい。また、日本の満員電車に乗らなくてよいこと。辛かったことは、ホームシックになったこと、英語が伝わらなかったこと。彼女を日本においてきていたので、自分はなぜここにいるのだろうと自問自答の日々が約1か月間続いた。

泰斗さんはもともと大工になるつもりだったそうです。中学生時代はぐれていて、高校に進学するときに先生から、「世界大会を控えた柏高校の吹奏楽、マーチングを見て来い」と言われ、しぶしぶ行ったところ、その演奏に深く感動してその高校に入りたいと強く思ったということでした。志望校を決めてからは猛勉強をし、偏差値を38から50まで上げたそうです。そして見事合格し、高校は主席での卒業。ダンスも上手でアクロバットなどもできる泰斗さんは、陰でたくさんの努力を積み重ねてきている人でした。だからこそみんなから慕われ、リーダー的存在として輝いているのだと思います。オールマイティーに活躍する泰斗さんに、私は大きな衝撃を受けました。



泰斗さんと娘のららちゃん

2 18歳からこの国へ 宇井亮太さん

亮太さんは五日目のマンガリーでお世話になった方です。現在24歳で、若いのに英語が堪能なことに驚きました。

亮太さんにお聞きしたことを紹介します。

○ オーストラリアに来たきっかけは何か

大学に進学したとしても、将来の就職活動の時に大変そうだったし、地元が千葉で東京や空港が近く、英語を話せることが将来の即戦力になるのではないかと思い、語学留学を選択した。候補地はアメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア。アメリカは治安が悪そうだったし、カナダは当時経費が高かった。ニュージーランドには既に知り合いが行っていたのでオーストラリアに決めた。

○ オーストラリアに来てよかったこと、辛かったこと

よかったことは、今までの価値観や世界観などが変わり、もっとたくさんのことを知りたいと思うのと同時に日本の素晴らしさに気付けたこと。また、人見知りの克服や自分の意見、意思をもてるようになったこと、いろいろな国の友達ができただこと！

辛かったことは、まず第一に言葉の壁。英語が赤点の自分が勉強もせずに来たため、ホストファミリーやクラスの友達と全く話せなかった。また、ちょっとした言い争いになったときに負けること。

○ どうやって英語を勉強したか

本当にゼロからのスタートだったので、少し変わった勉強方法だった。

その1、平日は8時から3時まで語学学校に通う。放課後は夕食まで友達と遊ぶか仮眠。夕食後はホス

トファミリーと会話をし、部屋に引き上げてからはインターネット利用し、文法を日本語で調べたり、宿題をしたり、英語で日記を書いたり、授業中分からなかったところを調べたりした。そうしていると大体3時頃になるので寝て、朝になったらまた学校。そのような生活を約4か月続けた。土日はこもって勉強した。

その2、クラスの友達とも打ち解け、頻繁に遊びに出かけるようになった。お酒の力もあって見知らぬ人とも話してみたがさっぱり理解してもらえず、相手が話している内容も分からない。それが嫌でSpeaking、Listeningを徹底的に勉強した。

その3、英語圏の人の話し方や怒り方、意見の言い方、発音などをマスターしようとした。

その4、日本語禁止！アルバイトも日本人が1人もいないところを選んで、常に英語を使う環境に身を置いた。

○ 自分が生きていくうえで、大切にしていること

常に夢を大きくもち、そこに向かって諦めないこと。支えてくれる家族や友達、周りの方に常に感謝の気持ちを忘れないこと。

○ 私たち若い世代が、夢を叶えるために頑張るべきことは何か

夢は大きく！子どもの夢は変わりやすいけれど、いつか本気で叶えたい夢をみつけたときに、そこに向かって出来ることから努力すること。あとは素直になること、受け入れること、聞く耳をもつこと、許すこと。これをしていけば自分の周りに味方、サポートがたくさんできて夢も叶い易くなる！

亮太さんはフレンドリーで、常に誰かと話しているような人です。英語が完璧なうえに、面倒見がよいので、オーギーキッズからも、派遣生からも大人気でした。人見知りだったということも、今の姿からは想像が付きません。将来の夢はお金持ちの社長、だそうです。本当に面白い方で、土ボタル鑑賞のときはみんなを驚かせて楽しんでいました。一緒に過ごすほど、今までたくさんの努力をし、壁を乗り越えてきたのだということも伝わってきました。自分の意思をはっきりと示し、私にはないものをたくさんもっていたので、とても憧れをもちました。日本に帰ってきてからもメールでお話することができ、経験を生かしたアドバイスをしてくださいました。

3 まとめ

この二人の他にも、たくさんの日本人がオーストラリアに住んでいました。異国で頑張っている人たちに共通してみられたのは、「自分の意思をしっかりもっていること」「努力を怠らないこと」の二つです。

自分の考えをもち、それを周りに発信し、分かってもらうまで諦めない心の強さがありました。これは、言語が違う国で生活したからこそ身に付いた力だと思います。そんな皆さんはとても素敵で、輝いていました。また、出逢った日本の方々も、みんな誰に対しても親切でした。人を傷つけるような言葉は一切使いません。たくさんの苦難を乗り越えてきたから、その分、人に優しくできるのだなと感じました。また、「笑顔」も大切なものの一つだと思います。笑顔で話すと、相手は心を開き、通じ合える近道にもなります。

このように、海外で働く日本人は、尊敬できる人たちばかりで、インタビューを通して、夢を叶えるには努力以外の近道はないと、改めて感じさせられました。この出会いで私自身の世界観が変わり、今までの自分はとても小さかったことに気がきました。これからは、今回のこの貴重な学びを生かし、甘い考えは捨て、何事も頑張っていきたいと思います。そして、今回学んだこと、現地の日本人のたくましさを、周りの人にも伝え、この経験を無駄にしないようにしていきたいです。



笑顔は大切！！

IV エピソード

1 ファームステイの生活

～家族紹介～

ホストファザー・・・Glen（気さくで温かい人でした。）
ホストマザー・・・Sue（料理上手でとても優しい人でした。）
長女20歳・・・Krystal（別のお家に住んでいましたが、会うことができました。）
長男18歳・・・Daniel（明るく思いやりのある人でした。）

～ファームステイ先～

私がお世話になった家は、かなり山奥にある、プール付きの赤色の可愛い家でした。犬のペッパー、猫のルナ、へび、鳥、などたくさんペットがいます。ペッパーとルナはとても人なつこいペットでした。毎晩ジェンガをしたりたくさん会話したりして、家族と仲よくなりました。

～おいしい食事～

Sueは、マンガリーのレストランのシェフをしています。だから、Sueが作る料理はとてもおいしかったです。食事の準備の手伝いは本当に楽しく、深く思い出に残っています。二日目の朝は、大量のパンケーキを焼きました。日本食とは全く異なる料理ばかりでしたが、とてもおいしくて、たくさんお替わりをしました。特においしかったのは、ピクニックで食べたホットドッグと、夕食のステーキ&スイートポテトです。



一緒に作ったごはんデザート

～連れて行ってもらったところ～

Millaa Millaaの滝、ピクニック、shopping、湖など、いろいろなところに連れて行ってもらいました。全てが初めてだったので、どこもとても楽しかったです。三日目に行った牧場では、レインボーのソフトクリームを食べました。色がとてもカラフルだったのが印象的で、海外ならではの思い出です。



レインボーアイス



記念撮影

～感想～

初日は初めての環境に慣れず、ホームシック状態になりました。ですが、最後日には帰りたくない、もっと一緒にいたいという気持ちがとても大きくなっていて、さよならするときは、涙が出るほど、Ross家のみなさんのことが大好きになっていました。紹介しきれないほどたくさん思い出ができ、日本に帰った今でもよく思い出します。私のことを家族の一員のように扱ってくれたRoss家のみなさんに、また絶対会いに行きたいです。

2 マンガリーでの1日

わたしがこの研修で一番心に残ったのが、マンガリーフォールズで過ごした一日です。ファームステイ先から帰ってきて、みんなの顔を見てほっとして間もなく、チーズケーキクッキングにとりかかりました。クッキングが終わる頃に、いよいよオージーキッズが到着。英語で話さなければ・・・と、友達と必死になっていましたが、実はオージーキッズの半数程度は、英語と日本語を両方話せる子でした。自分より年下なのに、二か国語を流暢に使って話しているオージーキッズにとっても驚き、自分の語学力はまだままだと思えました。

～交流～

障害物レースや、チームラフトビルドなどをして、たくさん体を動かしました。自由時間には、Flying fox という池の上に張ったロープに付いた滑車にぶら下がり、滑り落ちるアクティビティを何度もやりました。雷と雨でみんな早々に帰っていましたが、友だちと二人で最後まで残って遊びました。

～ダンス、土ボタル～

研修で一番楽しかったのが、このダンスの時間です。泰斗さんのリードで、最高の時間になりました。派遣生全員でPPAPを披露したら、オージーキッズもものってきてくれて、最終的に一緒に踊りました。円になって音楽に合わせて、できる人から円の中心に行きパフォーマンスしていく活動も盛り上がりました。アクロバットをしたり、バレエをしたり、ランニングマンをしたりと、日本ではあまり経験できない楽しさに、とても感動しました。

土ボタルは、私たちが想像するようなホテルではなく、英語で表現すると、光るミミズと言います。暗闇に光が映え、日本では見られない、とても幻想的な光景でした。



オージーキッズとダンス

3 オーストラリアの街

～Shopping～

さすが外国と思わせるような景色の街でたくさん買い物をする事ができ、楽しかったです。ジェラートやアイスチョコレート、ミートパイなど、おいしい食べ物も食べました。オーストラリアの店や商品はとても素敵でした。



アイスチョコレート

～グレートバリアリーフ～

船酔いは辛かったです、それを忘れるくらいの絶景でした。海の水は透き通っていて、日本海にしか行ったことのない私には温かく感じられました。初めてのシュノーケリングでは、きれいな魚を見ることができ、感動しました。豊かな自然に触れ、忘れられない思い出になりました。



グレートバリアリーフで

4 海外で働く日本人にインタビュー

～黒田さん～

Q1 コミュニケーションの違いはどこか

A1 日本は無表情であり主張しない AUSはジェスチャーが多い

Q2 AUSTRALIAの良いところ、困ったところはどこか

A2 良いところは、横社会を大事にする、親しい中にも礼儀がある、初めて会った人でも挨拶するところ
困ったところは、日本の常識が海外の非常識だったり、その逆だったりするところ

～児玉さん～

Q1 AUSTRALIAに来たきっかけは何か

A1 ディズニーリゾートでアルバイトをしているうちに、ディズニーリゾートホテルで働きたいという思いが募り試験を受けたが不合格になった。自分には英語を勉強する必要があると思い、オーストラリアへ来た。

Q2 不安はなかったか

A2 飛行機に乗った瞬間に、不安と「どこへ行くのだ」という心の葛藤が始まった。だがその辛さを乗り越えたということが今の自分を強くし、自信をもたせてくれている。

ホテルの接客業をしているので、おもてなしする側としてきれいな英語を使うよう心掛けている。



児玉さんが働くホテルのディナー

～日下部さん～

Q1 海外の人と関わる時に大切にしていることは何か

A1 受け入れること、うまくやっていくために工夫すること、拒絶しないこと。あとは自分の意見を伝えるときは引き下がらないこと。

Q2 仕事のやりがいとはどんなことか

A2 たくさんの人と出会えていること、人に喜ばれること。

自分の強い意志を私たちに伝えてくれた姿はとても格好よかったです！

V 研修を終えて

この研修は私に、素敵な出逢いと共に、別れの辛さを教えてくれました。少しの間家族になれた、ホストファミリーをはじめ、とても仲良くなり、憧れを抱いたマンガリーのスタッフ、自分の仕事に誇りをもち、輝いていた海外で働く日本人の方々。派遣生のみならず、最初の頃からは想像がつかない程、仲良くなる事が出来ました。あの時、勇気を出して応募していなければ、こんなにたくさんの人と出逢えませんでした。出逢いに別れはつきものなので、悲しくもなりましたが、この出逢いは、私の人生の可能性を大きく広げてくれた、かけがえのないものです。オーストラリアで出会った人とは、また会えること信じて、また会ったときに成長した自分を見せられるように、たくさんの努力を積み重ねていきたいと思います。研修を共にした19人からは、とてもよい刺激を受けたので、みんなに負けないように私もがんばります。研究テーマについて調べて学んだことや、この貴重な経験で分かったこと、変わったことを生かして、将来の夢の実現に向かって今できることから始め、一步一步確実に近づいていきたいと思います。そして、今回研修したことを一人でも多くの人に伝えて、私がオーストラリアに行った意味をしっかりとるようにしたいです。



一日延びた日の昼食で

Thanks to those people around me, I was able to gain such valuable experience. Not everyone is able to have such nice experience, so I would like to thank those who helped creating such beautiful memories for me in this trip. Through this experience I have grown as a person, and I would like to fulfill my dreams by all means!

Australia Report

No. 19 仙北中学校 2年 田村 香帆

I はじめに

私が今回この中学校生徒海外派遣オーストラリア研修に参加しようと思ったきっかけは、二つあります。一つ目は、自分の今持っている英語力を海外で確かめてみたかったからです。私は小さい頃から英語に触れてきました。しかし、今まで培ってきた英語力を試す機会があまりなく、物足りないような気がしていました。だから、この研修で生きた英語に触れ、自分の英語力を試しつつ、レベルアップを図りたいと思いました。二つ目は、日本とオーストラリアの文化の違いに触れ、オーストラリアや日本のよさを感じて、もっと視野を広げたり、自分の考えを変えたりしたいと思ったからです。

II 研究テーマ/設定の理由

「次世代に郷土料理を伝えていくためにはどのようなことをすべきか？」

このテーマを設定した理由は、私自身、大仙市（秋田県）の郷土料理と言われてもすぐに思い浮かばなかったからです。どのようにしたら大仙市の人に郷土料理について興味をもってもらえるのか、郷土料理の認知度を上げるにはどうしたらよいか、そして今後次世代に郷土料理を伝えていくためにはどうしたらよいかを考えたかったからです。オーストラリアの郷土料理や食文化にも興味があったのでこのテーマを設定しました。

III 研究内容/考察

大仙市の郷土料理については、オーストラリアへ出発する前に、大仙市役所の農業振興課の方へお話を伺いました。

また、オーストラリアの郷土料理については、ステイ先のホストファミリーと滞在先のマンガリーフフォールズのスタッフの皆さんにインタビューをしました。

1 大仙市の郷土料理について

◇郷土料理(伝統料理)とは？

各地域の産物を活用して、風土にあった食べ物として伝えられ食べられてきた料理で、次のような特徴をもっています。

- 旬の食材を使う、安全栄養価が高い。
- 地域への関心を高め愛着がもてる。
- 昔の人の知恵・工夫がある。
- 季節にあった伝統料理がある。
- 失われていく食材の見直しや地域の食文化や産物に触れる機会となる。

大仙市の代表的な郷土料理は納豆汁です。また、亀の助ネギ、石橋ごぼう、仙北丸ナス、横沢曲がりねぎという伝統野菜があります。

2 大仙市ではどのようにして郷土料理が伝えられているか

地域農産物を活用した料理講習会を行っています。地域の各種団体やグループ、公募などによる地域伝承料理会などを開催し、地産地消の推進と拡大を同時に図っています。

3 オーストラリアの郷土料理について

オーストラリアにも日本同様に郷土料理があります。郷土料理には、主に牛肉と新鮮な野菜が使われています。牛は日本とは違い、牧草飼育とあって、豊かな自然の中で育てられています。移民がたくさんいるため、オーストラリアの郷土料理には、様々な国の料理があります。

4 オーストラリアではどのようにして郷土料理が伝えられているか

オーストラリアでは、郷土料理は日常的に食べられ、親しまれていることで、自然に親から子へ伝えられています。

5 その他

日本の食事は、3～4品の料理が並ぶことが多いですが、オーストラリアでは、基本1品料理(1プレート)です。1プレートにする理由としては、洗い物を少なくし、皿を洗うときに水をなるべく使わないようにするためです。水の資源が限られているオーストラリアではこのような工夫がされています。食文化と環境との関わりを知ることでもできました。



1枚の皿に盛りつけられる

6 考察

今回、大仙市とオーストラリアの食文化を比較して、私たちが次世代に郷土料理を伝えていくためには、次のようなことをしていくべきだと考えました。

(1) 郷土料理に興味をもってもらうために

・料理教室を開催する

これまでと同様に料理教室を開催するとよいと思います。少しでも郷土料理や伝承野菜の活用法などに興味をもってもらいたいです。

(2) 郷土料理の認知度を上げるために

・給食として郷土料理を出す

小・中学生の給食に郷土料理を出すと認知度が高まると考えました。これは既に実施されていますが、意識して食べているようには感じられません。だから、その郷土料理の情報(発祥地、使われている食材など)をもっとアピールするとよいと思います。

(3) 次世代に郷土料理を伝えていくために

・家庭内での伝承

郷土料理を知っている身近な存在が、祖母や母ではないでしょうか。そこで、家庭内での伝承をしていくべきだと考えました。祖母から母へ、母から子へと継承していけばよいと思います。

今回、「次世代に郷土料理を伝えていくためにはどのようなことをすべきか？」というテーマで研究したことは、郷土料理についてより詳しく知ったり、自分から考えたりするよいきっかけになりました。郷土料理の認知度が今後高まっていくように、自分ができることはないか考えていきたいと思います。

IV エピソード

1 スーパーマーケット

ホームステイ三日目にスーパーマーケットにショッピングに行きました。一番驚いたのは、売られている商品の大きさです。日本に比べて、商品の一つ一つが大きいです。日本との食生活の違いに気付かされました。



売られているクッキー

2 キュランダ鉄道

オーストラリア七日目にキュランダ鉄道に乗りました。キュランダ駅から一時間ほど経つと、見どころポイントの「ホースシューベント」を通過します。ここは『世界の車窓から』のオープニングで10年間使われていた場所です。車窓からの眺めは最高でした！



ホースシューベント

3 ホームステイ

私たちのグループは、Russellさんの家にステイしました。家族は、ホストファザーのBobさん、ホストマザーのCarmelさん、ホストマザーの双子の兄弟のJohnさんです。一日目は、昼食を摂った後、牧場に連れて行ってもらいました。そこには、たくさんの牛がいました。Johnさんに手を出してと言われ、手を出すと、牛の口に手を入れられ、舐められてしまいました…。動物とのふれ合い方の違いに驚きました。二日目は、男子のグループと合流しました。Millaa Millaa Fallsを見た後、家に戻ってきてBBQをしました。三日目も男子のグループと合流をして、ピクニックの後、ショッピングに行きました。この日の夕食は、私たちがお好み焼きを作りました。欲しい材料をホストマザーに伝え、作りました。オーストラリアには、ふつうの小麦粉とベーキングパウダー入りの小麦粉の2種類があることがわかりました。食べてもらおうと、「delicious!」と言ってくれて嬉しかったです。四日目、ついにお別れ。ホームステイはあっという間に終わりました。毎晩食事後は、BobさんとみんなでUNOをしました。コミュニケーションをとるよい機会にもなりました。また、ホストマザーの作ってくれる料理はとても美味しかったです。それから、水が貴重なため、シャワー時間は3分と決められたことも忘れられません。初日は慣れずに大変でしたが、水を大切に考える考えには賛同できました。ホストファミリーとお別れするのは辛かったです。充実して思い出に残るホームステイでした。



牧場の様子



作ったお好み焼き



みんなで最後に記念撮影

4 海外で活躍する日本人

私たちがインタビューをさせていただいたのは黒田さん、日下部さん、児玉さんの3人です。

黒田さん：日本旅行のケアンズ支店長。

日下部さん：ダイバーの仕事をしてながら、レストランでも働いている。

児玉さん：ダブルツリー・バイ・ヒルトンで働いている。

【質問】

Q: オーストラリアに移住しようと思ったきっかけは何ですか？

A: 黒田さん 高校2年生の時に修学旅行でアメリカを訪れた際に、日本人が英語をペラペラ話しているのを見て憧れたから。

日下部さん もともと海外に興味があり、プールのある家に住みたかったから。

児玉さん ホテル業に就きたいと思ったが、履歴書の英語資格の欄(英検などの取得)に何も書けなくて、英語を勉強しようと思ったから。

Q: 日本とオーストラリアの違いで驚いたことは何ですか？

A: 黒田さん 文化の違い(食文化、言葉など)

日下部さん 日本とオーストラリアはあまり変わらないと思う。

児玉さん たくさんあるが、家族の優先順位が高いこと。子供のために簡単に休みを取れる。

Q: オーストラリアに来て困ったことはありますか？

A: 黒田さん 仕事上、日本とオーストラリアの間に入って話をしなければならない。文化の違いで考えが合わないときには、一つ一つ説明しなければならないこと。

日下部さん ヨーロッパ出身者の英語がよく分からなかったこと。レストランで働いていたが、シェフがヨーロッパ出身で、話していることが聞き取れなかった。自分の解釈が、シェフが言いたかったことと違って大変だった。

児玉さん 言葉が通じないこと。いちいち説明しなければならないこと。例えば、なぜこの人が怒っているのかその理由を一つ一つ伝えなければならない。

Q: 外国人と接するとき大切なことは何ですか？

A: 黒田さん 笑ってごまかさないこと。わからなかったことはもう一度聞くと、外国人は丁寧に教えてくれる。また、自分の意見をしっかりと言うこと。

日下部さん 勇気をもつこと。通じなくても頑張ること。

児玉さん 笑いをとって会話を弾ませること。そのためのネタを作ること。

【感想】

今回3人の皆さんにインタビューして学んだことがたくさんありました。その中でも、海外で活躍するには、人一倍の努力が必要だということを強く感じました。たくさん量の単語を一日で覚えたり、睡眠時間を削って英語を勉強したりと、皆さんがしてきた努力について聞くことができました。とても刺激になりました。努力は必ず実を結ぶことを改めて感じることができました。

V 海外研修を終えて

この研修に参加して貴重な体験をたくさんすることができました。海外に行ったことで視野が広がり、自分の考えや将来を考え直すよいきっかけになりました。今回体験したことはすべて、自分の成長につながることばかりでした。

生きた英語に触れ、自分の英語力を試しつつ、レベルアップを図るという目的を果たすこともできましたと思います。私の力はまだまだですが、自分が今もっている力を発揮することはできました。これからはもっと英語に触れる時間を増やし、より力を伸ばしていきたいと思いました。そして、伝わらなくてもジェスチャーをつけて諦めずに伝えようとすることもできました。今までは恥ずかしがったり、諦めたりしていましたが、頑張っって伝わった時の達成感を感じることができ、嬉しかったです。また、もう一つの目的であった、オーストラリアと日本の文化の違いに触れ、オーストラリアや日本のよさも感じることもできました。

この研修に参加できたのは、たくさんの人の支えがあったからだと思います。このような機会を与えてくださった大仙市教育委員会の皆様、引率してくださった高橋先生、牛木先生、飛田さん本当にありがとうございました。最後に、参加を後押ししてくれた両親にも感謝の気持ちを伝えます。



グレートバリアリーフ



Millaa Millaa Falls

オーストラリアレポート

No.20 太田中学校 藤澤希築

1 はじめに

私がこのオーストラリア研修に参加しようと思った理由は二つあります。一つは英語が好きで、外国の生活に興味があったからです。小学校3年生から習っていた英語を、日本を離れて試すよい機会だと思いました。もう一つは、小学校低学年の頃、この研修に参加した従兄弟から、実際に外国の文化を体験すると日本のよさなどを改めて知ることができることや、他の学校の人たちとも仲良くなれて楽しいというような話を聞いて、私も絶対行きたいと思っていたからです。

オーストラリアは日本とあまり時差がないので、1週間ほどの海外生活は楽しいことばかりだと思っていましたが、外国での生活は想像以上に大変なものでした。しかし、秋田県に貢献できる仕事に就きたいという自分の将来の夢に、一歩でも近づこうと積極的に行動することができました。



ケアンズ空港にて

2 研究テーマ

「どのようにすると、秋田県に大勢の観光客が来るのか？」

3 設定の理由

近年、秋田県では少子高齢化が急速に進んでいるそうです。2016年で84,000人の大仙市の人口が、若者等の流出のために2050年には50,000人程になるという試算もあるそうです。そこで私は、少子高齢化を食い止めるために、秋田をもっと魅力的な県にするためにはどうすればよいのかと考えこの研究テーマを設定しました。秋田が魅力的な県になると大勢の観光客が来て、それに伴い若い人の秋田での仕事も増え、少子高齢化が食い止められると思いました。また、私は旅行が好きで、旅先ではいろいろなことを満喫したいと思っています。だから、秋田をどうしたら満喫できるかということ、県外や海外の人に効果的に紹介できれば、秋田を訪問する人が増えると考えました。

4 調べた内容

① 秋田と言ったら何か（秋田の魅力は何か）

【事前・太田中2年生、先生方へのアンケート】

② オーストラリアの人気の観光スポットはどのような工夫があるか

【研修中・体験、インタビュー】

③ オーストラリアと秋田を比較して

【研修中、研修後・体験】

5 調べて分かったこと

① 秋田と言ったら何か（秋田の魅力は何か）

事前に「秋田県と言ったら何でしょうか」というアンケートを、太田中学校の2年生と先生方

にアンケートをとりました。「文化や伝統」「食」「自然」「生活」「スポーツ」「観光スポット」の6項目のうち、何に魅力を感じるかというアンケートです。その結果は、

第1位 大曲の花火（文化や伝統，観光スポット）

第2位 なまはげ（文化や伝統，観光スポット）

第3位 きりたんぼ（食），竿灯まつり（文化や伝統，観光スポット）

でした。他にも田沢湖（自然）やハタハタ（食）も人気でした。秋田にもたくさんよいところがあるので、これらもどんどんPRして人を呼ぶとよいと思いました。「大曲の花火」や「田沢湖」などの行事や自然を、観光客の増加のためにどう生かすかを考えなければいけないと思いました。

また、市役所の観光交流課では、秋田県は人口減少がかなり進んでいること、秋田に観光に来る人よりも、秋田から他の県へ観光に行く人の方が多いこと、大曲の花火のポスターは東京などでも掲示していて、すでに全国的に宣伝していることなどを教えていただきました。

② オーストラリアの人気の観光スポットはどのような工夫があるか

オーストラリアは温暖な気候を生かして、海で泳ぐツアーや、自然を生かした観光スポットがたくさんありました。また、観光地ではいろいろな形をしたおしゃれなゴミ箱がたくさん置いてあって、ポイ捨てされているゴミもなく、清潔な感じがしました。こうした気遣いは観光客の来やすさにつながっていると思いました。

僕たちが六日目に泊まったダブルツリー・バイ・ヒルトンでは、Webサイトや広告でホテルのPRをしていました。また、言葉の問題でお客さんが困らないように、従業員がいろいろな国の言葉で対応できるようにすることが大事だそうです。そして、これは工夫とは言えないかもしれませんが、現地の人は皆とても優しくかったです。だから、海外から初めてオーストラリアを訪問した人でも安心して生活できると思います。特にコンビニエンスストアの店員がコーヒーのお湯を無料でカップラーメンに入れてくれたときは感動しました。サービスが充実していると言われている日本と同じようなことが、オーストラリアでも体験できたからです。

また、オーストラリアでしかできない体験をPRしていました。私が特に心に残っているのは、次の体験です。

- コアラをだっこする体験
- アボリジニの狩りの仕方や民族楽器の紹介
- キュランダ鉄道からの景色
- 世界遺産のグレートバリアリーフ観光

③ オーストラリアと秋田を比較して

「大曲の花火」の日は必ずといっていい程、毎年捨てられるゴミが問題になります。せっかくの観光の目玉なので、オーストラリアのようにゴミ箱も含めて景観を美しくしていくなどの工夫をすることが必要だと思います。花火のお客さんが帰るときまで街の清潔感を保つことで、皆さんに「来年も来たい」と考えてもらえると思います。

オーストラリアでは、いろいろな国の言語でパンフレットをつくって配布していました。様々な人（国や年代など）を想定してPRしていくとよいと思いました。

それから、オーストラリアは秋田に比べて山間部でも道が整備されていました。右の写真はホストファザーが連れて行ってくれた高台からの風景で、街全体が眺められるとてもきれいな場所でした。風が吹いていて、とても気持ちよかったです。このような場所に行く道路はとても広く、観光客も行きやすいと思いました。



マンガリフォールズの高台からの眺め

6 考察

オーストラリアで働いている日本人の方にインタビューをして、海外の人がもつ日本のイメージを聞いてみました。すると、「アニメのイメージが強い。」と答えてくれました。日本に行く外国人は、アニメが目的の人も多いそうです。このように、日本への観光客を増やすためには、日本に来てもらうきっかけを作ることが大事だと思います。同様に、秋田や大仙市に観光客を増やすためには、最初のきっかけが大事です。秋田にはたくさん観光スポットや、秋田でしか味わえない文化や伝統、食など魅力はたくさんあります。

どうすればそれらを、秋田の魅力を知らない人にも伝えられるのかを考えている時に、テレビで秋田に観光で来ている韓国人にインタビューしているニュースを見ました。その人は、「きれいになるには秋田の温泉」と聞いて秋田にやって来たと言っていました。ポスターやパンフレットに、人が興味をもつフレーズを一つつけるだけでも、人を呼ぶ効果がありそうです。また、アニメが目的の観光客が行く日本の観光地は、秋葉原のある東京です。東京から秋田までの交通の便は新幹線や飛行機などがあるので、日本に来たからには「秋田」に行かなければと思ってもらえるようなきっかけがあれば、観光客を秋田に呼び込むことはできると思います。そのためには、秋田に行かなければ体験できないことを、しっかり伝える必要があります。

そこで、外国人にも人気の秋田犬を使ったPRが一つの方法だと思います。オーストラリアではコアラをだっこして写真が撮れるところがあります。これを参考に、秋田犬を使って触れ合ったり、写真を撮ったりしながら、実際に秋田に来て下さいというPRができると思います。また、今話題の「MOFU MOFU☆DOGS」という秋田犬アイドルグループと本物の秋田犬がコラボするというのも、かなり効果的だと思います。2020年には東京オリンピックがあります。この時、大勢の人が日本に来ることが予測されます。東京オリンピックで大曲の花火を使用してもらおうと、大曲の花火の人気はもっと広まるでしょう。

その他の「なまはげ」や「竿灯祭り」などの文化や伝統、観光スポットや「きりたんぼ」などの食についても、今まで以上に人を引きつける写真やフレーズを載せたポスターやパンフレットを作るなどの工夫で今まで以上に人気が出ると思います。

また、秋田に来た観光客が、もう一度秋田に来たいと思ってもらえるような街作りも大切です。ゴミが落ちていない景観のよい街にするための工夫や、観光地への道路や交通機関の整備などの工夫など、取り組んでいかなければいけないことはたくさんあると思いました。

私たちに出来ることとしては、温かい心で人に接し、秋田の「人」に魅力を感じてもらえるように

することだと思いました。

秋田県が日本有数の観光スポットになり、その結果、秋田で働く場所が増え、少子高齢化による人口減少を防ぎながら、世界に「Akita」の名前が広まってほしいです。

7 エピソード

① ファームステイ

私はJohnさんの家にファームステイしました。鶏をたくさん飼っていました。放し飼いで驚きました。庭にはプールがありました。英語で会話する時に、私は最初は「OK」しか言えませんでした。だんだん話せるようになりました。Johnさんがゆっくり話してくれたので、聞きとりやすかったです。

一日目は滝を見に行きました。雨が続けていて濁っていましたが普段はきれいだそうです。

二日目はバーベキューをしに公園に行きました。Johnさんが準備をしてくれている間に、近くの湖を見に行きました。魚がたくさんいてきれいでした。だんだん食事にも慣れてきました。ソーセージがとてもおいしかったです。

三日目の朝は早起きしてプールに入ったら体が冷え、熱が出ました。ファームステイを断念してマンガリーへ引き上げました。最後の日だったので、しっかり感謝の言葉を伝えたいです。



一番右がJohnさん



Johnさんの牧場 どこまでが牧場かわからない



Johnさんの家のプール ちょっと苦い思い出です



Johnさんが飼っている鶏

② キュランダ

キュランダにある自然公園に行きました。水陸両用車に乗って熱帯雨林を散策しました。水深17mの人工の池に入っていく、とても怖かったです。オーストラリアを代表する動物もたくさんいました。カンガルーは思っていたより小さく、ワニは想像以上に大きかったです。動物園の他にアボリジニショーも見ました。長い棒を使った演奏が、ダンスと合っていて、とても迫力があって感動しました。



水陸両用車からの眺め



初めて見たカンガルー

自然公園の入り口で

③ フランクランド島

一日に100人のみ上陸できるフランクランド島へ行きました。尻尾から酸っぱい液を出すというアリアがいて、実際になめてみるととても酸っぱかったです。その他にも、奇妙な動物や植物がたくさんいて、楽しかったです。また、みんなで砂浜で遊んで日焼けをしたのもよい思い出です。特にauのコマーシャルを再現して、砂浜に相合い傘を書いて動画を撮ったのが楽しかったです。

貝殻やサンゴなど、島の自然を持ち出してはいけなかったり、人数制限をしたりするなど、自然保護がしっかりされており、いつまでも美しい島であってほしいです。

④ 月亭方正さんとの遭遇

ケアンズ市内の散策後に集合場所に戻ると、人がたくさん集まっていました。その人だかりの真ん中にいた人は、あの月亭方正さんでした。2016年の「絶対に笑ってはいけない」について質問したことに答えてくれ、とてもやさしい人でした。芸能人は格好いいなと思いました。

7 オーストラリアで働いている日本人にインタビューしました

私がインタビューしたのは、日本旅行のケアンズ支店長の黒田さんです。

Q なぜオーストラリアで働こうと思ったのですか？

A 修学旅行でロサンゼルスへ行った時、外国で働く日本人を見て格好いいと思い、英語を勉強し、外国で働いています。また、英語は一日に200個の単語を覚えて、それを一年間続けました。

Q どのような英語の勉強がおすすめですか。

A 自分が好きな物で英語を勉強するとよいです。私は釣りが好きだから、釣りに関する英語の本を読みました。映画などでも、一回目は日本語の字幕を見て、二回目は英語の字幕、三回目は字幕なしで見るとよいと思います。寝る前が一番覚えられるから、ベッドの中で辞書を読むのもよいですよ。そして、実際に話してみるとコミュニケーション能力も上がるのではないのでしょうか。

Q オーストラリアで大変だったことは？

A 初めて来た頃は、文化が違ってとても大変でした。食も、学校も、環境も、日本と全然違いました。また、日本とオーストラリアでは物事の考え方が違うのも大変ですね。

今回のインタビューを通して一番印象に残ったのは、「日本人は何を言いたいのか分かりづらい」と黒田さんが言われたことです。確かに、いざ人前に出て質問をされるとなかなか答えられないし、ジェスチャーなどを交えずに、言葉だけで説明しがちです。ですから、黒田さんがおっしゃった「コミュニケーションを大事にする」という言葉を大切に将来に生かしていきたいと思いました。

8 海外研修を終えて

今回の海外研修では、現地の人としっかりとコミュニケーションをとることができました。事前学習会での英会話レッスンや普段の授業で身に付けた自分の英語が現地の人に通じたときは、とてもうれしかったです。これからもっとvocabularyを増やしていき、もっとすらすら英語を話したいです。外国での生活は、時差があったり、食事が合わなかったり、お風呂の時間が違ったりと、日本と違う点が多くて大変なこともありました。また外国へ行ってみたいと思いました。

今回のこの海外研修に参加したことによって、一回りも二回りも大きく成長できたと思います。この成長は、文化や言葉の違いで大変なこともあったものの、20人全員で気を配り、協力し合えたからだだと思います。

今回の海外研修では様々なことを学びましたが、その中でも特に「自分の意見をしっかりもつ」ことの大切さを実感しました。誰かの意見で「いいや」と思わず、必ず自分なりの意見をしっかりもって言うことを大事にしていきたいです。

今回の研修で学んだことをこれからの生活に生かしていこうと思います。

I am truly grateful to be able to have such valuable experience.

Thanks for teaching me and showing me so many things.

(貴重な経験ができて本当に良かったです。たくさんの学びや発見をありがとう。)

